な。

新聞記者の話はきび〳〵して要領がいゝ。中で發表して差支ないだけを書き送る。

この州は世界で女子參政權を一番早く實行した處だそうな。先頃まで女大臣が居たが今は辭職した。

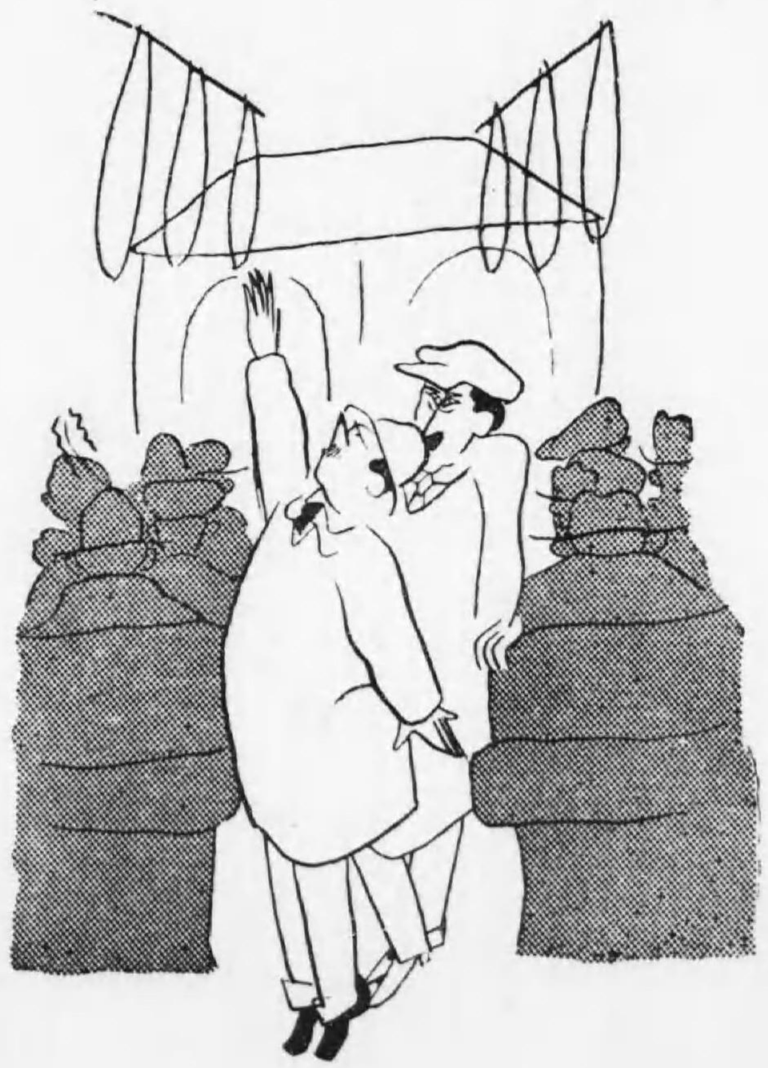
宗教家の力が強い土地。日曜(サンデー)を休息日として嚴重に守らせる。若し日曜に手形を發行したらその手形は無効となる。

各種の外國人が入り込んで居るからこの地の小學校では二十四ヶ國語が話される。

日本人にはなゝま基督教信者(クリスチヤン)が多い。あるクリスチヤンは臨終に思はず南無阿彌陀佛を唱へて仕舞つた。

翌三月三十一日バンクーバー見物。自動車で例のドライブといふ奴だ。九マイルあるといふスタンレー公園に入る。公園といつても荒野(あれの)の中にアスフアルトの道を引き貫いたものだ。アメリカ北部の自然が飽く程身に親(したし)む。例のアメリカ松が鬱蒼として居る。粗剛な草が、身の丈(たけ)より高く延びてる。二千年のシダーツリーがあり、中が洞(うつろ)になつて自動車が入れる位大きい。これが見物(みもの)だ。

カナダの義勇兵に出て戰死した日本人の忠魂碑が立つてる處へ出る。戰死者の名前が六十六刻(きざ)まれ



て居る。其處にわれ等を立たせ、息子の園藝家が寫眞を撮る。一方から觀ればこの旅行は息子の園藝家の寫眞のモデルに歩かせられてゐるようなものだ。他人が寫眞機を捻り出すと、こつちも捻らねば濟まぬ氣がするのが寫眞機携帶者の癖だ。こつちも洋行前俄仕込みの寫眞術をいやいや乍ら發揮する。

この邊展望ひらけ海沿ひの岸から內海になつてる。向う岸にも森林の間に人家が點在してる。又行つて外海と內海と狹い瀨にて通じ居る崖の鼻に立たせる。白日の下に蒼い潮が早瀨をなして流れて居る。おもちやのような白い汽船が烟草のような烟を立てて行くのが可愛ゆい。

傍に天氣告知標の柱を建てゝ瀨戸守る家がある。屋根に時代がつき壁に蔦が面白く匍ひ上つてる。赤い着物を着たかみさんが洗濯板で洗濯してる。繪になりそうだ。矢立てを取り出して寫生をする。おやぢの姿も見えた。手を揚げて賴む。おやぢわざ〳〵帽子を冠つて來て欄に立つて呉れる。

お晝は朝日新聞通信員の石井さんが自宅で牛鍋を馳走する約がある。都河さんと一しよに行つた。輕快なバンガローだ。

日本式に砂糖と醬油とで牛肉をじや〳〵させ乍ら白い飯を喰べる。青い葱があるのが有難い。總ての支度を夫人が一人で、少し石井さんが手傳ふ位でやるのだが、設備が便利に出來てるから客が心配

する程手數でないと石井さんが取做す。そこで臺所を見せて貰ふ。何でもを兼る大ストーブが都河さんの鑑識眼に適つた。俺に寫眞に取つて呉れろといふ。俺が必要の爲め人から寫眞撮影を頼まれたのはこれが始めてだ。この後も無からう。一生一代の名譽の爲めに腕を揮つたのだが、實はいつもは息子の園藝家が傍に居てピントを敎へて呉れるから仕よい。今は居ない。で藝術的直覺に任せシャッターをしぼつた。それでも後に現像させると形が出た。俺の寫眞をいつも馬鹿にする子供にもよく見せてやつて呉れ。

石井さんの子供が土地の學校へ行つてる。日本人の子供同志でも話は英語と日本語とを年分づゝ混ぜて話すと聞き、急に可愛ゆくなり連れて來て貰つて頭を一つ撫る。

近所の眞宗の敎會堂の中を見せて貰ふ。表の作りも洋風なり、參詣者の席は椅子である。正面丈が日本式の佛壇である。このさゝやかなる設けに於て遠く故國を離れた人々が安心を得て居るのだ。その人々の爲めに自づと念佛を唱へるやうになる。

それから鈴木君の家に行つた。俊子女史がお茶の案内をして呉れたのである。

この邊はさびしい場末の町だ。大きいけれども色も灰色に住み古したバンガローが鈴木君の家だ。女史が黑い洋服に頸飾りか何かして居た。問はるゝ儘に日本の文壇の消息などを傳へる。壁に鐵砲がかけてある。二人で銃獵などに行くそうだ。

俺はこの種の生活を主張する人へ、參考の爲め少しく佛敎の話を持出した。女史は俺の說話の隙を見て、

『そりや、あなたが負けだ』

などいふところを見ると、まだ中々自信を曲げないらしい。

同居の人が手傳つて晩餐を馳走になる。

白い身と赤い身の鮨だ。バンクーバーに日本の鮨がある。

時間が來たので婦女界愛讀者の會合へ臨む。都河氏が既に一場の講話を終つたところ、俺にもとあるので、新鮮な林檎を食ひさして、何か喋つたようだ。それから司會者の茂野氏の命ずる儘に記念の揮毫を致した。記念品を貰つた。あとで開けて見たら都河氏とおそろひの眞珠のネクタイピンだ。將來はいざ知らず、今までネクタイピンなどゝいふものは面倒臭くて贅澤で、我が身には意外のものであつた。謹みて好意を謝して置く。

この會合で氣附いた事は、在外の邦人女性が洋裝すると、われ等の眼には既婚の夫人やら未婚の令嬢やら判斷のつかぬことだ。

も一つ氣附いた事は彼女等は邦人のみの室内に於ては、日本式のお叩頭をするが、外へ出ると米國式の儀式に從つてお叩頭が高價くなる事だ。

ホテルへ歸つて一と休みする處へ、鈴木君俊子君他に一人新聞記者が訪問して、揮毫を所望された。絨氈の上へ胡坐をかいて乞はるる儘に書き續ける。夜半まで都河氏が見て居たが、眠くなつて引き上げる。曉方になつた。先程の返禮に近所のレストウラントで食事を攝り訣れた。

又團體となり停車場へ驅けつける。バンクーバー郊外の新開地には燒木杭が澤山並んで立つてる。森林の木を截るのが面倒なので燒拂つて仕舞つたのだとは勿體ない。燒木杭にはこれ幸と石鹸や他の廣告ビラが貼られてる。譯を聞かぬうちは何の事だと思ふ。

再びシャトルへ戻る。汽車乘り換への時間の暇に大北日報社を訪ひ高橋君の話を聽く。

面白い話を聞く。こうだ舊幕時代小栗上野守が親交の爲め渡米した。案外食物に不自由が無かつた。日本から持運んで來た鰹節を便所へ捨てた。それを米人が拾ひ取り、不思議の余り大學へ送つて分析した。確に動物質だ。然し硬い此不思議なものを食ふ日本人は余程變つた人種に違ひないと斷定された。

近頃シャトルの市で猫が頗る高い烟突の項上へ上つて降りられない。動物虐待防止會が多大の費用

を拂つてそれを引下ろした相な。眞面目な話では在米邦人の生活費の額だ。中で、夫婦暮しの職工のものを聞いたから參考に左に紹介する。月收は百五十弗あるさうだ。

十二弗五十仙	家賃但し四つの部屋
二　弗	電車賃
六　弗	薪炭費
三　弗	新聞、本、雜費
一弗五十仙	電燈代
百二十弗	衣服費（但し一ヶ年分）
三　弗	石鹼、洗濯費
三十弗	食物費
二十弗	醫者、藥代（但し一ヶ年分）
二　弗	社交費
一　弗	寺
五　弗	烟草

二　弗　　娯　樂　費

五十五弗　　保險料（但し一ヶ年分）

これで都合百五十弗になるかどうか、俺もお前も珠算盤に疎いから、確な人によせて見て貰はう。

◎第二十一信

世界の旅から歸つて來てもう九ケ月になる。九ケ月の間には話すべき事は話して仕舞ひ、心配してやる事は現にお前とは一つ家の棟に居るのだから、目のあたり心配してやる事が出來る。何を廻りくどい手紙に不便を忍ぶ必要があらうか。歐洲歸りの船の中にて、此度の記事はお前に與へる爲めに書かうと決心したのは離れて居る心の苛立ちが與へた自づからなる入れ智慧であつた。置かるべき位置に物みなが備はる時、何を喧しく手を叩いて他に求むる要があらうか。「おい」「何ですよ」で總ての埒があく。今の身をもつて船中の鬱悶を思ふと本當にわれ乍ら他人のようだ。

でつくゞ思ふ。心は活きものである。又水である。堰けば瀑津瀬、展ぶれば流、靜に澱ませれば水底に雲が行くかと思ふばかりの碧を凝らす深淵となる。淵、瀑津瀬何れを取つても水であると同時に直にそれをもつて水を定義する事は出來ない。それと等しくかの張りつめた時とこの展やかな時と何れも心の有樣ではあるけれど、その一を捉へて心の標本だといふ譯には行かない。無理にそう決めればそれはもはや形骸である。もぬけの殼だよ。

俺れ達の修業は段々頑な小さい自我を捨てゝ行つて、かの天然生粹の心の行くへに身を任せ去ら

んとする事だね。二十年、三十年、若しこの修業がうまく行けば丁度、風に眼鼻が付き、水に手足のついた人間になる。宇宙大だ。神も佛もこれ以外にあるものか。

この心をうつかりすると動物上りの本能的の感情と間違ひ易い。故に必ずや眞純な精神と愛の甲冑を着けてこの境涯へ戰ひ入る用意が肝要だ。お前は比較的惠まれてこの精神と甲冑を生れ乍らに何處かに持つてる。その代り世間の事はやくたいも無い不器用だ。俺れは世間の事は聊か覺えがある。それとエネルギッシュな處が身上だ。これ等の小錢を集めて、かの甲冑を、箙、草摺、といふ風に、そろそろ買ひ集めて行く積りだ。

これを修業の道場と思へばこそこの浮世にも生き甲斐がある。そうでなければ俺れが好きな朝湯さへ此の頃は湯屋がけちんぼして沸てない不自由な世の中に誰が生きて遣るものか。

この繪手紙を書くのに前の動機は右の如く滿ち足つて消えて無くなつたが、又新しい動機が勃然と湧いて來て居る。今の安泰の環境にて世界の旅の有様を、ふつくり誰人にも快よく味へるよう繪手紙に仕立てたい。前の繪手紙が切迫した實感の動機から來たとすれば、これからのはゆとりのある藝術本能から出立するとまあ大きく云へば云へよう。

晩春のあたゝかい夜半に炭火をおこして身に離して置く。紅茶の茶壺をかけ、可憐な沸音を立てさせて置く。何れも心を人々に親しくさせ氣を和めるよすがになる。階下の室ではおまへがくしやみしたからおまへも確に生きてる。寄宿舍の子供から來たあまへた繪葉書が前に置いてある。子供も生きてる。有難い有難い。外にはしめやかな雨。扨机に向つて書き出す話は、シャトルより汽車に乘つた處からである。

乘つた汽車はアメリカの汽車だから全體が大きくて立派。われ等には就中上等の室を取つてあるので、一人々々籐椅子を占領し、仲間と話し度い時は車内へ向け換へ、景色觀る時には窓の方へ好き自由だ。

空氣の乾燥する米國とて車内の處々に氷の水が備へられてる。飲まんとする時には折つた紙のコップを摘み取り、フツと息を吹き入れると圓くなる。

ボーイは黑ン坊。ステーションを發車する時に、この黑ン坊が乘り降りの踏臺を仕舞ひ込み、『ゴーオン、ボールドー』と叫ぶだけ、汽笛も鳴らさずに行く。故に注意されずば可成り失敗があつたらう。

洗面臺の洗面器が、日本の汽車のと違つていつもピカ〳〵光つて清潔。その管である米人達は使用濟みの後はちやんと一々掃除をして拭いて行く。自然こつちもそうするようになる。

窓外の景色は南下するに從ひ、森林を燒き拂つた後の燒木杭が追々少くなり、野が開拓されて來る。

たゞ畦も仕切りも無い廣い地に土塊が一ぱいひつくら返つてる。田だか畑だか判らない。耕人が馬を三頭五頭つけて大きな器械で鋤いて居る。お百姓が帽子を冠つて洋服を着てネクタイをつけて靴を穿いて泥の中に立つてるから、われ等の眼には一寸奇妙だ。梨の花が見える。

西洋の田舍家が稀に見える。住宅には必ずミルク搾取小舍と風車小舍がついてる。人影がめつたに見付からぬのにアスファルトの立派な道路が何處にも導かれてる。村人の往來は大概自動車だ。

大概見飽きた頃、日暮れタコマに着く。一寸した市、われ等が火事だ〳〵と騒いだのは木屑を燒捨てる火の山であつた。木屑を燒捨てるのでさへ米國はそれ程大袈裟だ。

寢臺も大きくて樂。東京の文房具屋さんが下で無くては寢付かれぬとあるに、俺れが上の寢臺へ身代りとなる。朝、汽車の食堂でも例の風呂敷のビフテキ式の大皿だ。それを日本流にあれやこれや一行は取り散らかすので、日本人は朝食に一弗半喰ふと評判になつた。グレープ、フルーツといふ、夏蜜柑を香氣よく一層甘く且つ水氣多くした果物に砂糖をかけて持つて來る。これと氷の水を飲むのが朝の樂み。朝食には必ず果物を攝るのが米國式で、果物の豐富な米國で無ければ出來ない贅澤だ。晩めしには生蠣をトマト、ソースに和へたもの、貝の剝身入りスープがうまかつた。バンクーバー、シヤトルの日本人街で辰夫と協力して仕込んだ梅干、生姜、鹽辛等を食後藥用と稱して少しづゝ喰べる。

生き返る心地、黒ン坊のお給仕はどつとせぬ。

老建築家が車室内の板の木目を自然木のものか描いたのか研究する爲め所々を叩き廻り扉の處へ行つた。其處は家族室にて中から『カム、イン』の聲あり、妙齢の婦人が首を出した滑稽は卽ちこの日の出來事である。その言譯には息子の園藝家が木彫の舌出し達磨か何かを持つて行つて贈り、取做して來た。孝行息子さね。

通譯子がベルのボタンにもたれ、それが自然壓されたのを知らず、ボーイの黒ン坊が用を聞きに來たのを『誰が呼んだ〳〵』と尋ね廻つた失敗もこの日の出來事。

深夜ボートランド着。停車時間を利用して市中見物。案内には車中知り合ひになつた米青年が連れて行く。街には電氣のアーチが通路の空に張られ頗る繁華。喉が乾いたので一同カフエへ入る。そこの給仕女は丁度日本の亡者が額につけるゴマ鹽と名附ける三角の紙切、あれと同じ形のものを額にして髪を鉢卷して居た。歸りに一軒の自動車店のショウ、ウインドを覗き、人形の美人が乘つて居るのを見て、老人達、『人形共一しよに自動車が買ひ度い』なぞいふ。若い者の手前も憚らずに。

寢て夜が明ける。そろ〳〵山が見える。南下して來たので暖くなる。山の脈と平地との間に幾うねりの小山、丘が重ねて浪打ち、小山、丘は全部綠の軟草で覆はれ、眞にびろうどの毛氈を敷いたよう

である。羊群が三々五々首を草に垂れ、遲々として喰み歩んでる。丘の附根には菜の花！　日本と同じ菜の花である。日本式の長閑な欠伸をし度くなつた。した。い、氣持ち。

山地の松は日本と同じ松ながら風無き爲めか幹が眞直ぐに伸び、枝がシンメトリカルに垂れ下つてる。繪に描いても日本の人は誰も松とは受取つて呉れまい。河があり、岸に猫柳が生えてる。シヤスター山を遠望する。好景。釣人が釣つてる。釣人も勿論帽子を冠りネクタイをつけ靴を穿いてる。

俺れは朝の習慣で大便所へ入つた。その儘汽車はステーションへ停つた樣だ。用便後排泄の紐をひいて後外へ出ようとしたが、扉に鍵がかゝつて出られぬ。止むなく立往生して發車後扉の開いた後出た。すると大騷ぎをやつてる。誰か停車中、大便器の紐をひいた奴が居る、西洋の汽車の便所の排泄口は横についてるからプラットホームへ汚物がみんな噴出して仕舞つた。斯く口々に罵つてる。そこで俺れは頭を搔いて白狀して仕舞つた。『だから停車中便所へ入れぬよう鍵をかけて仕舞ふのです』と通譯子が說明して聞かした。俺れは耻かしい想ひをして玆に一つ學問した。俺れのうんこに洗禮された氣の毒なステーションの驛名はローズバーク。

◎第二十二信

アシランド驛の構内に小亭が設へあり、中の硝子張りの箱の底の小砂利の間から自然鑛泉が噴出するのが覗ける。何れも五錢入れて器械から紙コツプを抓み取り飲む。旅の一興だ。アルカリ性泉らしい。

汽車は深い山中へ入る。先頃遠望したシヤスター山の間へ登りつゝあるのだ。高サ一萬四千尺。この日同じ程の海拔のマクローハム山地を、も一つ越える。

山を越えて一層暖くなる。

明くれば四月三日。食堂車で大概のものに飽きた。献立表は勿論不案内の一行。互に食堂で食べて來たあとで『何かおいしいものに當りましたか』と尋ね合ふ。おいしいものに當つた人は一同より幸運を羨まれる。

サクラメント河は汽車を船で渡すといふ話は前々より聞いて居た。で汽車が河の手前オークランドについたといふ知らせに急いで窓より首を出し、どういふ大きな渡船が汽車を乘せに來るか見物だと眺めても一向その様子も無い。よく氣をつけて見るとなんだ、もうちやんと汽車は二つに斷られ二列に渡船に乘つて居るのだ。船といふより長方形の棧橋が其儘動くと思つてれば間違ひはない。岸のと同じ線路が船の中にもその儘引込まれてある。汽關室は兩側にあり、船橋は乘つた汽車の上に高く跨

がつて架けてあるから、車庫の中に在ると思つたのも無理は無い。笛が鳴つて鎖を解く。解かれて流石、船だから汽車の重みで船の線路は陸の線路より少し下へ沈む。船は大河を横ぎり對岸へ着けば、此度は船の線路は陸の線路と合し、渡船はステーションの出店のような形となる。汽車は船に禮も云はず不愛想にすぐ樣陸へ走り進むといふ次第。馬鹿々々しい程平氣でやつてる。

米國の器械力に合つては困難や危險といふ事は價値を改めさせられる。

漸く汽車が仕舞ひになつて廣い海のフエーリボートに乘せられる。愈々向うが桑港だ。切つたカステラを高低並べ立て、押し合ひ脊延びをしてるような建物が岸に見える。

廣い海の四周何處を見ても丘の渚には赤色赤銅色の工場らしいのが烟を上げてる。してこの廣い灣には米艦隊悉く入れて、外海よりはその氣配も覗はせぬ程悠々と繫いで置けると聽く。日本人として嗟嘆しなければならぬものがある。

右手に小島が見え建物がある。天使島といひ、日本の移民なぞ監禁する島だ相だから一向われ等に取つて天使島でない。

自動車で高い丘の上のフエアモントホテルへ一先づ落付き、それから直ぐに見物だ。

桑港は丘の凹凸の斜面に建設された市、されば繁昌の町も坂に多い。電車は坂の處は底部に齒車を出して引つかけ上つて行く。

ブレシデオ兵隊屋敷を見せる。桑港で一番古い家。アメリカインデアンが建てたものといふのを見せる。たいして感じない。それより大きな棕櫚の樹や、南洋諸島の寫眞で見受ける名前を知らぬ濶い葉の高い樹が建物に覆ひ冠さり、熱帶地趣味がおびたゞしく加はり來るのに昂奮を禁じ得ない。

金門海峽を見下ろす丘陵へ自動車は上つて行く。大砲が二門太平洋へ向けて備へられてある。この大砲を誰にでも平氣で見せて置くのは、心あつての事か心無くての事か。大砲の臺尻に菜の花がしほらしく咲いてるのが一種の對照だ。

海峽を挾む左右の打開いた嘴角は鑛金屑のような不味な赭岩、その間に當つて見遙す浪の續きの漂渺として地平線の稍圓味を保つた一文字に入る處が太平洋だ。この時お前はこの先き何千マイルに居たんだぜ。

今は階下に居てそら又くしやみをしかけて出損なつた。風邪でもひいたんだろ。早く寢ればいゝに。今は直ぐに氣附いてやれるのは近くに居る有難さだ。が、その場合はたゞ沖を睨んで家の者は今時分何をしてるだらうと想ふ計りであつた。

陸の方を顧みると森を背景にして野廣い草原になつてる。活發な身なりの娘達がゴルフをやつて居

る。

其處を廻り下つて海岸の輕快な建物の處へ下りる。繪葉書を賣り記念の寫眞撮影を勸める。眼の前の海中に五つ六つの岩礁がある。

案内者がよく見ろと云ふ。よく見ると何か居る。一つ二つ海へ飛込む奴もある。あしかだ相な。故にこの島をあしか島と名付ける。

見物し終り、建物の並んだ海岸を車を走らせる。浪打際の砂には男女幾群が日に當つて浪を見てる。一つの建物の中から一人の男が急いであしかを追出し、自動車の側へ來て吠えさせる。何だと思つて降車ると男は執拗く建物の中へ見物を勸める。建物には海洋博物館と名前だけは大袈裟だ。入つて見るとつまらぬ。魚介の剝製、鯨の骨などが少し許り陳列してあり、他にあしかが檻の中で吠えて居るたけだ。分別盛りのおやぢ共を混ぜて十一人、眞面目くさつたこの見物は如何にも赤毛布式らしくていゝ。

金門公園へ入る。廣さ千二百エーカー。ここの公園は日本の公園のようにいろ〳〵と手を盡した場面が續いて居る。池、橋、見晴らしの臺など西洋式のがある。

ぐる〳〵十七マイル走つた相な。獨文豪ゲーテとシルレルの銅像がある。佛彫刻の巨匠ロダンの「考へる人」の複製が置いてある。桑港の公園にしては意想外の置物だ。園内にはオランダの風車と日本の庭園茶亭がある。これは博覽會當時の遺物。次に高くて桑港市を見晴らすツインピークの丘を乘り廻したが、生憎霧がかゝつたのと、眠つたのとで譯が判らぬ。

晩餐後、ボードビルを見に行く。これは西洋の寄席。中年の女が水兵の着るような、胸の開いた上衣を着て、眼の下に濃い隈を取つた厚化粧をしたのが舞臺に出て來る。一本の綱を端を環に結んで中へ身體を入れ、他の端を頭上に高く持つて廻す。廻して行くにつれ身體の入つた綱の環は追々大きくなり行き、終に十二疊敷位の丸さに廣がるのを床につけず巧に廻す。一種の藝だ。それから身體の丈夫な二人の男が出て來て力の輕業をやる。差し上げた兩手の上へ相手の男を逆立ちさせたり、終ひに頭の上へ片手で逆立ちをさせる。其他は多く輕口入りの獨唱だの、音樂、いろ〳〵の眼裝で出てダンスをやるダンスは大概男と女と對だ。靴を七草の齊を叩くように音樂に合せ、舞臺を蹴合せ乍らいろ〳〵のお轉婆な身振りをやる。巫山戯たのになると、四つ匍ひになつたり、女をでんぐり返りさせたりする。ダンスを少しゆるめては唄をうたふ、その唄が警句混りらしく、見物一同時々どつと笑ふ。

俺れ達はあつけらかんだ。

翌日午前桑港の對岸オークランド見物。加州大學の希臘式劇場を見せる。蒼空の下に舞臺と圓い階

段になつてる客席とがある。それから見晴らしのいゝ丘へぐる〳〵上つて行つた。綠の草の傾斜にグワムの樹がすく〳〵と立つてる。それを透かして金門灣の景色は又別の味だ。今この桑港の附近はこんなに瑞々して靑いがこれが夏になると草は渴して赭くなり殺風景だそうな。

ホテルに歸つて晝飯に人が蟹を喰べてる。

こつちも喰べ度くなつたが、英語の蟹といふ字を度忘れして仕舞つた。そこで献立表の裏へ筆で蟹の繪を描いてボーイに見せた。ボーイは難かしい顏をして眺めて居たが、頓てにやりと笑ひ運んで來た。俺れは、繪は世界共通の世界語だと、息子の園藝家に自慢をしてやつた。息子奴俺れが繪を描く時クス〳〵俺れを輕蔑したような顏をして笑つた癖に、蟹が來たら禮も云はずにむしや〳〵喰べた。そしてうまいといつた。

午後、日米新聞の伊藤七司君に案内して貰つて、夕刊新聞コールの漫畫家アルゼンス君に面會に行つた。俺れは自著の「物見遊山」を贈つた。若い無口の靑年、只今桑港の名士の似顏を紙上に發表して當つて居るそうだ。米國でいゝ漫畫家は年十萬ドルは樂に得ると聞き、結構な國だなと思ひ、又あの低級な日曜ポンチのみを强らるるならば、十萬ドルでもご免だとも思ふ。

晩、一週一回日本食の約束を實行して日本料理店常磐へ連れて行かれる。

相變らずうまかつた。

婦女界愛讀者の招待會に都河さんと共に臨み、何か喋つた。雜談のうちこれ等の在留婦人が外出する時先づ一生懸命考へるのは子供の始末であると聞き、頭を垂れた。こゝは教會めく建物の中で、會の進行も自づとその匂ひがあるようだつた。この會で思ひがけなく友人のワン君に遇つた。

ワン君とは綽名。山陰道米子中學の英語の教師をして居たのを廢し、志を立て妻子を殘し、米國へ渡つたのを嘗て送つた事がある。然しこゝに居ようとは思はなんだ。今は加州大學の大學院研究生だ。ホテルへ一しよに伴ひ久々の話をする。中で他人にも興味のある話は、米國が禁酒國となつてから、酒は家庭でどし〳〵作るようになつた。毛唐の男と話せば酒の話許り、それ程彼等は酒に渴してゐる。加州米は日本市場で二等米に匹適する。日本人が女と支那人の賭博に落す金三千萬圓也。桑港は氣候がいゝから洋服一着で濟ます人が澤山ある。等云々。

四月五日桑港出發。出發前、日本で新劇女優であつた上山浦路女史が來て、邦字雜誌發行の爲め繪を需めらるゝ。女史は舞臺に立つても世話女房らしい處があつたが、洋服を着た今もやつぱりその氣質が見える。同室の京都の縮緬屋さんに紹介する。挨拶する兩者のコントラストが一寸奇だ。汽車の中へ入つた時、浦路君の夫君草人氏が禮に駈けつける。夫妻共嘸苦勞をした事であらう。

◎二十三信

汽車はひたむきに南下する。窓外の景色は加州の野。米人の所謂カリフォルニヤビューティイ（加州美）と稱するだけあつて美しい。撫でゝやりたい樣な峰と山、それがうねり下つて今度は寢ころび度いような綠草の丘。丘から廣い野に移れば絨氈の模樣もどきに紅の點々が綠の地に織り出されて居る。それはカリフォルニヤポツピーと稱する雜げしの花である。

この長閑さの中に住む人の家は赤屋根に風車臺がついて居て牛乳を搾る小舍の傍には牛が鼻面を向き合せ、つぶらうか開こうか思案中といふ眼をしてる。

こう書くとそれはそれは愛すべく掌にも取り度いような景色にも思はれようが、然しこの景色は全體の上から云つてずーつと大柄なのだ。

米國が加州を大事がり日本に取られでもするよう移民を拒むのは故ある哉と思ふ。

あんまり廣い爲めこゝではさのみ風も無いと思ふのに遙地平線の村の空に當り陸の龍卷が騰つてるのが見える。

お晝に食堂車で黑ん坊のお給任で食事が濟むと又うつら〳〵と眺める。眺め飽きて仲間のうちで日本字の書物を讀み出したのがある。覗くと『關東七人男』といふ講談本だ。米國は加州の汽車中で『關東七人男』は一寸奇拔だ。

やがて山にかゝる。名前はサンタ、ルウシア、マウンテン。七つの墜道がある。山を越へるといよいよ南國だ。林檎の花がもう老いて汚くなつてる。

夜ロスアンゼルスに着く。ステーションを出ると、矢庭に肩を叩くものがある。見ると若い日本人だ。名乘りを擧げられて見ると三人とも美術家だ。自動車用の革の外套に革手套飛行機乘りのような帽子を冠り長髮を垂らしてるのが六角君。他のポヘミアン襟飾をしてるのは原君とその友人。何れも當地で働き準備整つた上はパリーへ遊學を目的の美術家だ。

美術家同志の交際といふものは甚だ調法なものだ。互に美術家であるといふ事それだけで大概、心の用心棒を外して仕舞ふ。異鄕の空では尙更である。

『ぢや。明日君等と一しよに遊んで歩こう』

『クックの案內なんかよせよつまらない。僕等が自動車を持つて來るからそうし給へ』一見してすぐこんなぞんざいな言葉を交して訣かれるやうになつた。

ステーションには婦女界關係の洋裝の若い女性も歡迎に見えて居た。

アレキサンドリヤホテルといふのへ泊る。

シャトルで船を上つてから、一人室の時は兎も角、二人室の時は屹度京都の縮緬やさんと同室する事になつた。

このおやぢは小僧から叩き上げ、今は相當の縮緬問屋になつた人。又牛肉も洋服も生れて始めてでありながら、押して世界一周に加はらうとする程の人だから、何處か勝氣で一克なところがある。

その點で仲間から稍敬遠される傾きが無いでも無い。自分もそれと悟つて二人一室の時は他の人はあかん、岡本はんあんたはん一しよになつてお呉れやすいなと、船中より見込まれた。俺を人を敬遠する程神經の鋭くない人物と見たのかも知れぬ。それで辰夫がニューヨークに殘り、都河氏と俺と部屋を一しよにするまで米國中での宿屋は俺がこのおやぢを引き受けた。

俺にとつてはこのおやぢ仲々調法だ。綻びを縫ふ糸も針も貸して呉れるし、出立の時はだらしのない俺の爲めに一とわたり荷物の仕末を見て呉れるし、朝も時間にはちやんと起して呉れる。

その日の見物が仕舞ひ、室に入つてからおやぢ何をするかと見て居ると、わしは雪隱と湯は長いよつてあんた先にお入りやすと俺を先に湯に入れる。俺と代つて成程、長い間小一時間もちやぶ〳〵やつて、出て來る時には屹度日本の錢湯から上つて來たと同じ調子に手拭で頸を拭きながら、

『あゝえゝ湯やつた。頃合ひの湯やつた。あゝ心地好う！』

といふ。熱湯も冷水も栓の捻り具合で自由に出せる西洋のバスだもの、湯が頃合ひにならぬといつたらホテルの持主は謝罪るか怒るかしなければならない。

おやぢは浴衣に着更へ、ベッドの上へきちんと坐り、眼鏡をかけ針仕事をやる。何處かで買つたワイシャッだかヅボン下だかゞ大きくて着られぬ。それを縫ひ縮めるのである。それが終ると今日買つて來た繪葉書や寫眞帳を出して一々丁寧に擴げる。

『岡本はん。これ何どす』

と聞く。說明すると

『おう。そうだつか。偉いなァ。高さがそんなにおまつか。どうじや』

如何に大きく驚いて世界一周の効能を身に浸みさせようかと努めるように見ゆる。驚き終ると又、

『岡本はん。これ何どす』

と來る。

その返事をする俺は大塚さんの浴衣に對し、安樂椅子の上に胡坐を搔いた越中褌一つの丸裸だからホテルの室内の裝飾に若し生あらばやり切れぬ奴と顏を獅嚙めた事だらう。

それが終ると京都の老友連に繪葉書を書く。文句は大概世界見物の吹聽である。

ある夜特別に念入りに手紙を書いてるので

『△△さん何處へ出すのです』と訊いたら、

『家内へどすね』

『あなたも奥さんに出す氣がありますかね』

『阿呆らしい。わしとわしとこの家内とは仲がよう合ふてますのい。家内は大事にしてやりまつさ』

それからよく訊くと、このおやぢ子供が七人とか八人とかあるが、日本に居る時でも夫婦だけで旅によく出かけるといふ、一克おやぢにしては此點思ひの外の西洋流だ。

『あなたが奥さんに書くといふ手紙はどんなでしよう、見せませんか』

そういふと腦天から黄な聲を上げて、

『あかん。あかん。わてところの家内とわてとの間にしか通用せん事ばつかり書いたんや。これだけは見せられん〳〵』

とどうしても見せなかつた。

故國から携帶の乾菓子を獨り言をいひながら、大事にボツリ〳〵喰べ、それからベッドに入り寢付

くまで『無病長壽法』といふ本を讀む。

『ほんまや。食を少うして氣を輕う持つ。これが永生きの第一や。』

とこう感服する。これが壁一重外は文明の米國であるホテルの室内の泊り客の一人だ。俺はこのおやぢがどことなく氣に入つて來た。苦勞をして、人を多く遣つた經驗を持つおやぢだけにイゴイズムの中に何處か手擦れのした練れた愛嬌がある。一行中で老人として面白味は老建築家だが、このおやぢはそれと又別樣の面白味がある。

翌四月六日。約束通り三人の美術家が自動車を持つて迎へに來る。一行と分れて別に見物に出る。空が碧く澄み切つて明い。市を出るとバルム樹や、オリーブの樹やそれにオレンジの樹が橙黄色の實を一ぱいつけて居る。それが濕氣を受けぬ明快な色や形の家に照り榮えて胸を一層爽かにする。身體が踊つて血が湧く。

この天地の間に在るロ市は活動寫眞撮影地として世界に覇を唱へて居るのはもつともの事である。自動車は進んでハリ、ウッドといふ町につく。こゝは別けても活動寫眞の中心地だ。町全體が殆んど活動關係のもの許り住んでる。フイムルの全世界産額の九分通りはこゝで製造されるといふ。

こゝの第一の撮影會社、日本にも名の知れて居るユニバーサル會社を見物する。六角君は今はフイ

ルムの仲介をやつてる。その上例の異樣な長髪ゆゑ、この界隈では通り者だ。會社の受付は直ぐ樣われ等の見物を許した。

六角君の長髪について一寸面白い話を紹介して置く。

彼はこの土地へ來たてに窮乏した。且頻死の病氣にかゝり施療院へ運び込まれた。彼は蒼白の顏面に鼻も唇も薄い女のように見ゆる男である。それに長髪だものだから、病院では女患者として受容れた。米國の病院では入院患者は先づ入湯せしめる規則がある。看護婦が彼を浴室に引連れ裸にした處が男である事が判つた。看護婦は叫聲を擧げて逃げ出した相な。

撮影場は隨分廣い。大きなパラック内には幾つも撮影舞臺としての室がある。

古代ギリシャ式のもの、中世紀のもの、官廷内の接見室、現代では富豪の部屋、中產階級の部屋、貧民の部屋、ありとあらゆる階級と種類の樣式を備へた住居が皆悉く揃へてある。いつでも好き自由に使へる。パラックの外の庭には電車が敷けてる。汽車が置いてある。波止場から船の舷側を見せたものがある。古い城塞がある。崖から池へ飛び込む仕掛けの場所がある。小さな町並が書割と建築と程よく混ぜて出來上つてる。驚く事には噴火山まである。その山の書割の後で烟を燃せば全く何千尺の活火山と誰が眼にも見擬ふ程眞に迫つて居る。乘物の部には日本の人力車も用意してあつた。暴風を起

すプロペラのついた機械もあつた。

中庭には撮影役者の一隊が休んで居る。顔に毒々しい隈を描き、紅、樺色、紺等の染分けの綻びたような着物を着て大反りの劍を杖についてるのは中世紀あたりの山賊だらう。

その傍に脊中に可愛らしい羽翼をつけた天使が足を投げ出してる。銃を擔いだ兵隊が一大隊程陽に當つてる。喪服をつけた魔女。頰に星を描いた道化人。牧童等、舶來の手遊箱を引つくり返したような有様。

ある室で喜劇を撮影して居た。扉の鎧戸のような横長な水銀燈を幾つも積み重ね射かけるので室内は明滅せぬ電火の中にあるよう物凄い。場面は寢室の態、今一人の怖ろしい泥棒が忍び込んで行く。ベッドの上で稍瓢輕な優男が之を見付け、魂を消して敷布の下へ潛り隱れるといふ可笑味である。意外に思つたのは一つの仕草を『いけない〳〵』といつて舞臺監督が役者達に何遍も遣り直させる事だ。場面ではあんな滑稽な馬鹿々々しい身振りをする喜劇役者達が、一仕草毎に舞臺監督のところへ來て眞面目になつて演出を打合せる事だ。喜劇の相談とは思へない。一身上の重大事でも圖つて居るように見ゆる。

フイルムの上では輕々と見過す一刹那にもこれ程の苦心が育まれて居るのか。素直に自然に見ゆる

もの程その底に數知れぬ人爲的の技巧が地固めに埋没され居るのだ。俺は平常考へて居た藝術に就ての或考察に一種の裏書きを與へられた氣がして有難く思つた。敬謙な心持ちになつて自づと帽子を脱ぐ。

休憩の數分間にその喜劇役者に紹介された。名前はフエーリ、エドワード。日本にも一寸知られた役者だ。俺が漫畫家であるの故をもつて、彼は愛想に俺の寫生帳へ彼の自畫像を描いて呉れた。俺が貸し與へた竹の矢立の毛筆を物珍らしげに見て居た。

他の室では正劇をやつて居た。女ながらも軍服を着て縮れた長髪の頂に土耳古帽を冠つて居る。身體も顔も小柄だが眼が凝つて大きく、バルカン半島の風物を連想させるような女。右手にピストルを擬し靜々と迫り寄る。ピストルの口が眼の前一二尺の所に來た時、室内の腕椅子に掛けて居た柔らかい性格の宮廷の王女らしい女は一寸相手の顔を見てそれからほつと息を吐き、運命には逆らへぬといつた風に悪びれず軍裝の女の命ずる儘に部屋を出て行く。この仕草も何遍か遣り直してまだ滿足を得ない風だつた。

書になつたので、場内の食堂へ入る。食堂の仕組はカフエテリア式になつてる。この式は後にニューヨークの部にて詳しく説明する積り。故に略す。

食べ乍ら見廻すとどの卓も活動俳優許り異様な着附けの儘で食べてる。大立物の役者も馬の足もみな均一の同じ皿を喰べてる。流石は平等主義の米國だ。

氣が付くと先程ベッドで慄へたフエーリ、エドワード君が相手の泥棒と差向ひで盛に談笑し乍ら喰べてる。脅迫した軍裝の女が脅迫された宮廷の王女と睦じく喰べてる。軍裝のバルカン風の女はそれはブレシラデーンであると教はつた。彼女は活劇の上に敏捷活潑に動く小氣味よき擧動と東洋な小柄で明確な風貌とが、外國よりも寧ろ日本に最屓をより多く持つ相な。ブレシラデーンといへば、日本の活動狂には可成り人氣がある女優だ相な。俺は六角君の紹介によつて彼女に紹介された。俺は活動通でも何でもない。從つて彼女の價値は全く知らないのだが、こうなると一言の挨拶なかるべからずだ。そこでさも知つたか振りをして彼女の日本に於ける人氣を吹聽してやつた。したら彼女は少女のような無邪氣な悦びを裝つて呉々も日本の最屓によろしくと握手をした。茲に『この書』を通じて、つひ脊負ひ込んだ厄介な活動女優の傳言を日本の活動狂に傳へて置く。

活動役者達の顔を晝中見ると鉛色の白粉に唇の紅は紫色に近い。だからみんな死人の寄合ひのように見える。これが一度び水銀燈の中に立つと、大理石のような白い膚と、丹花の唇に生きる。それを見積り豫めかく化粧するものと見える。

見物し終り長驅して海岸へ出る。サンタモニカビーチといひ、ベニスの名で一般に通つて居る遊覽場所。海岸一帶に玉轉がしやら、木馬館やら、見世物やら、飲食店やらの大きなけば〳〵しい建物が一小市をなして居る。子供よりも大人の遊ぶ仕掛けの遊技場が澤山ある。遊技場を覗く。鐵の柵で丸く周圍を圍ひ、その中に二三人入れる、堅に圓筒形の車體が幾つも廣い床を運動してる。車體から上へ電車のポールと同じものが出て居て、室内の天井の電流の通ずる綱に觸れてるから動力は、電氣だ。車體の内の人はハンドルを廻せば好き自由に前後左右へ走れる。乘手は車體を向け換へては他の車體とぐわち〳〵と衝突させ合ふ。これが遊戯の目的だ。こつちの車體に衝突させては又あつちの車體に衝突させる。男のみか女がやつてる。衝突すると双方聲を擧げて笑ひ叫ぶ。野性——冒險——戰鬪的——お轉婆——子供的——遊技にも米國の男女はよくその氣風を表してる。

涸れた鈴蟲の鳴く音を立てゝ居る見世物に入る。一つの木の園ひが出來てる。園ひの隅に頭や顏が妙にひねくれて瓜程に小さい、それで居て年寄つて皺が出來てる畸形の女が編物をしてる。番の男が何かと云ふと、ちよびちよびした態度で愛想をして枯れた片手を出す。握手をしようといふのだ。前に活動女優に握手をして今度畸形の女に握手をしないといへば日本男子は女に依古最眞があるものとなる。其處で日本魂を振り起して思ひ切つて握ると、その手は陰氣な冷たさだ。日本男子にも嫌な氣

持ちはやはり嫌な氣持ちだ。それはそうとして人道主義を高唱する米國がこんな見世物を公開して居るのは矛盾ぢやないか。序に聞いた儘を書いて置くが、米國のある市の祕密のカフェでは酒を滿たした大硝子壺に裸體の女を漬け、その酒を周圍で酌み分け飲むで興がつてるそうな。米國は染め付けの更紗模様だ表と裏とはたいした相違。

も一つの木の圍ひの中には、すゞ蛇が扁たい首を立てゝ鳴いて居た。これが涸れた鈴蟲の鳴く音の正體である。

その先へ行くとピッグスライド(豚滑り)と看板をかけた遊びがある。向の臺の上にヂャズ、ハム、プチー、サムと貼札した箱がある。見物の手元の臺に置いてある。珠を取つて、臺の腹に並んでる穴を眼がけて投げ込む。今俺が投げた球はハムの箱の下の穴へうまく入つた。すると箱の蓋が開き、そこからひよつこり小豚が顏を出す。小豚はあたり見廻し、それから臺から床へ架けた板橋に歩みかゝる。板橋は急なものだから小豚は思はず滑り落つる。その滑稽な樣子！　小豚は床に落つると鼻の先に餌箱が置いてあるので滑つた事も突嗟に忘れ、首をそれへ突込む。

無邪氣な面白さにこんどはヂャズ公を滑らせよう。今度はプチーだと知らぬ間に珠代は嵌む。

夕方浪音高くなる迄遊び、暮れた市中へ歸る。日本人街の、ある洋館の陰におでん屋がある。日本

と同じく小さな臺店に日覆けの幕を垂らしてある。原君その友達と三人で首を突込む。ぷんと嬉しい鰹節の匂ひがする。半紙に毛筆で出來るものを列記して貼つてあるのを讀むと、

めし　天丼　うなぎ丼
しるこ、ぞうに　なべやきうどん　おでん
天麩羅　親子丼

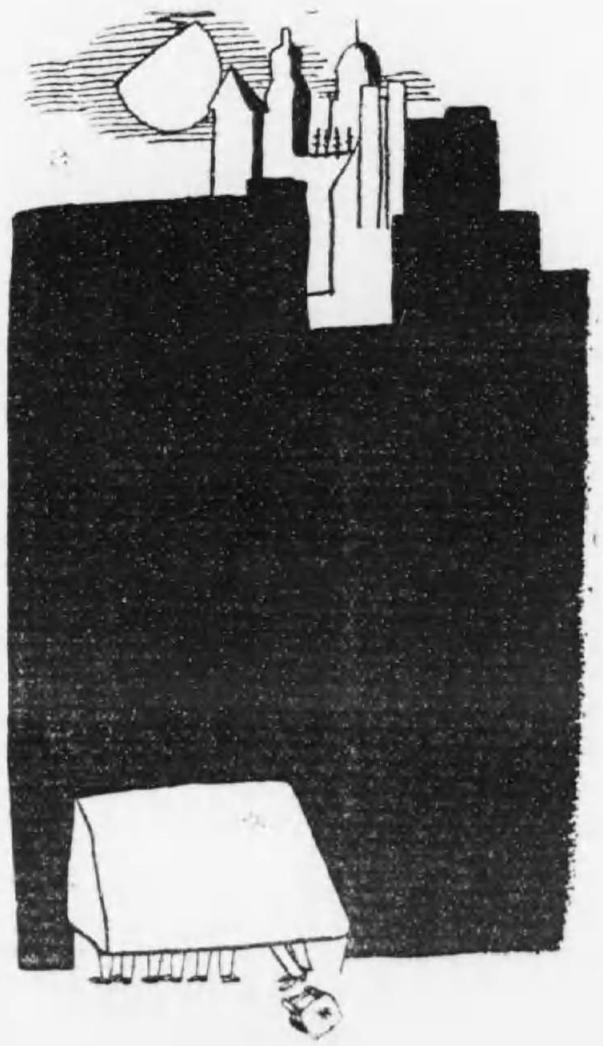
これ〳〵である。貼紙に並んで龜井戸みやげのまゆ玉がさしてある。柳の若枝に下げた千兩箱、蕪、當り矢なぞ、洋服の中に日本の褌を締めて居る俺を破顔せしめずには置かなかつたのは勿論である。あるじはがつしりした四十恰好の男、脊廣を着てエプロンをかけてる。

『來たか。もううめえものは何にもねえぞ。おでんかそれでなけりや豚豆腐だ。』

このぞんざいなべらんめえ句調を賣物にしてる呑氣長兵衛といふ名物男だそうな。

おでんの外に漬物なぞ貰つて賞味する。俺等の外に一人の客があつて、それは大分醉つてる。臺に身體を扭り乍ら管を卷いてる。

『おいらもこの間の桑港博で日本へ歸ろうと思つたが、とう〳〵チヤンスを失つちやつた、もう少し居にやならねえ。だが外國に居るのも約十二年になるかな』



とつくぐ云つた。江戸つ子句調の長兵衛に向つて、俺は近頃の東京の食物店の話を少し試みた。返事はとちんかんだ。彼も可成り永くロ市の名物男として過して來たのだらう。

◎二十四信

のんき長兵衛の店でがんもどきだのこんにやくのおでんだのを五十セント程土產に買ふと一と荷物ある。これを提て婦女界愛讀者の歡迎會に友達と一しよに行つた。おでん屋のある界隈は日本人街と見え、洋館の前に麻の簾を垂れ、御膳きそば△△庵と書いたのなぞがある。洋館に庵號は異樣な感じがする。

會場へ入り外套と帽子をかけ、その蔭に五十セントのおでんを隱した事なぞは當夜列席の淑女諸君は知るまい。迎へられて席につく。長卓の白いテーブルクロースの上に俺が好きな支那料理の楊州炒飯が既に食ひ零されて居る。そして都河氏の腹を見るとチョッキの釦が、苦しそうに縊れて居る。他人の腹でもこんなに米の飲を滿喫したのを見るのは幸福なものだ。米の飯よ！　米の飯よ！

都河氏の腹を羨まず祝福する餘裕のあるのはこつちの腹にもおでんと米の飯が一ぱい詰まつて居るからであらう。

俺も何か話しをした。それから友達と及び同席の漫畫の好きな若い醫師夫妻と自動車に乘り醫師の診察所へ引上げた。若い夫人は洋裝をしてるが室へ戻るとすつかり夫に對する態度、客の予等に對す

る態度が日本婦人式になる。少し外國婦人を見慣れた眼には氣の毒な位謙遜に思へる。

隣に日本の寫眞師のアトリエがある。ロ市に於ても人物寫眞を藝術的に撮る技倆はこの若い邦人寫眞師が一等なそうだ。大いに氣が強い。俺を記念に撮るといつて俺の洋服の襟に大きなカーネーションの花をさし椅子に寄らせた。

今年の五月にいよ〳〵パリーへ遊學の途に上るといふ手紙と共に原君が其寫眞を贈つて呉れた。見ると驚く程よく撮れてる。そして可笑しな事を言ふようだが、案外俺は美貌の持主だ。この原因を考へて次の條々に思ひ當つた。第一は洋行もまだ始めのうちだし希望の心が活々として居る。食事前には必ず手と共に石鹸で顏を洗ふ。側に東京の文房具屋さんが監督して居て、髪と髯を不精にしとく譯には行かない。無理な仕事に追はれない。これ〳〵である。

女の人も若しわが美貌を取出そうとするなら東京の文房具屋さんを監督に賴み世界一周をする積りでロスアンゼルスあたりまで行くがよい。これが最上の美顏術である。

俺は一體他人の似顏は割合に公平に描けるが自畫像となると氣がひけて悪い方へ割引して許り描く。氣が小さいせいだらう。だがいつもそうそうひけて許り居られない。今に俺の容貌の眞價を發輝しなければならない時期が來たら、今迄の自畫像の損害賠償をする爲めに、この寫眞を提出する積り

だ。それまでは大事に取つて置く。

閑話休題としてその夜ホテルへかのおでんを持歸り仲間を呼んだ。仲間もそれ〴〵知り人に連れられ日本食を喰べて來たといふので好意だけ謝され指はあまり觸れなかつた。

翌四月七日、朝友人の畫家が自動車を持つて迎へに來る。今日はパサデナといふ處の見物。この一區劃の町は五十萬ドル以上の金持ならでは住まはさぬ。金に飽かして美的に便利に住み做そうとする町だそうな。この町にはコンクリートで造つた夢の中に見るような白い長い橋が架かつてる。

ビールで儲けた人の、未亡人が經營してるといふブッシュ、ガアデンを見せる。こゝの庭は花壇や植込を洋風に碁盤目や幾何學的の圓や楕圓に區劃したものでなく、日本風に築山や、小谷や自然らしい茂みもある。日本の樹が目につく。楓は芽を吹き、紅梅は老いて居る。芝居の道行きの男女が通りそうな青薄もある。柳もある。それと日本家屋の小亭も本式だが、其間に西洋のお伽話の中に出て來る茸のおぢさんや木靈の精などが拙劣な陶製人形にして配置されてあるのはヤンキー式の打毀しだ。この庭で米國の蛙を一疋見付けた。日本同樣眼を後につけ腹を膨らまして居た。

昨夜の漫畫好きの若い醫師夫妻に招かれ、日本食の晝食を取つた。日本の輕便食堂式の腰掛けテーブルになつて居る。赤いさしみとお鰹節の澤山かゝつた菜の浸しものが嬉しかつた。それから數の子にもお目にかかつた。

隔ての隣の卓には日本の會社の若い會社員達が喰べて居た。話に聞くと米國の西部では十年以上も米國に居り乍ら英語一つ話せず、洋食一皿喰べず日本同樣の生活を續けて居る邦人勞働者が澤山あるそだ。それ程低い日本が滲入してる。

午後ステーションへ行く。二日とはいへ、それも完全に駐まつたのではない、この土地にも婦女界の愛讀者――紅白洋裝の日本婦人――を中心にそれ〴〵の知己が見送りに來て居る。これからは日本人の少い東部へ行く旅であるだけに一寸名殘が惜まれる。

汽車が動き出す。荷物の鞄も間違ひなく積込まれたのを見届け、それから各自持込んだ食物を持出し抓み乍ら自由行動中の見聞を披露し合ふ。これが旅中、樂しみの一つ。

辰夫が又日本人街を漁つて干烏賊なぞ見付けて來た。俺はおでんの名譽恢復をする爲めに新聞包を開く。都河氏への贈り物である大阪鮨の方が好評だ。食べ飽き一遍蓋をして棚へ仕舞ひ上げ、アイスウオーターを飲んで來ると又食ひ度くなる。で又蓋を開ける。

車窓からの眺めはオレンヂの野といつていい。低い幹に黑い程濃き綠が密茂してる葉の間に又は蔭に橙黃色の實が累々と熟してるる。間々桃のような紅を混へるのはエープリコットの花。從つて食堂

車中でデザートに出すオレンヂの美事さ。オレンヂを味はふ爲めに前に濃厚な洋食を我慢するといつてもいゝ位だ。

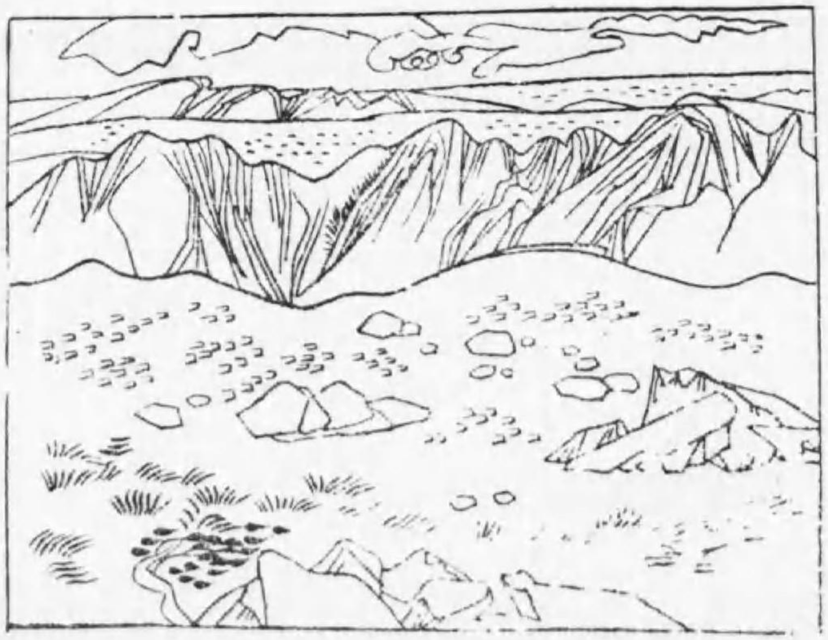
野はオレンヂの儘、空はエメラルドの儘で閑に暮れて行く。それを眺め乍ら身體を汽車の搖られるに任せ車窓に凭れて居ると、戀とも云へず、又哀愁ともいへぬ不思議な情緒が心を支配する。それを何とも説明出來ぬ。強いて説明しようとすれば、たゞ次の言葉が繰り返されるだけである。

あゝ、オレンヂの野よ！　エメラルドの空よ！　お前は暮れて行くのか。

電燈がつき、食事を終へ、喫烟室に集まつて上衣を脱ぐ。煙草の烟の濛々と立籠め行くにつれ、唐茄子屋のおやぢを中央に挾んでブロークンな英語で見聞中の興味を話し又は訊しもする。仲間の失敗がおさらひされるのもこの時だ。

寢床が用意されたといふ汽車ボーイの黑ん坊の報告に車室へ歸るが、歡談で稍興奮した頭はまだ何か興味を求めて居る。黑ん坊に少し多くチップを遣つて踊つて見ないかといふ。黑ん坊奴、一寸ドアを開け監督の來るか來ないかを見定め、それから腰を振つた妙な踊りをやる。踊りを終ると厚い唇から赤い舌をべろりと出し、逃げる眞似をして去る。

四月八日。明けると窓は沙漠の景色。見晴かす空漠たる地は乾いた砂礫か死んだような岩石だ。灰



色がゝつた草や矮木がいぢけて生へてる。一連二連岩の丘の脈が横たはつては居るがこれとても淡褐色や消炭色、一點の生氣も無い。アメリカの中央にはこんな不毛の地獄の野があるのだ。沙漠中の驛カリエントで時計を一時間進める。汽車が地球の廻轉に沿うて走る爲めだそうな。

一日中沙漠に息も詰まる樣に覺えて暮す。一日のうちにずつと氣温が下つて窓を開けると冬のような風が吹き込む。夕方群がり捲く暗い雲が地平の果に見え出した。汽車はそれを手繰るようにして近付いて行くと雲の下から一つの水面が現れた。近づくにつれそれがソートレーキ湖だと敎へられる。

湖岸を傳つて行くうち雲の裂け目から今や湖の水平に落ちんとする溶けて火を放つ鐵玉のような夕陽に逢ふ。線路に沿うて電信柱に逢ふ。湖岸に家屋の灯が見え出す。家屋の灯が段々繁くなり、烟突のついた宏壯な工場や機械船の輻輳が來る。そして闇になる時分に灯の點々が清く一團となつてるソートレーキ市についた。驛を出ると寒い。寒い。

◎二十五信

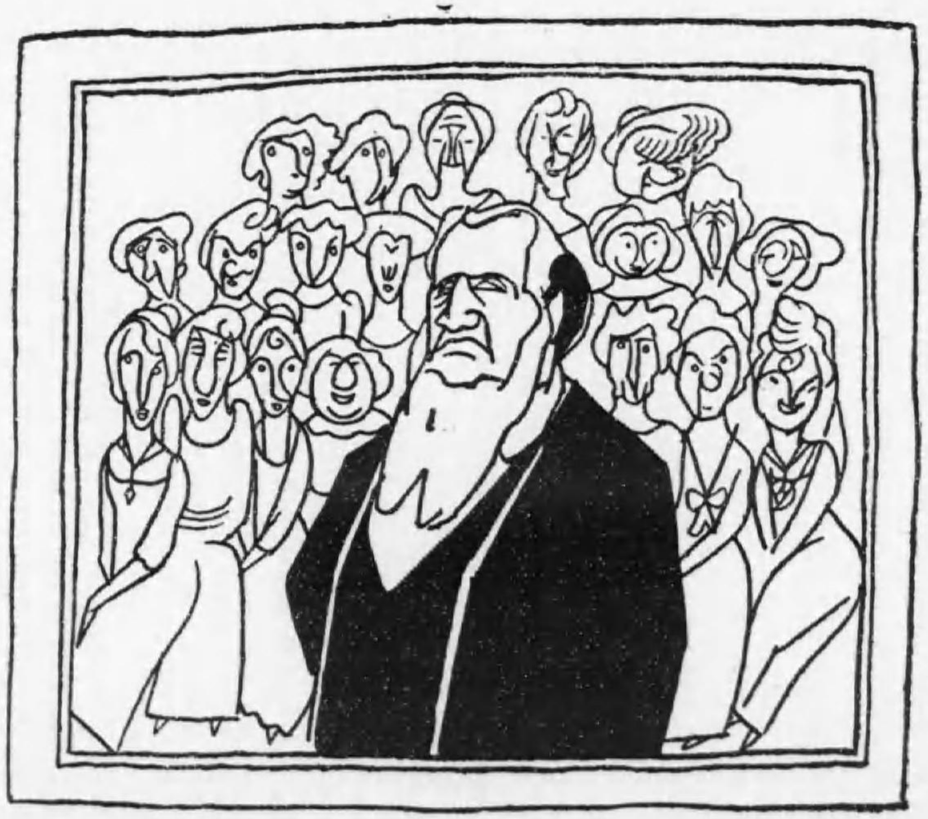
ソート、レーキは日本字に譯して鹽湖と書く。川が流れ込む許りで流れ出ぬから鹽分が溜る一方だそうな。水に二割五分の鹽が含まれて居るから、身投げをしても逆さまに入らぬ限り身が浮いて死ね

ぬそうだ。われ等の乘つた汽車の線で無く他方から來る線の一つは湖岸に近い鹽の野を通り過ぎるそうだ。鹽は地から浸潤み出して厚さ五寸位に積む。それを掻き取ると又暫くして積む。鹽が名物だから鹽の小包をブラ下げた綿葉書を賣つてる。家へ一枚出したのが無事について居た。それを取出し、當時の感銘を蘇らせる爲めに今袋を開けて嘗めてみる矢張り日本の燒鹽と同じように鹹い。

ホテルで朝起きてみると外は雪なのには驚いた。支度を整へ例によつて見物に出る。ソ市は又一夫多妻宗モルモン宗の本山のある所だ。市の中心になつてゐる四角の胴の上に尖つたものを出した建物と丸い船底を屋根にした形の建物とがそれである。それを横眼で眺め、車は廻つて州廳の建物に入る。

部屋々々を竿を持つた案内役の老爺が連れて歩く。鏡が向き合つてる。その向き合ひ加減によつて二つの鏡が十八の鏡を寫し出す。何と珍らしいだらうと案内の老爺がいふ。それから大理石の柱の紅入りの斑がいろ〳〵な形になつてる。これが犬でこれがワシントンで、これが淑女で、これが何々でと持出した竿はそれを一々示す爲めの竿であつた。あとのものも大概このようにあたり前のものを無理に珍らしいものに仕立てようとする類であつた。

たゞ一つ先祖の遺物の置いてある部屋に本當に珍らしいものが一つあつた。それは一人の夫を十九



人の妻が取巻いてる寫眞だ。一人の夫といふのはモルモン宗の開祖ブリガム、ヤング君である。

こゝで一寸モルモン宗の教義と一夫多妻主義の來歴を説明して置くと便利だ。

むかし〳〵といつてもそう古い事ではない。マンチエスター生れのジョセフ、スミスといふ者があつた。神の啓示を受け、神がまだ聖書以外に人類の爲めに書き遺し置いた金の牌を山から掘り出したと稱し、その神の言葉なるものを述べ出した。これがモルモン經典である。宗徒を集め開墾に向ふ途中殺されて仕舞つた。その志を享け繼いだのがソ市の開拓者ブリガム、ヤングである。彼は一八四七年宗徒を引連れこの地に來り、初めて州の知事になつた。モルモン經典によつて宗教を擴めると同時に土地を切り拓いた。そして一夫多妻を實行した。どういふ教義に據るかといふと一體宇宙には前の世に死に現世に於て肉體を得ず魂だけで宙に迷つてるものが澤山ある。人間はそれ等の魂に肉體を授ける爲めに生れさせられ來たものだ。これ神の意志である。故に人は出來得る限り多く妻を娶り魂に肉體を授けるべく子供を生むのが義務だ。神への奉仕である。多妻主義はこれから來たのである。ブリガム、ヤングは神への奉仕を完全に行つた。即ち彼は十九人の妻に二十八人の娘と二十四人の男子合せて五十二人の子を生ました。そしてこの宗では洋人に似合はず男が主で女が從である。今寫眞を見るとヤングは半白に近い壯齢である。そして妻達は四十以上のもあれば二十前のもある。服裝も髪か

たちも思ひ〳〵だが、嫉妬に疲れたような顏は一つも見出さない。みな眞面目に濟ましてる。案内老爺の說明が皮肉だ。

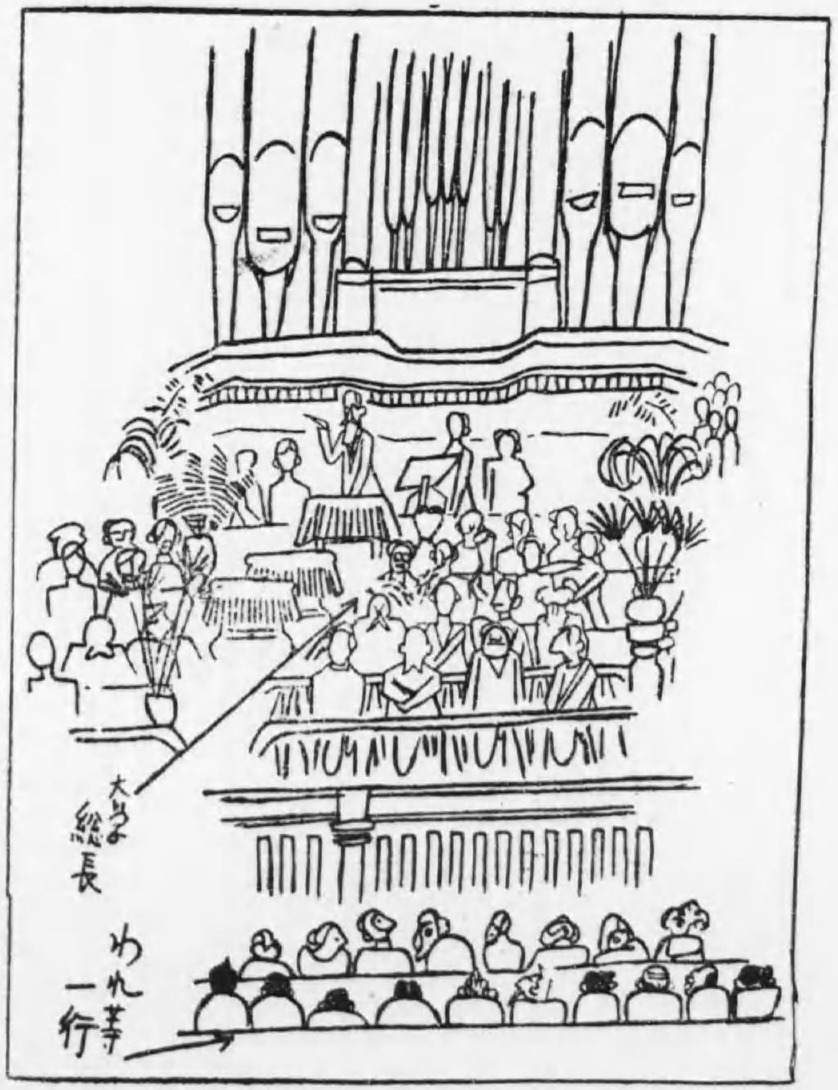
『扨、參觀の紳士諸君よ。想うても御覽じろ、あなた方はお一人の妻君さへ時には手におへないで困る事もおありでしよう。然るにです。然るに、ヤングはこの十九人の妻の何れもを滿足にうまく攻めて行きました』

これには仲間の大人連一言も無い。

出て、それから廣い空地になつてるヤングの墓を見せる。それからヤングが中の十四人の妻を住はせて置いたといふライオン館といふのを見せる。どのように中を仕切つたか見たかつたがその暇が無い。ヤングは死ぬ時妻や子供に相當の遺產を遺したそうだが、面倒のいゝ宗敎の開祖もあつたものだ。なほ町の中にはヤングの銅像も可成り眼につく程多く建つてる。

市の大部分が敬虔なモルモン宗徒だ相だに處々に GO TO CHURCH（寺に行け）といふ立札がしてある。多くの中には不信心の者も居るけな。

立札で感心したのは學校の附近に建つてるものだ。此には單に THANK YOU（有難う）と書いてあるだけだ。何が有難うだと訊くと授業時間中は周圍を車馬は靜に通つて貰い度ひと希望する意味で



ある。それをあべこべに先に、あなた方はお察しのよい方だから無論、靜に通つて下さいますね。有難う。とこういつて仕舞つたのである。それも略してたゞ有難うだけを書いたものだ相な。この婉曲を解して相手がそう實行するものとしたなら米人は案外デリケートな處がある國民だ。

日本といふ國では明治初年頃までは立小便されない爲めに塀の裾に稲荷の鳥居や鋏の繪を描いた札を貼つたものだ。然も通行人は却つて面白がつてその上にしかけた。

モルモン宗の信徒として日本人が一人この土地に住んでる。Kといふ青年である。土地の邦字新聞ユタ日報の主筆をやり傍ユタ大學の政治科に通つてる。K君の盡力で今日、日曜の大會堂の說教に列席させて貰ふ事になつた。行くと信徒の老幼男女が門に入つて行く。男主女從の宗風はこゝに現れ、日本のように男が先に立つて入り女が後について行く。

參詣記念品を賣つてる小室に待たされる。見物の男女が大勢居る。

導かれて入つた大會堂はかの丸い舟底の屋根の建物だ。金色の太い柱を並べたようなパイプオルガンを後に控へ、清楚な壇が幾重にも出來てる。役員席や大學職員席が主要部を占めてる。それに向合つて横長い下の平席の椅子は信徒で一ぱいだ。女が帽子を除いて居るのも女從の現れだ。われ等一行の席だけ丁寧に開けて呉れられてあつた。

高い中央の別壇、今や大學總長の說敎中だ。端正敬虔な紳士だ。噂で空想したモルモン宗の信徒にしてはあまりに眞面目なのに擊たれる。總長の說敎終り代つて大管長が立つ。老熟誠實な老紳士、普通の洋服、一體モルモン宗の牧師には專門家がなく、みな他に職業を持つ素人だそうな。K君に聽くと說敎は簡單に濟んだそうな。そしてその言葉の中に遠來の日本の客をこの會堂に迎へる悅びの辭もあつたそうな。聽いて遲蒔き乍らお辭儀をする。說敎の後の話は少年軍組織の勸めであるそうな。大管長は熱誠の餘り入齒を吹出しかけ周章て手で押込む。唯一人笑はない。こつちも我慢する。徐に大パイプオルガンの音が響き出す。笛の一つの直徑が何尺とかあつて音は電氣仕掛けになつてる、世界一の物だそうな。原始時代に人を立返らせる深い夢の樣な響がするのに合せて一同の讃美歌。

濟んで俺れと都河氏はユタ日報社主に招かれK君と一しよに日本倶樂部に行く。特に御馳走として名物のマウンテントラウトといふ魚を喰べさせられる。うごひのようでもあり岩魚のようでもあるものだ。フライにしてあつた。

食後更にK君からモルモン宗の話を詳しく聽く。

現在では州法で多妻主義は禁じてあるそうな。基督敎に於けるモ宗の特色の信條は愛よりも眞理を尊ぶ、神の救ひを藉らず、人は努力如何によつて神になり得る。基督は神の名に於て修養の熟した人と觀る。

宗風としては生活は質素勤儉を守り、成る可くわが手で作つたもので衣食する。酒も茶も飲まぬ。肉類もあまり喰はぬ。そして信徒は收入の一割を敎會に收める。信徒は世界で五十萬以上あるそうな。敎會はその信仰を擴張する爲めに年々二千人の人を各國へ送る。してその人々は自給自足、一生のうちでこの外部傳道の役目を勤めて來なければ信徒內で幅が利かない相だ。

聽いて見れば、われ等が概念の頭で輕蔑してたモルモン宗なるものと雲泥の相違ではないか。これならば牧師根性のセンチメンタルな耶蘇敎よりどの位よいか知れぬ。こゝで又世界一周の有難味を判らせられる。

われ等と別れた他の仲間は西洋の棺桶はどんなものか見に行つたそうだ。それの立派なものは一萬ドル以上のものがあり、中に生絲を多量に遣ふ相だ。一番安いのでも五十ドルはする。そして犬の子を埋めるにもこゝでは百二十ドルはかゝる相だ。うつかりソートレーキ市では死ねない。

又汽車で出發。ユタ州では紙卷煙草は禁じてある。州通過中汽車の賣場はその箱だけ閉める。州を越すと又開ける。米國は州によつて法律が違ふからこんな矛盾がある。

しばらく行くと高い大きな嶺に分け入る。名にしおふロッキー山中である。山も全く愛想の無いご

つ〳〵した岩山だ。日本の味がある物とは違ふ。名物なのは無風流に巨きいだけだ。所々雪があり、丸太で組んだ小屋がある。夜に入り八時半頃、こゝが峠のテネシイバツス（テネシイ越え）とて一萬二百尺を過ぎる所だと知らされる。

寒さに、夜中寢臺で毛布を掛け掛けしたのを薄覺えに覺えてゐる。朝眼を覺すと老建築家が『今朝六時頃、鹿が流れを向ふへ飛んで行つたよ。君に見せたかつたね』といふ。山中の驛で停車する間に土產物賣りが入つて來て、何やら一握りづゝ見本に客に呉れる。それは鑛石の粒である。

◎二十六信

汽車の兩側の崖は段々高くなり谷の幅も迫つて來る、ローヤルゴーヂと稱し、谷の長さ八哩、幅は三十尺より六十尺あるロッキー山中での名所そうな。汽車は谷川に沿ひ崖の根元に削り造つた狹い棚の上の線路の上を肩を狹くして馳る。谷川は下に行きアーカンサス川となるものだそうな。

いよ〳〵崖の切つ立てが險しくなる。案内者はこれからこそ名所中の名所を通るのだとて一同をせき立て汽車の尾の方へ連れて行く。

そこに大きな無蓋の展望車が連結されて居り、もう見物の洋人が腰かけ仰いで見て居る。風が激しいので砂や礫が飛んで來る。洋人の女達は防ぐ爲めに白い布を頭に卷いてる。よく見るとそれは食堂のナフキンを借りて來たものだ。異人のあんなちゞれて束ねた赤毛でも大事にするのか、矢つ張り女は女だなと思ふ。砂除け眼鏡を賣りに來る。

景色の樣子は例によつて水氣の無い赭味がかつた灰色の頑石が大きな壁に並び、或は峰に聳ちして線路と流れを挾んで居るだけだ。

山脈があるところは思ひ切つて多量にそれがあるけれども平地となつたら丘一つ眼路を遮らぬ米國

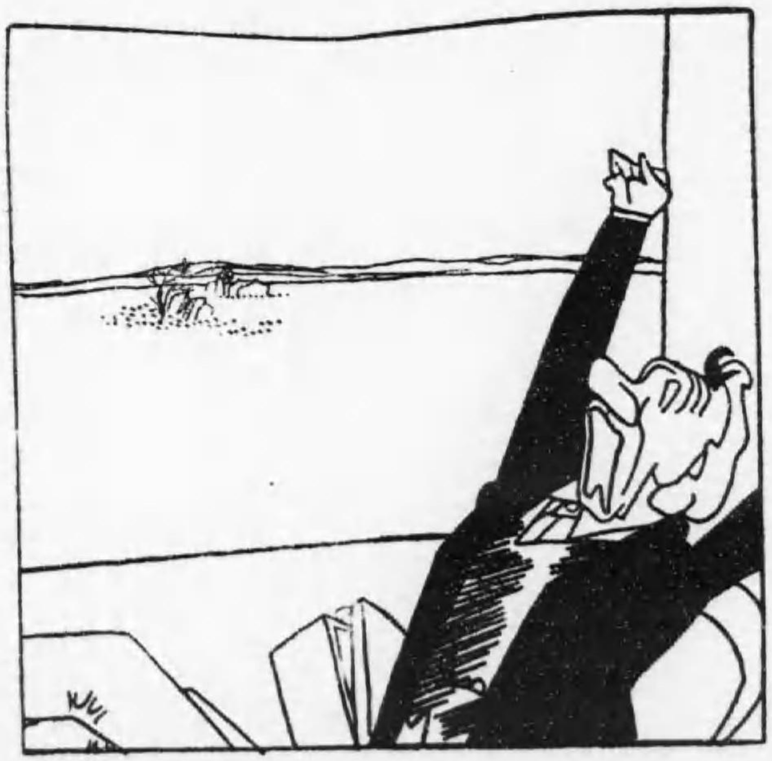
なればこそ、これが名所として唱るゝなれ、家の表へ出ればもう山、裏の潛り戸を出ればもう山、山に鼻がつかへてその爲め國民一般が鼻が低くなつたといふ譯でも無かろうが、兎に角山を普通の事に思ひ做すわれ等日本人にとつては、こんなものは停車場構内の石炭山程にも興味を牽かぬ。俺は山に向つて『へん』と一つ嘲笑を與へて、さつさと車室へ引込んだ。

崖の高さが案内者の説明によると二千六百尺あるといふが、何ほ米國でもそれではあんまり馬鹿々々しい。二百六十尺の桁の過りだろうと仲間の人達は評議まち〳〵だ。

軈て汽車は降り氣味になる。挾んだ崖も低くなり間を廣く開けて行く。板の代りに生丸太を横に組み重ねた住居の小屋なぞ見え出した。そして山は左右へほとんど離れ退き、扇形に野が開展されて行つた。激しい流れはゆるやかな渦卷の笑窪を湛へる河に落付き、河沿ひの人家も文化の裝飾をいくらか帶びて來るようになつた。

そして草に牧牛！『山路來て何やらゆかしすみれ草』俳人の芭蕉は菫草に山から野へ出たなつかしみを感じたが、俺はこの場合牧牛によつてしみ〴〵野へ出る嬉しさを感じた。

汽車はコロラドの平原に入る。今度は見渡す限り耕したり耕さなかつたりしてる野許りだ。成程地平線の近くへ行つて、稍丘らしい重なる襞を發見するが、その他東西南北をぐるりと見廻して世界は



盆のようだと想はせる程平らな野だ。この方がどれだけわれ等日本人の驚異に價するか知れぬ。『廣いなァ』『廣いなァ』と珍らしがつて見て居たが野は中々に續く。退屈して仕舞つたがまだ續く。眺め草臥れてその儘眠つて覺めてもまだ野だ。のではないの……うだ。仕舞ひには先程與へた悅びを取戻し、蹴返し度い位嫌氣がさして來た。

土塊が何哩と地平線に續いてまだ引つくり返つてる。廣い畑地の中に生毛が並んで生えた程幾筋か褐色の雜木林があり、それに近く人の住家が例の牛乳小舍や風車小屋を控へ稀に散在する。孤立的で村といふ趣味のあるものが無い。この單調の中に住む人達の氣持ちはどんなだろう。俺は太平洋を航行中周圍に水平線許りしか見えぬ海中の船に佇んで、若しこの環境が一と月も二た月も續いたら屹度氣が變になるだろうと思つた。今コロラド平原の眞中に在つて、この一つ家に住む人達の上を想ひ矢張り同じ想ひに驅られた。

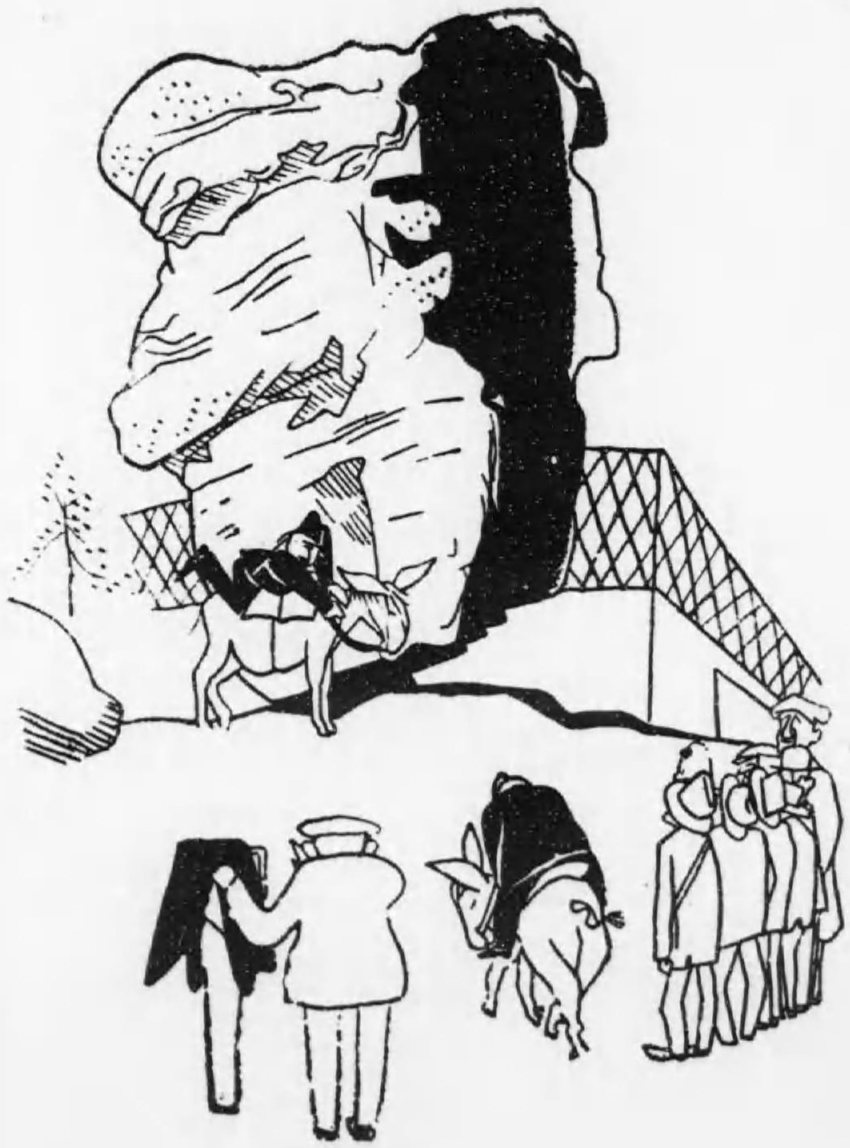
夕方コロラドスプリングに着いたので救はれた。

こゝは高原中の瀟洒たる避暑市。一寸日本で輕井澤の格だ。町並の建物は立派で整頓してるが大道の中央に一列に草なぞ生やしてる處が避暑地らしい。人の氣を輕くする。

ホテルも輕快に出來て居た。日本人珍らしいか若い新聞記者が訪問して五月蠅く訊く。俺が漫畫家

だといふので何か描けとせがむ。例の矢立を取出しホテルの書簡箋に米婦人の印象として、流行のスカートが短い爲め脛がにゆつと出てるところと耳隱しの髪を上げなければ聲が耳に入らない處を描いてやつた。彼はくつくと笑つたが、それより竹の矢立が余程不思議に思へたらしい。日本人は自然のものを利用する智慧に於て洋人の及ばぬ處を持つなぞとお世辭をいつた。俺は日本を代表して大きくそうだと頷いて置いた。だがこの竹の矢立は實は支那製なのだから彼の讃辭は取次いで支那の國民にまで送り屆けねばならぬ筈である。でその積りで日本へ歸つてみると支那はごたごた最中、今に國の主腦者さへ定まらぬ仕末であつた。仕方がないもうしばらく當方に預つて置く。横取りをしやしないかなぞと例の疑深い國だから念の爲めこの記事の載る本書を預り證文として差入れて置く。志ある中華民國人は恁要買這一本書。（註この章を書いた時にはまだ支那に大總統が定まらなかつた）

暇があれば少しでも余計にものを見て置こうといふ世界一周根性を發揮し、辰夫と共に都河氏、息子の園藝家を誘惑して夜は町のボードビルに行つた。田舍町でも避暑市だから可成り構へもよく藝も冴えたのがある。桑港のと大差なく扮裝した男女のダンスを中心に曲藝力業、輕口等だ。ダンスの男が相手の女の隱れて仕舞つたのを探し歩き遠見の背景の幕の裾を捲つて道具裏を覗くといふ仕草なぞする。こんな擽りにも見物どつと笑ふ。米人にも甘いのが多い。



翌朝自動車に乘せられて郊外へ出る。町は六千尺の山地とて少し出ると直に街道筋から一萬四千尺のバイクスピーク山の見える處へ出る。赤褐色の大岩が挾み合ひ、其間が門のようになつてる處を過ぎると、中の平地に奇々怪怪な形の岩石が或は屹ち或は匍つてるのに逢ふ。神の庭と名付けらるゝ名所。案内者が一々自動車を停めて岩の局所々々を指し興を牽くように説明する。あれが駱駝キッスしてる處だとか、あの岩壁の襞がライオンだとか。一つの岩の頂點なぞには熊と臘胡麿と蟇があるといつた。こんなものは榛名山の臘燭岩の同類で、そうと思へばそうとも見えるし、そうと思はねばちつともそうには見えぬ。まづまづ案内者を落膽させぬ程度に感心して置く。一つの塀の圍ひの中に三階建程の大きさの石の塊がある。石の塊は大きな頭を小さな基底でうまく平均を取り、立つてる。名付けて平衡岩といふ。岩の前に、据えた寫眞機と驢馬が二三疋繋いである。見物は驢馬に乘り岩の前に立ち岩諸共寫眞に撮つて記念にする譯だ。勸め上手な寫眞師の口にのり、みな〳〵一口二口申込む。仲間の諸君の驢馬に乘り岩の前に立つ樣子が面白い。氣張つて寫眞のレンズの口を、親の仇のように睨み据えるのがある。或は固くなつて驢馬の背中で叔父の意見を聽いてるようなのもある。驢馬だけは虚榮が無いから平氣で前を向いてる。寫眞の撮られ方からいふと平氣なのが一番その人の自然が出るのだからこの中で驢馬が一等寫眞の撮られ方は巧い譯だ。寫眞の出來上りは紐育のホテル

へ屆けて貰ふ約束を結ぶ。

行つて一つの停車場めく建物の中に入る。これは風穴（クーブウインド）を見物する入口だ。風穴を見物させるのにこんな立派な事務所があり文化的に經營してる。風穴へ入る。日本ならばさしづめ安蠟燭を一々持たせられる處だが、中には電燈が煌々と照り亘つてる。たゞ案内者の子供が説明する其英語に一種慣れた音調の節がついて居て江の島の窟見物（いはや）を想ひ起させる。内部は蝸牛の殼のように曲折してるが凡そ三層に分れ入つた處が第一層だ。通路は狹い處も二人位並んで通り得られ、廣い所は自動車位入る。先づ最初にカーテンの間といふのがある。白い岩石と褐（あか）い岩石と入れ混り模様のようになつてる。大腸の中のような處を導かれて行くと、子供が右の上を指す。石の棚の上に女の乳房程の鐘乳石が立ち、その頂（いただき）にアメリカの旗がさしてある。馬鹿々々しい。狹くてぐる〳〵廻る路はボストン通り、ボストン市の道路は丁度こんなだ相な。天井から粒の房になつて下つてるのがカリフォルニヤの白葡萄。尖つた凹凸が不平均に出てる天井がビスケットを割つた裏。肩だけ辛（つか）うじて入る程の洞穴（ほらあな）に順番に百を突込ませる。奥に電燈の光にマスト二本の軍艦の形の鐘乳石が見える。洞の上下左右は悉く氷砂糖色の種々様々な形の鐘乳石で鏤（ちりば）められてる。中々綺麗だ。こゝが水晶の宮殿。次々にマカロニーと名付けるもの、象の鼻と名付けるもの、愛蘭人（アイリッシュ）のパイプと名付くるもの等が出て來る、成程名の付くより

な形に自然に出來て居る。ある洞にはいろ〳〵の器物道具が亂雜に抛り出されてる趣に鐘乳石が結晶して居た。名付けて骨董屋の店頭。奇拔好きの米人の新郎新婦がこゝで結婚式を擧げたそうな。この洞に似て結晶がキヤベッや人參の束の形に見えるのは野菜園といふ。いつの間にか二層三層をも見終り、歸り途の廣い道路に出る。右側の壁に薄氣味の惡い黑い髮のかたまりのようなものが三四間幅を取つてる。近付いて見ると女の頭のピンが集まつたものだ。これは結婚した人が幸福を祈る爲めに奉納したものだ相な。見物し來つて日本の窟のように神佛臭いものが祭つて無いところがアメリカらしいとほとんど感服しかけて來たのだがこれを見て感服は思ひ止まつた。しかし米人にもこんな可憐な迷信があるのを發見して彼等に對する親しみは確に增した。若し夫人が居なかつたら良人が代つてピンを納めてもいゝといふが、縮緬屋さん『そないせいでも結構幸福どすいな』。かくて再び表口へ戻るまで穴の長さ二千尺、室の數十六。われ等は穴の中を四分の三哩は歩いてる勘定だそうな。

事務所へ戻り記念の土產物なぞ買ひ乍ら、神祕であるべき筈の風穴を電燈を三百もつけ、合資會社で見物を經營してる米國を面白きものに想つた。見物料は一弗だそうな。

丘や野の雄大な線の交錯を夢の如く瞰下する高原の路を疾驅してマニトウ鑛泉へ寄る。溫泉場の建物がある。洋人の溫泉浴は湯に入る許りで無く、浴場の傍に洗淨室があり、機械仕掛けで身體中を料

學的に洗つて貰ふのだ。機械の中には尻の穴を洗ふ水管まで備へ付けてある。湯槽に頭を凭せかけ白雲を悠々と眺める氣分を溫泉としてる日本人とは大きな相違。

も一つ先へ行つて七つ瀑といふを見せる。七つに折れて落ちるといふ瀑の本尊はたいしたものでは無いが、周圍に日本的の落ち着いた靜けさがあるので一寸氣を休める。瀑壺から頑丈な梯子を組立て落口の上まで見究めさせる仕掛けは飽まで米國式だ。瀑より精力的なこの方が余程見物だ。

今日の見物は自分で歩くところも多かつたのに時間も延びて晝過ぎになつたので腹減らし屋の俺は堪へ切れなくなつた。小さな町を見付けて自動車が後の自動車を待つ暇にカツフェからサンドキツチを仕入れて來た。辰夫や息子の園藝家は我慢をなさい〳〵と俺を止めた癖に買つて來ればなに相應に喰べる。

午後五時過ぎこの地に訣れる。

汽車の中の退屈に京都の縮緬屋さんが虎の子のようにしてる松風や煎餅を催促して出させて喰べる。向う側に可愛ゆい子供がしきりにこつちを見て欲しそうにしてる。子供心は何處も一つだ。俺は菓子を紙に盛り、持つて行つてやつた。すると鼻眼鏡をかけた祖母とも思へる女が頻に紙の上から取ろうとする子供の手を握り止め、自分が摘み上げ胡散臭そうな顏をして瓦煎餅を嗅いだり透かして見たりしてる。そしてこつちを睨める。頓てつつけんどんに『これは何だ』と訊く。菓子に決まつて居る。『何で造らへたのだ』と訊く。『小麥である』『米ぢやないか？』瓦煎餅が米で出來たらビスケットは玉蜀黍で出來る筈だよ。とこゝでいつてやり度かつたが俺は英語で煎餅といふ字も玉蜀黍といふ字も、出來るといふ字もちやんと知つてるが、出來たらのたらと、出來る筈だよのだよといふ字を皮肉な調子を帶ばせていふ言ひ方を殘念乍ら知らない。若し文法の儘に言つてそれが馬鹿に丁寧に向うへ受け取れる結果となつたらいま〳〵しさにいま〳〵しさが重なる。で、俺は單に難かしい顏をして『否』といふ語だけ吐いた。婆アはそれでも疑つて、恐る〳〵煎餅の端を喰ひ缺き舌で試して居たが、忽ち吐き出してさつさと菓子を紙でくるんで車室の隅へ捨て、仕舞つた。そしてくるりと向き直つて讀みさしの書物を取上げた。子供はつまらない顏。

一體婆アに感じのいゝ奴は少いが、米國の婆アくらる高慢ちきで、人の氣に觸る奴は無い。日本が米國と親交を締結する事には無論俺は贊成だが、米國の婆アとだけは交際ひ度く無いものだ。

夜八時三十分にデンバアにつき乘り替への都合で十一時三十分まで暇がある。一行引き連れて市中へ出てうまい料理店だといふので晩餐を喰ふ。デンバアは汽車の交差點で可成り繁昌の市だが今覺えて居るのは其處で喰べた献立が海老のカクテール、トマトスープ、七面鳥のコキール、アスパラガス、

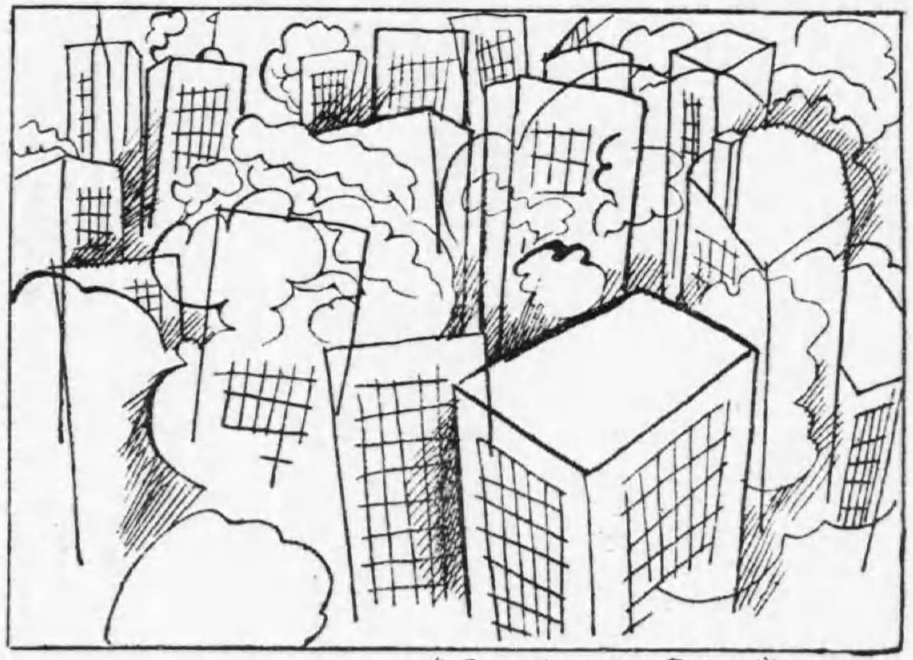
アイスクリーム、であつたのと、市の入口にジョッフル元帥歡迎のアーチが出來て居た事だけだ。太平洋の船中の一件から頗る親しくなつた積りの京都の縮緬屋さん、大聲擧げて『そうだつか。元帥こゝへ先へ來てやはりまつか。早いなア』まるで自分の本家の隱居とでも思つてるような口振り。

ステーション内の賣店で都河氏が繪葉書を買つたら、店番が剩錢を胡麻化した。商業道德で有名な米國にも横着ものは居る。してその店番は矢つ張り婆アだつた。

寢臺車で寢て明くればコロラドの野の續きのような平原。但しこゝネブラスカ州の野には廣茫としてるが黄ろい草が生えてる。小麥と牧場だけの土地ゆえ、處々に牛糧の乾草の山が築かれてる。乾草の山の周圍に柵を作り牧夫は乾草の山を上から截り下してやると、牛は柵の間から首を突込んで喰べて居る、乾草の山は表側は黄だが截口の心に近い中はまだ潤ひを含み柔かい綠色を保つてる。それが何となくなつかしみを覺えさせる。

前日デンバア、シカゴ間に大暴風があつたとて線路傍の電信柱は悉く倒れかゝつてる。又時計一時間進める。

朝飯の卓で信濃の代議士が牛乳を誂へて飲んでる。その牛乳の壜の注ぎ方がまるで酒德利を傾けると同じ手付きだ。彼も時々内密では飲むが、流石禁酒國内の旅行ゆえ大體に於てアルコールには離れ



ホテルの窓より觀たるシカゴの印象

勝だ。彼に無意識に出る酒客らしい動作に思はず同情を寄せる。

オマハ驛を過ぎ、ミゾリー河を渡る。兩岸に工場の烟突が林立してる。

これはミスシッピー河になつては世界第二といふ有名な河。渡り終つてから縮緬屋さん曰く、『成程河の幅さはこれで判つた。だが河の長さはこれでは判りまへんなァ』

午後の汽車で雹の降るのに逢つた。米國でも雹の降る位の事は誰も常識であやしまぬが、こうちやんと降るのに逢つて置くと心丈夫だ。

四月十三日、シカゴについた。町へ出て建物の高大なのと煤烟の深いのに驚く。雀が居る。茶色を失つて煤色が多くなつてる。煤烟の底に自動車、乘合自動車、電車、行人が喧嘩腰で往來するさま火事場の騒ぎだ。

一先づブラック・ストン・ホテルに入りみなみな顔を洗ふ。

『町を一寸通つただけで鼻の穴がこんなに黒くなりましたぜ』

『僕もこんなだ』

ハンケチの黒いのを競つて見せ合ふ。

憩む間も無く早速見物だ。下町と稱する商業街を見せる。町幅も可成り廣いのだろうが、それよ

り兩側家並の背が高く且つ家の作りが米國式の簡單で直截で外壁に何の裝飾も施して無く、扁たい切石を縱に立てたような面へ持つて行き窓が無數に明いてるだけだ。途上に在る人は迫つて深い谷底に在る氣がする。軒並自動車屋ばかり並んで一町内をなしてる處がある。シカゴはミシガン湖畔に在るのは小學生も知つてるが、湖畔を行くと湖は廣漠過ぎて湖の氣がしない。濁つて黄な泥色の水が前へ遠く、左右に遠く、水平線まで續いて居る。全く海だ。

ミシガン湖は濁つてるので有名、だから市中の水はあの一二里沖に見える島から水道を引き沖の水を取寄せるのだといつた。例の煤烟で湖畔の並木は幹も枝も鐵の色をしてる。それでも春だ。鐵の枝先より青いものがちら〳〵覗き出してる。

塀が壞れた粗雜な藏の並んだ所を通ると案内者は自動車を停め小さい聲で、

『こゝが一番ホールドアップ（短銃追剝）が出る名所だ』

といつた。シカゴに取つて名譽な名所だ。

それから長い橋を渡る。橋の下は眼が届かぬ程遠くまでいくつもの坪に區劃られ中に牛羊豚の群を馬に乘り棒を持つた荒くれが、追出し追ひ入れてる。

橋を渡る頃から血腥い臭ひが鼻に入つたが、渡り終へて建物に近附くと一層臭ひが深くなる。こゝは世界一の屠殺場アーマーを始め大きな會社が四五軒ある。われ等は案内者に導かれアーマーの建物に入つた。

小造りの綺麗な部屋に通される。部屋の周圍に在る陳列棚の中には屠殺した家畜の肉以外のもので出來る製品のあらゆる見本が並べてある。牛のような鈍重な獸の神經で樂器の糸が出來てるなぞは意想外だ。

世界一周の對話

◎第廿七信

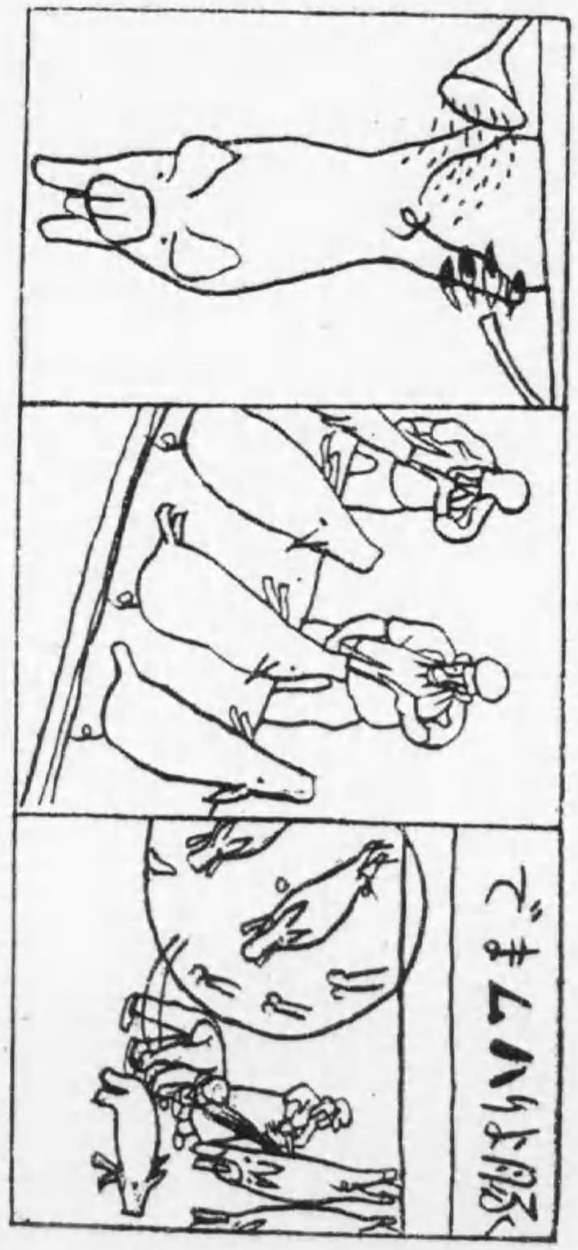
『おい。これからシカゴの世界一の屠牛場を見物した話をしてやらう。お聞き』

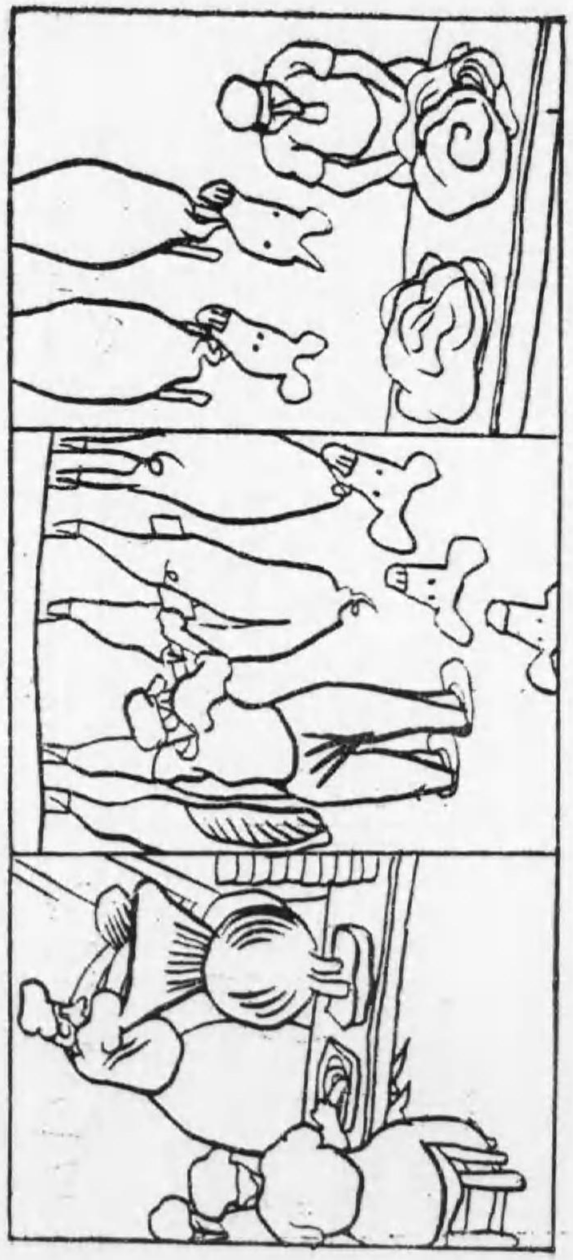
『屠牛場ですか。あまりどつとしませんね。是非共聞かなければなりませんか』

『聽手が無けりや喋り惡いよ。まさか幇間の稽古のようにお飯櫃に向つても喋れないぢやないか』

『では聞いてあげませう。ですがあまり殘酷な實感を出さないで、後に不快の殘らぬように話して下さい』

『なる丈けそうしよう。では話すよ。ストツクヤードの應接間の扉を開けると、薄暗い中に大きな梯子段がある。われ〳〵はそれを上つて行つた。上ると廣い工場の中にそれが橋のようにかゝつてる道に通ずる、橋にかゝると工場内に立騰つてるなまぬるい湯氣が鼻をつき、胸がむか〳〵とした。獸の血の湯氣なのさ。何ともかんともいへない嫌な臭ひだ。みんな手布を鼻へ當てゝ勇氣を揮つて下を覗く。工場の床は流れる血潮に窓から薄明りがさし碧光りに光つてる。大きな車が廻つてる。車の横腹に鎖で





鈎がいくつも釣下つてる。そこに一人屠者が控へて居て此工場へ追込まれうろ〳〵してる豚の油斷を見すまし、ひよいと後足へ車の鈎を引懸ける。車は上へ廻るから豚はぴよく〳〵もがき乍ら宙へ釣られて行く。可哀相だが豚だけに滑稽なところもある。車の上に横に針金が張り渡されてある。豚は鈎の儘逆に宙をその針金に移されると、する〳〵と左へ牽かれて行く。其處に又一人の屠者が構へて居て、眼の前を通る豚の心臓を双物でちよい〳〵突いて行く。見當を間違へず機械のように規則的に突き、平氣で慣れたものだ。心臓から血がどーうと流れ落ちる。血が出切るまで豚は悲鳴を上げてもがいて居るが、出切るとだらゞとぶら下つて仕舞ふ。簡單なものさ』

『一々手で刺して殺すのですか、隨分野蠻ですね。機械の發達したアメリカならもつと文明な科學的な殺し方がありそうなものですのにね』

『それはこうなのさ一體米國はあれで居て猶太人が大勢力を占めてる。中にもシカゴにはそれが多い。猶太人は手で屠つた獸でなければ買つて喰はぬから、從つて猶太人の好まぬ屠殺法には改められぬのだそうな』

『へえー。それから』

『その次の場へ行つて見ると長い板の上へ豚が横に寢て運び出されてる。豚は既に熱湯の中で洗はれ

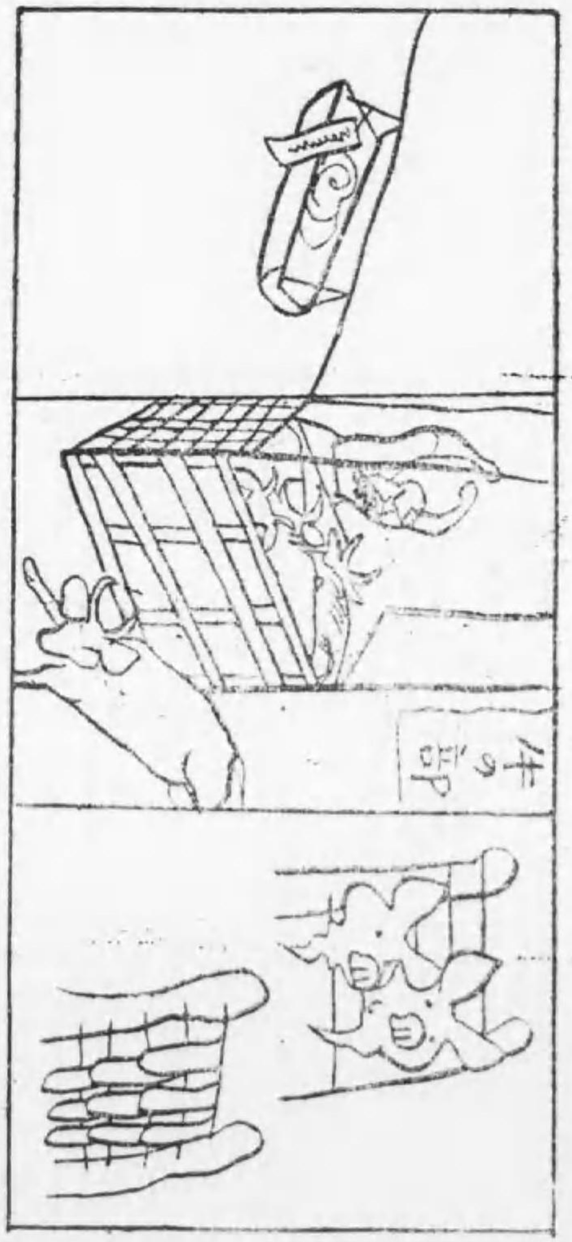
皮を剝かれて。板の前には職工が立つて居て、次々に來る豚の鼻の穴へ棒を刺込み刄物で鼻面の毛を削る。世の中に一日豚の毛を削つてそれで飯を喰つてる人があらうとは思はなかつた。』

『ほんとにね』

『それからその次へ行くと、片一方の如露口から水が吹き出て居り、片一方から瓦斯の火が吹出て居る前へ腹から股を剖かれた豚は矢張り逆の儘通る。これは火で殘つたうぶ毛を燒き去り、水でその痕を洗ふ仕掛けなのだ。水火の責苦さ。其次へ行くと首はあへなく落ちにけりだ。首は身體に皮だけでぶら下つてる。その作業の線と並行して他の一方の側には板の上にその豚の臟腑だけが載つて搬ばれてる。職工がそれを一々吟味してる。それからいろ〳〵の手に渡つて最後に豚は刄物が渦のように卷く機械の前にハムの片となつてぢよき〳〵切り落されてる。女工達が大勢並んで片れを一々油紙で包んでる。生きてた豚がいくらの時間も經たぬのに、こんなに變つたのを見ると無常を感ずるよりも寧ろ馬鹿馬鹿しくて滑稽な感じがする。豚の肉は八十七種のものに製し別けられる相な』

『まるで組立てたものをほごす手數をするだけのようで生物を取扱つてるような氣がしませんね』

『全くそうだ。それから牛の屠殺の方も見た。牛はエレベーターの木の檻で運ばれて來ると屠者は玄翁で頭の急所をぽかりと叩くだけで牛はまるつて仕舞ふ。これも非文明な屠り方を其儘行つてる。あ



とは豚の作業とあまり違つた事はない。内臓に故障のある牛はその患部だけ切除き、その持主の牛の番號札をつけて容器で送り、所屬の專門家に檢査をさせる。これなぞは行届いたものだ。又牛の場では牛の尻尾を專門に剝く役の職人が居た。羊を屠る場へ行くと、一體羊は非常に用心深い性質で屠られた仲間の血の臭ひを嗅ぐと中々場へ入つて來ない。でおとりの羊を使つて誘ひ入れる。おとりの羊は一たん仲間を誘ひ込んで仲間の羊が眼の前で殺されるのを見てもその血を浴び乍ら平氣で居る。そして屠者に命ぜらるゝまゝ又同類の羊を招き入れに場をのこ〳〵出て行く。』

『羊といへばやさしい家畜の表象(シンボル)のように思はれてますが、敎へられゝばそんな薄情な事もするのですかね』

『畜生の淺間しさだ。然し人間界にはそれよりも仲間をひどい目に逢はす奴が居るよ。出口の賣場にはさつき切放された豚の頭と長い舌がもう賣物になつて並んで居た。この屠殺場では一時間に豚千二百、牛三百、羊千を始末するそうだ。屠殺の血の臭は、中々執念深く、この建物の三哩四方位までは臭ふそうだ。屠殺人は職業の感化を受け荒くて喧嘩早く、人を傷(きずつ)ける事は何とも思はないそうだ。屠殺人にも時々間違ひがあつてこの間も豚を刺し損じあべこべに蹴られて死んだ相だ。日本なら早速因緣話さね。だが米國の案内者はそんな風にはいはなかつた。動力を起す機械場に會社の役員の寫眞が

かゝつて居た。こんな殘酷な商賣をする社長はどんな奴かと氣をつけて見ると一寸意氣な若い紳士で意外だつた』

『西洋ぢや獸が丁度日本のおさかなのだから、それを料理する屠殺人は日本の魚屋さんのように別に職業上の卑しみは受けぬでせうね』

『いや矢つ張り米國でも屠殺人は嫌はれてるそうだ。さかなを殺すのとは大分感じが違ふからね。見物し終へると晝になつたのでホテルへ歸つて晝食を攝つた。俺は美術學校の學生時代に解剖の先生に連れられて醫科大學へ屍體の解剖に行つた事があつた。死人の赤い肉や黄ろい脂を見て歸つてからそれが頭にこびりついて三日許り牛肉が食べられなかつた。それと同じ樣にストックヤードの屠殺される獸から出る甘臭い臭と血の腥さい臭とが鼻について、迚も當分は肉の洋食は喰べられそうに思へなかつた。俺許りでは無い仲間も同じらしかつた。それを知つて乍ら案内者は皮肉にビフテキを取寄せたものだ。するとあんなに胸を惡くして居た仲間はみんな痩我慢してぐい〳〵喰べた。俺も無理に喰べた。ストックヤード見物の爲め胸を惡くしてビフテキが喰べられなかつたといへば旅行中は勿論、日本へ歸つてからも一生笑ひ話にされる。それがいやなのだ。俺も中々負惜しみは強いが、一行の仲間もみんな負惜しみが強い。そう思つて苦笑した。一體この旅行團に加はる程の人は、世間では普通成功したといはるゝ側の人だ。今の世の中に成功する程の人には可成り負惜しみの強い共通點がある。揃つて無理にビフテキを喰べた處は子供らしいがそれのよい證據さ』

『ほんとに男といふものは負惜しみの強いものね。あなただつてみす〳〵うんといふべき處につまらない强情を張つて中々うんとはいはない。負惜しみの強い處だけは成功者になる資格があるわ』

『その他はあまり成功者ぢやないね。おい餘計な事をいふなよ。それから別の皿で出した西洋芹だね。こいつを取つて臭いで見ると、甘匂くてそつくりストックヤードの臭さ。流石に喰べられなかつた』

『へー』

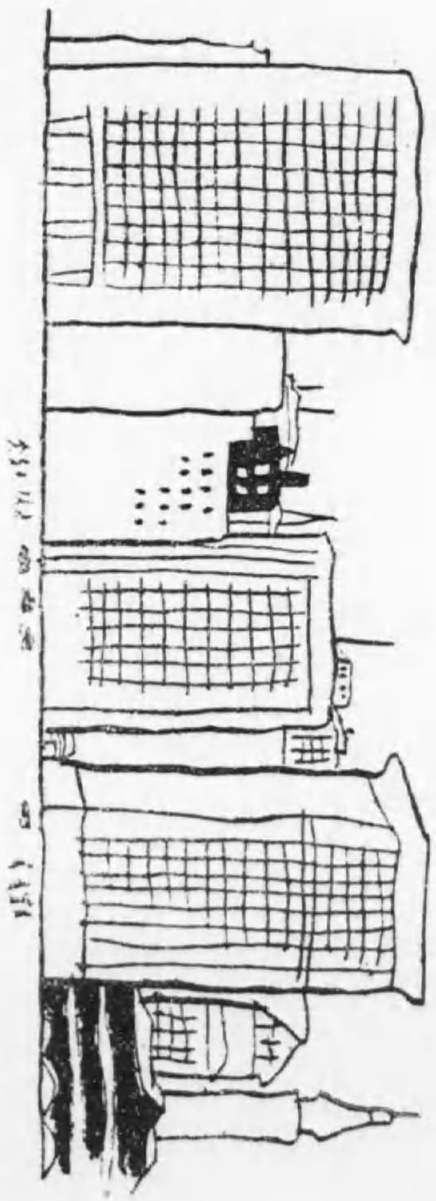
『それから自動車で又見物に出た。ミシガン湖に向つてる町並の八階、十階の大きな建物の間に挾まつて莽箱ほどの大きさに見える實に小さな煙草屋がある。案内者が笑つて指して『これがシカゴで一番小さい店です』といつたよ。この家の持主は變り者で市内各方面に相當な店を持つてる富裕な商人だが、この家だけは是非遺して置くといつて中々讓り渡さない。それで名物になつて居るのだ相だよ。それから行つて見物させるものは多く資本家階級の住居の說明だ。やれこれはデパートメントストアの持主のリーマン夫人の家だとかこれは交際家のパーマー夫人の家だとか飽き飽きする。これ等の家を吳れるのだとか廉く貸すとかいふのならいくらか俺達の氣を牽くけれども只他人の家の立派で宏大

なのを見せつけられても腹の中で勝手にしろと呟く許りだ。漸くそれを逃れると今度はお定まりの公園見物だ。例によつて廣くて整頓してるだけで何處の公園も同じだ。たゞこゝに萬國博覽會當時の日本家屋が遺されて居るのが異つてる。その家の中には座敷の疊の上に、裝飾家具として賽錢箱が堂々と置いてある相だ。雀が居たよ。市に多い空の煤烟で煤けた譯でも無からうがシカゴの雀は茶色か少くて煤色にくすぶつてる』

『ちゆう〳〵とは鳴くでしようね』

『あゝやつぱりちゆう〳〵と鳴いて居たよ。その代り喰ひものはパン屑だの肉の切れ端だのの洋食だ。シカゴ大學を見て又公園見物だ。ワシントン公園といふのだそうな。エニシダの黄ろい花がなつかしかつた。樹は一たいに消墨色に煤ぶつてる。それに毛糸の小房のような柔かい緑の芽を出してる。シカゴの陽氣は夏からすぐ冬。冬から直ぐに夏。春や秋といふデリケートな期節はほんの僅だ相でこれ等の木々も今はこんなだがもう暫くすると瞬く間に緑樹の鬱蒼と變るそうだ。歸り途に道端の廣告を見ると、七十萬臺以上の製造番號を持つと自慢してる自動車會社があつた。數字に因んでシカゴは四十七の汽車の出入口があり、毎分毎に汽車が出て居るそうだ』

『そんな説明的の話しは面白くありませんね』



『そうか。ぢやあ、世界一のデパートメントの話をしよう。これはその翌日に行つたのだ。マーシャル・フイルドといつてね十三階の建物だ。外國人の見物の爲めに案内の係りが出來て居る。氣さくな若者でね。日本の通譯がわれ〳〵に向つて導く言葉の『こちらへ』と『あちらへ』とを直ぐ覺えて切りに亂發する。それは愛嬌になつていゝが、時々この言葉を取違へて『こちらへ』行くべき道を『アチユラへ〳〵』といふ。若しその通りすれば床のはづれから十三階下の敷石の上へ飛下りねばならぬ。

家具を賣る場所へ連れて行かれた。これは英國式の部屋、これはフランス式の食堂、同じく寢室、これはアンチークスタイルの部屋、これは娘さんの部屋、これは朝飯の部屋、だのと見せる。朝飯の部屋の卓には新しき裝飾の樣式だとて卓に繪が描いてあつた。アメリカの殖民地時代の風を取つたコロニアル・ダイニングルーム。部屋の中央に噴水が仕掛けてあるフアウンテン部屋。この家具一部分だけでさへ若し獨立させれば直に宏壯完美な邸宅に成り立つ程の設備のものがデパートメントストアのほんの一小部分にある。その大袈裟なのは推して知るべしだろう。それにこう一々住む人間のする事なす事について、それに定められた部屋が要るとするなら、頓ては吐言部屋、退窟部屋、泣き部屋、夫婦喧嘩をする部屋なぞも設計されねばならぬ筈だ。

文化生活も進歩するとやゝこしくなるね。今度は瀬戸物皿類を賣る場所へ連れて行つた。

ほとんど世界中の製作に係る皿が集まつてる。中で高價いのは一ダース日本金八百圓程のがある。西洋にも番町皿屋敷事件を起しそうな皿がある。大統領ハーディング好みだとか、英國女王エリザベス好みなぞといふのもある。ほとんど此の二つの部門を見物するだけで午後の時間の大部分を費して仕舞つて、あとは疲勞れてほう〳〵の態で店を逃げ出した。この店には使用人が九千人居るそうだ。』

『日本の百貨店とはどう違ひますか』

『質に於てはそう違ひがないようだが、量に於て大部違ふ。なにしろ大きい。植木の部なぞがあつて、室の中で根付きの植木を賣つてたよ』

『それなぞはまだ日本の百貨店には無いようですね。逃げ出してから何處へ行きました』

『又公園さ、ユニオン公園だの、ガフィルド公園だの、ハムボルト公園だの、リンカーン公園だのいふのへ。案内者は俺達を日曜日の子供だと思つてゐるのかも知れない、無闇に公園へ連れて行きたがる。そして案内者はこゝは何百エーカーあると廣さの自慢許りする。米國の奴等は何でも計數に表して來ねばそのものゝ偉大性が說明出來ぬと思つてる。感覺にデリケートの無い國民だ。』

『ほゝゝよつほど公園に苛められなさつたと見えますね。まだ反感を持つて居らつしやる』

『アメリカといふ所は、國が新しいから、見物させるに由緒ある名所舊蹟が無い。それで無闇に公園

許り見せたがる。でなければ大きな建物か機械かだ。何でも世界一をもつて任じて居るアメリカも歴史の淺い點ではひそかに參つてるらしいよ。ガフイルド公園には大きな溫室があつたよ。中の設備が大きく自然に出來てゝ一寸熱帶地方の谷間へ入つたような感じのする處なぞあつた。日本の金魚が大事そうに飼はれて居た。尾の小さい駄金魚だが、西洋ではよつほど珍らしいものに思ふらしい。それから何々並木路（ブールバー）といふ整頓した道筋をいくつも自動車を疾驅させて見せたよ。漸く町中へ入つた。町中の喧騒は無條件で驚くの外はない。そして銀行街には大きな銀行が集まつてる。自動車屋街にはショウウインドウの中に種々な自動車を見本に出してる會社がずらりと並んでる。日本なら商賣仇とこんなに一しよには集まつて住めぬ筈だが、彼等はその點にかけては考へが大きいのだね。ボストン通りといふのへ行つて見ると兩側はみな二十階の家許りだ。道幅も可成り廣くて、通行の自動車乘合自動車等は豆が彈（はじ）かれてるようにしか見えないがそれよりも兩側の建物が高い塀をなして空（そら）を遮（さへぎ）つてるから、その廣い道が影の中の谷底にあるような氣がする。俗中の俗の町の中に、却つて不思議な幽邃の感じを起させられた。』

『その觀察は面白いですね。俗の力も徹底すると却つて神祕に迫るようになるのですね』

『そうらしくあつた』

『夜は又ボードビルでしたか』

『この晩は『婦女界』や『母之友』の多年の愛讀者で、長尾さんといふ方の家庭へ都河氏と一しよに呼ばれて日本食のご馳走になつた。案内者なしに都河氏父子と三人で宛名の名刺をあてに異人の自動車へ乘つてその方の家を訪ねて行くのは始めてだから心細かつた。いくら行つても自動車は停まらない。日はすつかり暮れて仕舞つた。賃銀をむさぼる爲めに同じ處をぐる〳〵廻られて居てもこつちに判らう筈は無い。この市は殊にホールドアツプ（短銃追剝）の多い處だと聞いてるだけに、この運轉手が惡漢のグルであつてこの儘どこか郊外の彼等の巣に連れて行かれつゝあるのだとしてもわれ等には判らない。そういへば段々寂しい處へ來たようだ。陰氣になつて口數も少くなつて居ると、頓て一つの町の眞中で停つた。二三軒訊いて宛名の家を見付けて呉れた時はホツとした。安心の代價としてチツプを奮發して餘計やつた。其人は夫人と子供と弟とで家庭を作つて居た。日本から醬油を取寄せて外人に賣擴めるのを商賣にして居た。洋人には醬油をチャプスイソースと名付けて賣つてる。米國も此の頃では多少醬油の味を覺えかけて來たそうだ。チヤプスイといふのは簡易支那料理店の事で、支那人一流の價の安價と支那料理そのものが萬國の人の口にも合ふのとで近頃チャプスイは米國の大概の市に繁殖して居る。日本人の洋行も滯在はホテルに定めても、食事は食堂ですれば三弗や五弗は取られる。チャプスイで濟ませば一弗内外で濟ませられる。のみならず米の飯も食べられる。で大極チャプスイの厄介になつてる。だから皮肉に云へば洋行とは米國へ支那料理を食ひに行く事だと謂ひ得る。ついでに米の飯で思ひ出したのは、今米國では米を可成り喰ひ出して來て居る、その譯は前に日露戰爭に日本が勝つた時の事、あんな小さな國民があんな大きなロシアに勝つたのはどういふ譯だらうと樣々に研究した結果、それは日本國民が米を喰ふからだといふ事に歸着した。それから彼等も米を喰ひ出したのだ相だよ』

『そんなにお米を喰べ出しましたか』

『なにほんのおまじなひだ。スープの中に五六粒入つてる料理ぐらひな處だ。そのスープを時々出されたがね。俺達日本人には子供がすまし汁の椀の中に喰ひこぼした飯粒をすくふようで氣持ちが惡かつた。あの位ちやまだ中々米人は強くなれないよ。山盛りによそつた湯氣の立つ白い飯に、鰯の鹽燒きを大根おろしをつけてふんどしの紐をゆるめる程むしや〳〵喰ひ込むようにならなければまだ駄目だ。實際あれはうまいよ。まだ秋鰯は出ないかしら』

『あなた何をおつしやつてるの、食物の話になつていらつしやるぢやありませんか』

『成程そうだつた、本筋の話は何だつけな。』

『婦女界の愛讀者のおうちへ呼ばれていらしつたのぢやありませんか』

『うんそうだ。で馳走は手料理の日本食を例によつてむさぼり食つたのだから略してたゞその方の住むような三部屋位の家は、家具附で七十五弗より二百弗で借りられる事と、こういふ風に永く米國に居る日本の家族は、故郷にあこがれて、偶に日本へ歸つても周圍に利害關係が無いからストレンヂャー（旅人）の氣持ちのみして興味が無く、直ぐ又米國へ歸る事と、シカゴに日本人は澤山居るが、米人と互格の交際をしてるのは領事位である事と、招かれた家の人人に就て家族の間柄を見ると、皿の持運びやなにかに客の前でも見榮を張らず、主人や弟が主婦に指揮の權利を與へ、易々としてその手助けになつて居るのは大に洋風の感化を受けて居る事と、然し洋裝をした主婦の心持ちは、日本の内氣の女房氣質を守り、衣裳と不調和と思へる事と、それからご馳走には鯛のようなレッド、スナッパーのさしみに米の飯がうまかつた事とこれだけこゝで說明して置く』

『最後はやつぱり食物の話になりましたね』

『ははははは』

◎第二十八信

東京のある高臺の崖下、半倒壞を修復した家の二階の書齋、壁から落ちた砂、座敷一ぱいに散れる中央を僅に膝を容るゝだけ圓く掃き去り主客對坐。

『九月一日の大地震の時鎌倉でどうなさいました』

『居た家は潰れたよ。潰れて落ちる屋根の庇に藤棚が出來てゝね、殘暑に藤の狂ひ咲きが咲いてた。それと逃げ出す足の踵とすれ〳〵位だつたから危かつた。』

『みんな一しよに出ましたか』

『親子三人手を繋ぎ合つて芝生へ逃げ出して、そこで地搖れにごろ〳〵轉がつて居たよ』

『氣持ちはどうでした。』

『その時は案外潑剌として居てね。子供に心臟の處に手を當てさせて見て、どうだいおとうさんちつともどき〳〵してないだろうと威張つた。』

『ははは自分が子供みたいだ』

『その時は平氣だつたがそれからバラック住ひを十日許りして居る間にそろ〳〵不安に襲はれて來

た。鎌倉にもいけない暴徒が來たといふので雨の中にご用邸へ逃げ込む時は臆病になつた。居た家が料理屋の別荘でね、主人が家重大の寶だといふ葵の紋のついた短刀を貸して呉れたのを腰にさし、竹槍も拵らへて呉れたが、その竹が數寄を凝らした庭の竹だから、普段なら四方竹とかいつて眺めるのに洒落れたものなのだが、武器には重くて棘が出て居て四角いから持ち悪くて、その上拵へ手が料理人と來て居るから體裁よくきやしやに拵へ過ぎて物の役には立ちそうも無い。でも、まあそれを小脇にかい込んだ。どう考へても竹槍は料理人に拵へさせるものぢやないね』

『ははは物の役には立ちませんでしたか』

『それは流言で何事もなかつた。然しあの時の心持ちから自分を推してみると假りに敵が現れても俺には生きた人間を殺すなぞといふ闘志はあまり無いね。それよりもいよいよになつたら、家の者を仕末して自分を仕末しようと考へた。この方には確に自信があつた。この自信がつくと落付いて俺は家人の咽喉佛と子供の子供らしい咽喉佛とを見競べて、切るのに子供のは柔かいが家人のは大人だから硬かろう。然し俺のが一番硬いに違ひないと、鶏をつぶす時の計算のような事をしたら思はず苦笑が出た』

『悲痛な苦笑ですね』

『悲痛な苦笑といへばまだあるよ。ご用邸前のある家の焼跡だといふのに黒焦げの骸骨がうつ向きに

なり、小さな黒焦げの骸骨を胸の下に抱へてるのがあつた。母親が子供を覆ひ庇つた儘焼かれたのだ。如何にも大事にいたはり護つてる眞情が焼けても殘骸に現れてる。俺達は時々拜みに行つた。拜みつゝもまだ騒ぎの噂最中ゆえ、いつ手を合せてるわれ等が、この姿に變るか知れたものでは無い。さすればやがての骸骨が今の骸骨に向つての假りの手向けに過ぎない。秋の日のあか〳〵と照る下で寂しく苦笑したよ』

『いつ山陰道へ行きました』

『それからね十日許りバラック住居をして居たが、東京へは女子供を連れては道中覺束無い。それに東京の家は半倒壊だといふし、その時横須賀まで乘合自動車が始まつた。そして横須賀からは軍艦が清水港へ送つて呉れる。それから東海道線は安全だ。で寧ろこの方が順路だと思つて避難民の扱ひを受け、知邊を頼り山陰道へ逃げ込んだ』

『避難民振りはどうでした』

『世間の親切が有難かつたよ。軍艦から江尻へ上ると縣内の各町村からの救護所が軒並に出張つて、食物や鼻紙まで呉れる。靜岡へ着くと驛前に各團體の救護所が出來て、電車から降りるわれ等を抱へ取るように迎へてこゝでも食物は勿論身體まで醫者が診て呉れる。家人は下駄、子供は帽子を貰つた

よ。其處で休んでるとね、土地の青年達が大きな團扇で煽ぎ通しに煽いで呉れる、それから汽車へ乘る時には赤帽の代りをして氣輕るに荷物を運んで呉れる。これなぞは金のかゝらぬ勞力だが、われ等に勿體ない親切であると感じさせた』

『下駄や帽子なぞ貰ふ處をみるとあなた方も隨分ひどい服裝をしてたのですね』

『だつて荷物は潰れた屋根の下だろう。その後、掘つてみたが、この際役に立たぬようなもの許りが意地惡く出る。で着のみ着のまゝが汚れるにまかせた儘だ。俺は金が何とか都合つくまいかと思つて幸ひ蟇口の中に在つた信用ある銀行の小切手と嚴に押す落款の印を持つて靜岡のある町角の銀行へ行つた。すると行員は俺の姿を見上げ見下ろしてあなたが本當の岡本一平さんですかと訊いた。岡本さんだつて地震に逢へば汚くなる。洋服の胸にカアネーションの花をさし美しく寫眞機の前に立つた時許りが本當の岡本さんと思はれては不便で困る。ありや地震の無い時の然も外出着の岡本さんだ。然し行員は結局東京との連絡がまだ取れてないからとの理由の下に小切手を押し戻した事程左樣に俺の服裝は汚かつたのだよ。』

『今度の慰問は津々浦々まで行き届いてた相ですね。』

『そうだよ。俺は山陰線の岩見太田驛につくまで各驛毎に差込まれる慰問品を大略覺え書きして來

た。勿論書き落したものもあるだろうが、兎や角と感謝の言葉を並べるよりこれをこのまゝ世間に披露するのが無言の感謝だと思ふ。各驛の特色や傍ら配慮の程も覗へるし、で先づ君に讀んで聞かせよう』

『おつくがりのあなたがよくまめに書きとめて來ましたね』

『事程左様に同情に感じたのだよ』

藤枝ボルドー　青島町　慰問の手紙
島田　氷、ハンケチ、タバコ　金谷　茶、むすび
堀の内　氷　掛川　團扇、フライ糖、新聞
袋井　團扇、むすび　中泉　いも、むすび、茶
天龍　いも　濱松　むすび、梨、(竹のナイフ添へたり)
舞坂　氷袋入り、いも　辨天島　紙、サイダ、むすび
荒井町　ビスケット　茶、官製葉書　鷲津三ヶ日町　ハガキ、むすび
二川　茶　豐橋　お湯
御油　梨、茶　刈谷　西瓜、玉子

大府　梨、茶　　大高　パン長燒
熱田　梨　　名古屋　梨、むすび、パン、紙
尾張一の宮　西瓜　　岐阜　牛乳、箱辨當、タオル、紙
ほづみ　茶、紙　　大垣　東本願寺大垣敎務所より着物仁丹、むすび

――大垣米原間にて移動救護班乘車診療を與ふ――

米原　仁丹、お湯、辨當　　彦根　茶、辨當、煙草、仁丹
河瀨　菓子、茶　　稻枝　パン、まめ、煙草、
のと川　お湯、梨、賴信紙鉛筆、葉書　　安土　氷
八幡町　パン　　篠原　南京豆、パン
野洲　かき餅　　守山　麥湯
草津　むすび、茶、無料宿泊所の掲示　　石山　梨、パン、紙
大津　氷、タバコ、手拭パン、着物　　山科　着物、半纏
京都　多種ありしも乘替への爲め筆記の暇なし　　福知山　箱辨當、清心丹
そのべ　ビスケット　　濱坂　パン、タバコ
鳥取　箱辨當　　米子　饅頭
松江　饅頭、タオル　　今市　箱辨當
岩見太田　降車の爲め筆記の暇なし

『えらいものですね。』

『今これを一人が各驛で洩らさず貰つて行くとすると次の量になる。いゝかい。握飯が二箇づゝとして二十二箇、箱辨當が四折、パンが二箇づゝとして十六箇、梨が七箇、いもが二本づゝとして六本、お茶が三合づゝとして三升、湯が九合、麥湯三合、ビスケット二袋、氷が五塊、西瓜二片、饅頭三箇づゝとして六箇、フライ糖一袋、玉子一箇、菓子一袋、南京豆一袋、豆一袋、かき餅一袋、サイダー一瓶、牛乳一壜、ボルドー一杯、着物三枚、半纏一枚、タオル二筋、手拭一筋、ハンケチ一枚、紙半帖づゝとして二帖半、仁丹三袋、清心丹一袋、タバコ二本づゝとして四本、賴信紙一枚、鉛筆一本、慰問の手紙一本とそれに醫者に診療して貰ふ權利が一回ある』

『これだけ持つて行けば北極探檢が出來まさ。とても一人ぢや貰ひ切れない』

『ところが、途中で乘車して避難民でも何でも無い癖に、それを出來る丈け貰ひ込んで抱へて降りた婆アがあるよ。これにはみんなあきれて咎めも出來なかつた、舌切雀の慾張り婆アはいつの世にもあ

るね。』

『聞き度いのは今度の危難に遭つてあなたの思想にどんな影響がありましたか。いや、あなたには信仰と申す方がいゝ。信仰に動搖はありませんでしたか』

『組立てた思想や、手前勝手や贅澤になつた信仰はみんな搖り落ちて仕舞つたよ。ぎり〳〵決着のものだけ殘つたよ。僕はね前に道元禪師の「生死の外に涅槃なし」といふ言葉を讀んであまりに光明や滋味のない眞理では無いかと不平で居た。ところが今度再三、危ない目に逢つてどうでも勝手にしろと思つて生命を不氣味乍らに投出す氣になつた時この言葉が急に光り出した。』

『といふのはどういふ譯ですか。もつと現代的に說明して下さい』

『禪師の言葉は頗るデリケートな底知れぬ深さの言葉だから、僕の淺劣な體驗で解釋をして言葉の眞意を損ずると惡いから寧ろこれは字句通り鵜呑みに覺えて行つて下さい』

『ではそうしましよう。ぢや今日は失敬します。さよなら』

『さよならぢやないよ。これから僕が君に話しをする積りなのだ』

『地震の話がまだあるのですか』

『ナイヤガラ瀑布の見物の話さ』

『冗談をいつちや困りますね。そんな呑氣な場合ぢやない』

『急の用があるのかい』

『用はありませんがね。用は無いつてつたつてあなた、ナイヤガラ瀑布の話はあんまり呑氣過ぎる、氣がせか〳〵して落付いて聞いてられはしません』

『ぢや氣をせか〳〵さして落付かない儘で聞いて居て呉れ給へ、俺も責任のあるうちは誰にでも喋り續ける義務がある、そして不熱心でも聽手の無いよりはいゝ。實はこつちもその時の覺帳(ノートブック)を鎌倉の屋根の下に置いて來たまゝだから參考なしに思ひ出すだけで喋つて見る積りだ、一二回この試みも却つて態(さま)が變つて面白かろう』

『一二回つて……なんだ世界一周の話相手にするのですね。悪い處へ捉まつた』

『ぢや喋るよ。シカゴを出て汽車は夜バッファローといふ町についた。汽車の中で京都の縮緬屋さんが〇〇花子と女名前が裏表紙に書いてある本を眼鏡をかけて一生懸命見て居る。覗いて見ると女學校の世界地理の教科書だ。おやぢさん娘の教科書を借りて來て世界一周の手引案内にしてるのだ。それで判りますかと訊いたら「あらましは判ります」といふ。あらまし過ぎはしませんかといつたら「わし等商人にはあらましで結構どすね」と徹底したものだ。それから、「もつともあまり寄席や芝居の

事は書いておへん」といつた。成程教科書に寄席や芝居の事はあまり書いて無かろう。今迄通つた市でも案内者が却つて説明に困る市の廣さや人口や物産の主なものを縮緬屋さんがすら〳〵と述べ立てるので不思議に思つたが、今その種本が判つた。日本へ歸るまでに京都の縮緬屋さんは少くとも地理では女學校三年修業の學力がついたよ』

『おやぢ氣取らない處が偉い』

『バッファローのホテルはほとんど瀑見物の客許りだ。翌朝細雨の中を自動車で出かけた。町を拔けてしばらく驅けると隅田川を三つ寄せた程の川の岸に出る。汽船が自動車を乘せて對岸へ渡す、渡つた岸に衞所があつて旅券を調べる。こつち側は米國だが向う側は英領カナダだからである。信濃の代議士が旅券を忘れて心配したがどうやら通つた。この大河の末がナイヤガラの瀑になるのだそうだが、今の處その氣配ひは見えない。のろりとした水に河原柳がそよ〳〵だ。二三時間村や林を縫つて走つたね。ふと見ると、河心に一列白い髪の毛を、振り立てゝるようなものが、靄の中に見える。胸がどき〳〵し出した。瀑口に近くなり急ぎ出した水が、岩に激し始めたのだ。左岸に水力電氣の建物がある。それから又しばらく行くと、大きな川が突然ちよん切られ、水は深い谷へ落下する。落口の線が馬蹄形　抉れてゐるので馬蹄瀑といふ。それから樹が覆うてる大きな中島があつて又左へ展開して幅の廣い瀑がある。これがアメリカ瀑だ。こゝで自動車を下りて石の欄へがある岸に立つて眺める。成程大きい。馬蹄瀑の右の端からアメリカ瀑の左の端までは、立つてゝ首を廻すだけでは見切れない、身體から向きを直さねばならぬ。そして大量の水が一度に厚く幅廣く落ちるのだから壯美を感ずる前に先づ驚怖に對する防ぎが無意識に心を引締め、われを忘れてア、美しいなと恍惚する餘裕がない。たゞ大變なものが世の中にあるなと石の欄干にしつかり摑まり眼を瞠る許りだ。それに一體われ等は瀑としいへば羊腸たる崖の途を霧藻をくゞつて木の根岩角に摑まり、先づ瀑壺へと降りるのである。と其處に一軒の瀧見の茶屋がある。床几に腰掛け乍ら澁茶で半分咽喉をうるほし、扨首を擡げて躑躅隱れに所謂懸けたる百練の細絹を裾から頂へ徐に見上げ見下す。そして白妙の絹の垂れ口が青葉若葉に奥床しく包み覆はれてる幽韻を見定め、扨徐に嬉しいと感ずるよう日本に狩野派の繪が起つて以來何百年かの間われ等は教育され來つてる。その審美眼に對してナイヤガラは瀑身は竪づまりだし落口の上は平凡な河が水力電氣の工場の建物附で遠くへ見透けるしさ。カナダ岸には一ぱい、人間の住居の洋館が立列んでるしさ——その洋館の前の道路で子供が箒を地べたに横たへて何とか可愛らしい文句を唱つて、箒のあつちこつちと跳ね飛んで遊んで居たよ——この瀑のありさま、たとへていへば横濱の居留地の往來へだね、風呂桶を永久に打ち撒けてる感じた。たゞドドンドーだ。趣も糞もあつた

ものでない』

『その代りナイヤガラによつて瀑の美感を教へ込まれてる米人は日本の瀑はビフテキを細く糸に切つて一本出された物足りなさを感ずるでしよう』

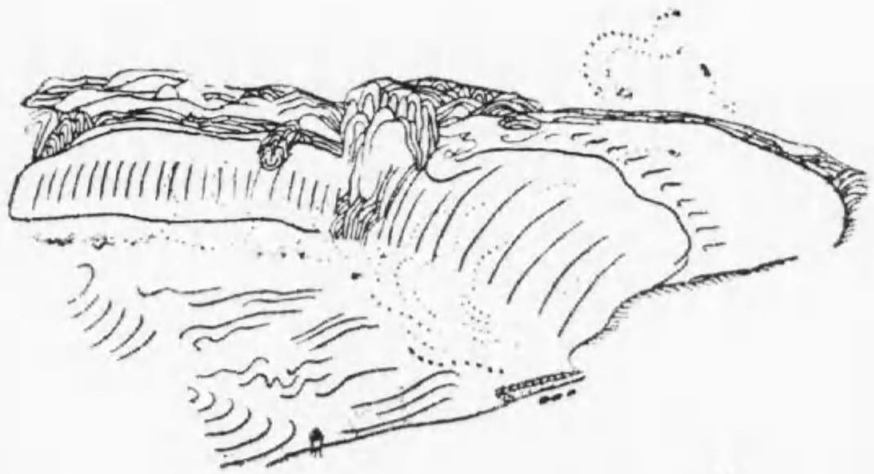
『そりやそうだな。お互だね』

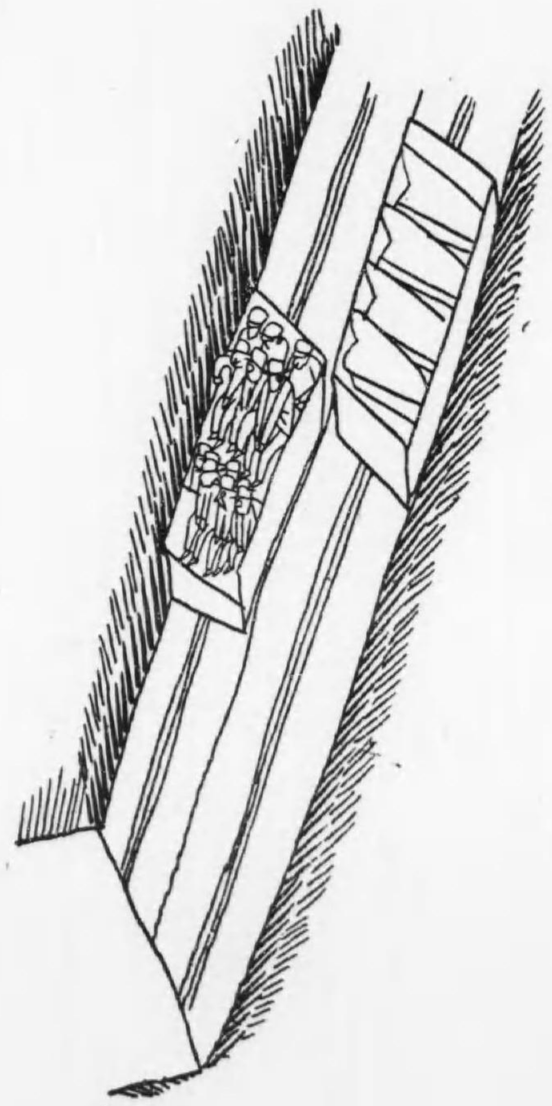
『で、結局どうしても狩野派の日本人のあなたには美感を感じられなかつたのですか』

『そう許りでもないよ。水烟がよかつたよ。なにしろ大量の水だからね、落ちた處から立騰る水烟が霧となり雲となり瀑一面に瀑より高く沸き騰り千變萬化する趣には無條件で恍惚とした。せめてこれでも土産にしようと思つて一生懸命に恍惚とした』

『ははは赤毛布根性を出しましたね』

『それから他にも狩野派の口に合ふような大味で脂氣の強くない處の景色だけをちよいちよい箸で拾つて恍惚とした。そこを見た後河岸を下つて行つた。一體ナイヤガラのは河上はほゝ河岸と同じ高さの水面なのだが落ちた後は深い幅の廣い谷の底の河になつてる。瀑はつまり二階の河から階下の河へ水が梯子段を驅け降りるのを指すのだね。そして水が驅け降りる度びに梯子段の斷崖は擦り減つて行く。一年に何尺とか減つてく相だ。從つて瀑は年々河上へ移つて行く。何千年とか昔はこのずつと下





流の方に瀑があつたものなそうだ。河岸の斷崖にケーブルカーが出來てゝ谷底へ降り、階下(したた)の河の流れを見せる。』

『や、日が暮れて來た。又電車が込んで困るぞ。さよなら』

『この次の日曜に鎌倉へ覺帳(ノートブック)を掘出しに一しよに行つて呉れないか。何も縁だ』

『ナイヤガラと飛んだ縁を結んで仕舞つた。まあ、手傳ひに行きましよう。さよなら』

『さよなら』

◎第二十九信

東京のある高臺の崖下の家の二階の書齋。座敷はすつかり綺麗になつたが、地震の名殘は壁にくの字の割目が出來てる。梯子段を上つて主人と青年が撓み朽ちた中トランクを運び入れて來る。足音が廊下より疊に踏入ると、その響で壁の割目より砂がざあ〳〵と落ちる、下に散らばつてる雜誌の表紙に鼠色に積る。一と憩みの後、主人はトランクを無理にこじ開けて、中から和綴の帳面を取出す、

『これさ。これが駄目かと思つて大心配をした』

『無事でようございました。トランクの中に入れてあつたからですね。直に机か疊の上にでも拋り出してありその上に家が潰れたのなら發見つても役には立たなかつたでしよう。あの白隱禪師の軸と同じように。だがあの白隱は惜しかつた。まるでボロ〳〵でしたね』

『壁の下になつておまけに壞して入つた屋根の穴から雨が浸み込んだからねえ。然しあの白隱は僕等の身代りに潰れて呉れられたのだと思つてる。身代り白隱樣だ』

『ははは相變らず舊弊な神祕說を擔いでる、文明の利器の瓦斯竈で炊くおまんまを喰べてる人には珍らしい。なにあれは偶然にあれが潰れてあなたが助かつたのでさ』

『偶然といへば世の中の事はみな偶然だよ。だが人間に感じがある以上偶然を偶然として濟まされない。現に今度の地震だつて地震それ自身には何の意味もありやしない。然しいくら意味が無い自然現象だと思つても災害後の人々の心はあきらかに變つて行つてるぢやないか。自然の推移は偶然でも人間がこれに交渉する以上何等かそれに意味を抽出して來る。僕は白隱の高德に常々伏して居るからその感じてる心が偶然の出來事にも直にそういふ有難味を呼起すのだ。慈悲の溢れた人の書いた幅に人を救ふ慈悲の籠つて無い筈は無いと』

『つまりお有難屋さんですね。もし軸が殘つてあなたが死んだ場合にはどうです』

『軸が殘つて僕が死んだ時かい――おい、俺は今、生きてこう煙草を吸つてるのだよ。死んだ時の實感は生きてる時考へてもそれは本當のものぢやないよ。死んだ時訊いて呉れ給へ』

『死んだ人にどうしたら訊けるのです』

『矢つ張り死んで行つて訊くんだね』

『そいつは一寸面倒だな。訊きに行く爲めに死ぬより訊かないで生きた方がいゝ』

『そうだとも、生きてるうちは精一杯生きてるうちの事を研究するんだな。孔子にある弟子が死んだ先の事を訊いたら、生きてゐるうちの事さへまだ本當に判らぬのに死んだ先の心配なんか無用の事だ

といふ意味を答へたのを僕は以前に讀んで、深味の無い現金主義の男だと思つたが、震災後これは本當に體驗で考へた達人のいふ言葉だといくらか判つた』

『いくらかですか』

『そうだよ。毎々いふ通り一つの言葉でも聽くものゝ深淺の程度で解釋は百千通りに分れる。だからいくらかだ。先へ行けば僕の解釋もまだ變るよ』

『あなたの今はどの程度です』

『つまり、現實の刻々を最善に盡す事が未來の生活によい結果を產む原因となるものだといふ事を含みに持つてる言葉だと思ふ。いひ換へれば現在、刻々の充實その事が既に理想の達成だといふんだ』

『何だか判らない。あ――あ又くだらないお說敎を聽いて仕舞つた。さよなら』

『さよならぢやないよ。この男はよく歸りたがる男だ。待てよ。この帳面が出たから今度は詳しくナイヤガラ瀑の見物の話を瀑の幅の何ミリメートルまで喋る積りだ』

『又捕まつたか。世界一周の續きでせう。』

『そうだよ』

『何故また僕を相手にしなけりや喋れないのです』

『君のそのつまらなそうに聽く態度がいゝのだよ。僕は氣の小さい男でね。あまり熱心に聽く相手だと嘘をいつちや濟まぬと思つて話が硬くこだはるし、全然相手が居なければ張合ひが無し。丁度君のような居ても居ないような態度の男にはすら〳〵喋れる』

『ようござんす。お始めなさい。だが晩にはご馳走でせうな』

『蒟蒻の白煮をご馳走しようと思つてる』

『變だな』

『喰つても喰はないと同じような味の食物だから君を勞ふには丁度よい』

『相手になつてるだけ癪に觸つて來る。さつさとお始めなさい。これからが書く所でせうな』

『いゝえ。前の君の所謂說敎も、蒟蒻の白煮もみんな書く』

『冗々冗談ぢやない。あなたは普段から滿描きに似合はぬ變な事許り考へてる人だが、それを世界一周の中にまで書入れるのは、面白くもない、お門違ひだ。お廢しなさい』

『これは僕の頭の餘震だよ。實はね十日許り前に賴まれて珍らしく脚本を書いてね、必要上、現實と理想の事をうんと考へたのだ。それで腦味噌に激震が來た。今もつてその搖れが取れずに何を書くのでもその事から入つて行かぬと書くのに彈みがつかない。で、彈みをつけた』

『餘震はいつまで續きます』

『段々搖れが大きくなり相だ』

『傍迷惑だな。さ、いよ〳〵始めねば歸りますよ』

『よろしい。扨帳面を調べて見ると瀑見物のバッファロー市へつくまでの汽車中の出來事で書き洩したものが一つある。例の案内者のトーナス屋の事だ。トーナス屋が汽車中で急ににや〳〵し出して落付かぬ態度だ。訊いて見るとこの先のエリー驛に娘夫婦が住んでゝそれがステーションまで逢ひに出るといふ報知があつたからだ。われ〳〵仲間もそれに興味を持ち出した。「屹度キッスしますよ」「どんな風にするだろう」他の外人のキッスは見飽きる程見たがわれ〳〵仲間の案内者のトーナス屋がキッスするといふので妙に好奇心を牽いた。エリー驛に夜つく。プラットフォームの闇に若者夫婦の姿が見えた。車を下りたトーナス屋がちゆつちゆとキッスした「しましたよ」「へゝゝしましたね」われ等は安心した。そして汽車が發車すると車に戻つたトーナス屋に向つて、現に今見た癖に「汝は彼等とキッスしたであろうか?」と訊いた。トーナス屋が笑ひ乍ら「イエース」といつたので手を拍いて悅んだ。一方から言へばそれ程外國旅行中のわれ等は子供になつてる。一方から言へば他の愛に揶揄ひ寄るを好んだ事程左樣に愛に渴いて居た。

話は前回の續きに戻る。われ等はナイヤガラの岸の斷崖をケーブルカーで下つて瀑の下流を眺める部屋に立つた。前面鯨の群が狹い瀨戸に死物狂ひに揉み合ひ通るようなのが水だ。巨人の腕の筋力が激しく隆まり低まりするようなのが水だ。とてもこれが水とは思へない。力一ぱい生命を張り合つてる活ものだ。何年か前、英國の水練の達人がこゝを游ぎ切ろうとして失敗したそうだが、よくもそんな無謀な考へを起せたものだと呆れ返る。

歸ろうとすると瀑布を背景にして記念の寫眞を撮りませんかと室の一方を指す。ナイヤガラ瀑が撮影場の背景に描かれて立つてる。日本に居る時名士が威張つて都合よくナイヤガラの前に立つてる寫眞を本の口繪などで見たが、なんだ、これかと失笑した。』

『あんまり赤毛布根性を見拔いた仕掛けですね』

『でも、あんまり寫實に描けてるので自分等も一枚記念に撮して歸ろうかと一寸誘惑されたよ』

『凡夫だね』

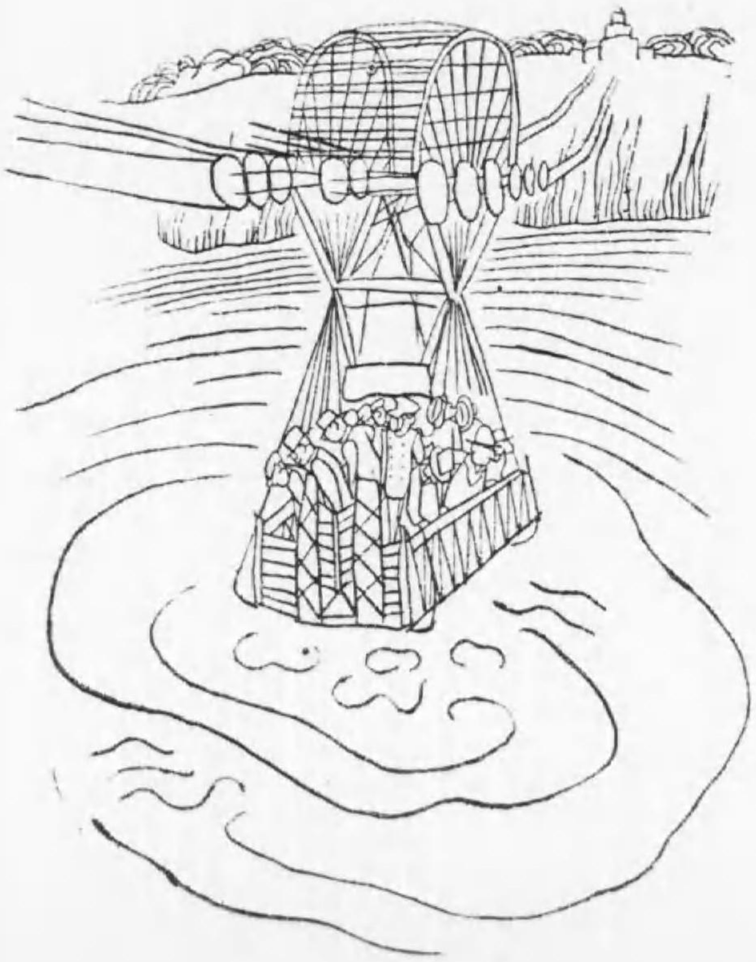
『それから又元の岸の上を下流へ下つて行くと、河が折れ曲る處に大きな灣が出來てる。灣の幅千八百尺ある。そのこつちの岸から向うの岸へ針金を渡し、乘ものを通して渡すのだが、途中で下を覗くと渦を卷いてゝね。見て居る丈けで吸ひ込まれるような氣がする。

案内者が笑ひ乍ら、上流の瀑で人が落ちてもこの渦の中を掬つて探せば屹度見付かるといつたよ。この綱渡りの往復をやつて自動車に戻り元の上流へ走り戻りインタナショナル橋といふ立派な橋を渡る橋の袂で又旅券を調べられる。向う岸はアメリカ領だからさ。橋一つで國境になつてるのは日本人には妙な氣持ちだ。この日旅券を忘れて國境の出入に一寸心配した仲間の信濃の代議士が、この程新聞で見ると腸チブスで歿くなつた相だ。一しよに世界一周をして來た人が一年餘りで一人缺けた。謹んで弔意を表して置く』

『はあ、そうでしたか』

『それからホテルで飯を食つたが、自動車の運轉手諸君も顔を洗ひ髪を梳り一人前の紳士になつて同じ部屋で同じ献立の食物を食つてる。』

言葉をかけても別に卑下した態度はない。こゝ等は米國だね。ホテルの玄關に錢を入れるとアルミニュームで自分の名前が打出せる機械があつてね。珍らしいから一同大に赤毛布になつたよ。土産ものを賣る店へ寄つた。繪葉書、寫眞、置物等、例の江の島みやげ式の賣店だがね。それにナイヤガラの圖がついてなければ屹度アメリカ印度人の圖が意匠されてる。一體米國の土産ものにはアメリカ印度人に因んだものが多い』



『日本の外人向きの土産には屹度富士の山と藝者に提灯に扇子に櫻の花に人力車をつけます』

『それからアメリカ瀑の落口の右側のすぐ傍へ行つて見た。一分間に落ちる水量一千二百萬立方尺、高さ百六十七尺、厚さ一丈あるといふその大量の水がすぐ傍で折れて落ちて行くのを見るのは不思議な氣持ちのものだ。早く傍を逃げ出し度いと思ふ程ドヽヽヽといふ音が壓迫を感じさせる。人間にも反抗心がある。どうせ見るなら度膽を決め、どの位恐ろしい下まで落ちるのか見きはめてやれと餘沫の霧となつて厚く顏へかゝつて來るのを邪魔だから口で向うへ吹いた』

『ははは口で吹いた位ぢや霧は除れないでしよう』

『除れなかつたが吹いて見る氣がしたのはわれ乍ら瓢輕な氣が起つたものだ。そこを去りエレベーターで瀑壺へ下りた。瀑壺とても巨きくて瀑壺の岸の、日本の瀑でいへば苔むす岩に當るものが一つの大きな小山だ。山の中腹に既に「危險」と書いた貼札が立つてゝ、餘沫と風で帽子も外套も吹き飛ばされそうだ。見上げると白い巨きな城壁が續けて溶けて流れ落ちる壯觀。瀑の上面の遲い水が水の重味で乳房のようになつていくつも圓く垂れるかと思ふ刹那、下へ滑り落ち、もう後からの乳房が出來かゝつてる不思議な水のたるみだ。瀑壺へ落ちた水が反動で跳上る水流が又一山だ。岩に獅噛みついて息を詰める許りだ。地響きの上に立つ自分は身も魂も怒鳴り消されて自分は蟬の脱殼のような不安

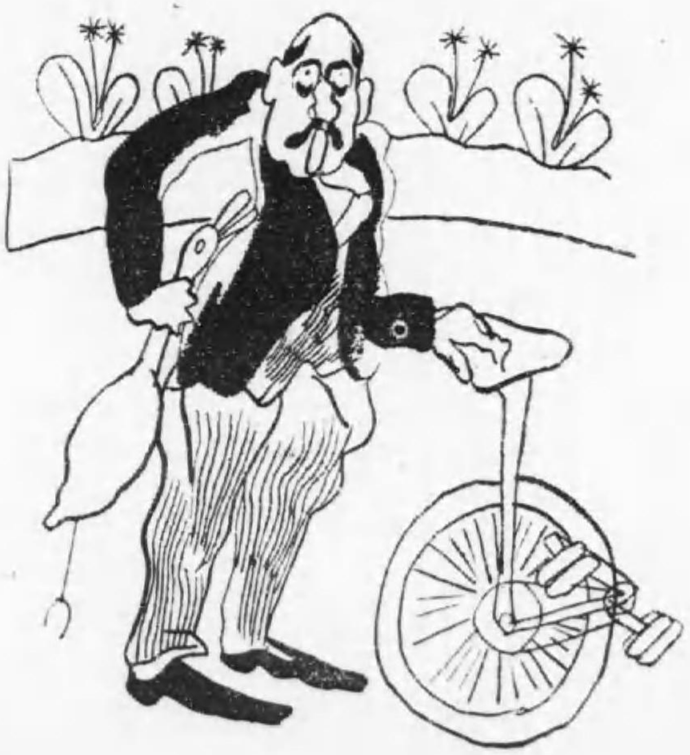
になる。蟬の脱殼より蟻の脱殼かも知れない。蟻に脱殼はあるかね』

『さ、そいつは昆蟲學者に訊かねば判らない。兎に角、小さい蟲の脱殼と諒解して置きましよう』

『そうしといて呉れ給へ。それから瀑の上流の橋を廻つてゴード・アイランドといふ瀑の落口に突出て居る島へ連れて行かれた。平な公園になつてる。何が扨島の兩側は厚いすさまじい落口の流れが走つてる中へ立つて見るのだから、いつ押流されるか知れない氣がして日比谷の公園に遊んでる心持にはなれない。流れを見詰めて居ると島が自分を乘せたまゝ上流の方へ反對に動くような錯覺を起させるぢやないか。でも瀑にかゝつた虹は奇麗だつた』

『空にかゝりましたか』

『瀑の中腹へだよ、餘沫の霧が虹となるのだ。上から虹の頭の頂邊を見下ろしたのは始めてだ。別に禿けても居ず例の七色の彩り鮮かだ。こゝへ夏は一日十萬人集まるそうだ。次に馬蹄瀑の落口に張り出した欄干附の出崎へも行つたが瀑をうまく見物させるよう可なりきはどい處まで設備がしてあつた。少し上流の三姉妹島へ行くと脅かされない少し落付いた水と林が味はへる。總て路傍には「救ひの繩」と書いた備箱があつた。落ちた人の爲めだね。序に聞いたのだが西洋にも身投げはあつてナイヤガラでは年に平均十六人は死ぬそうだ』



『米國人にも身投げはありますかね、身投げの支度に日本では袂に石を入れるのが定りですが、西洋人はまづポケットへ入れるのでしような』

『そして南無阿彌陀佛といふ代りにアーメンといふのだらうが、アーメンと天を仰いぢや下へ飛び込むのに調子が拙からう』

『どつちにしても地球の引力が下へ引落して呉れますからあなたは心配なさらぬがいゝ』

『それからバッファローのホテルへ歸り、夜は寄席を見に行つた。中に自轉車の曲乘りがあつてね。ボロ自轉車を段々乘り壞して仕舞に一輪だけを手を離して乘る。乘手のポケットから窃んで來た家鴨が締め損ねてあつたので逃げ出す。首を摑へてぶら下げると玉子を一つころつと產むのが面白かつた』

『さあ〳〵その次を話して〳〵』

『汽車へ乘つて翌朝ボストンへ着いた。こゝは殖民時代に開けた米國での最も古い市なので英國風の落付きがある。又、ケンブリッヂ。ハーバアトなどのある大學町だ。ホテルに荷物を置き、朝飯を食つてすぐ見物だ。一體米國は建國が新しいから歷史や舊蹟といふものがなく、何事にまれ世界一を誇りたかる米人もこの點にかけては自慢しようにも自慢しようがなかつた。それをこの市へ來ると米國唯一

の歴史、建國獨立を宣言して英國の手から離れた戰ひの舊蹟が在るので案内者大に油をかけ出した。

無闇に自動車を停めてこゝが戰爭當時英國軍の間諜を擒にした場所だとか、こゝが四十人の米人が八百人の英兵と戰ひ七人殺されたところだとか實にこまかい。思うても見給へ、たとひわれ等がわれ等の國の中の事にしたところで僅か三百年前の事柄で家康ならまだしも家康軍の然も名も知らぬ葉武者が、秀吉軍の名も知らぬ葉武者と戰ひ、その間諜を一人捕へたところだからとて、又四十人で八百人と戰つたところだからとてそれにわれ等の興味が持てるものか持てぬものか大概判りそうなものである。況んや外國の事である。況んやその場所には石一枚、木一本出來のよい處で古大砲が一門置いてあるのみに於てをやだ。われ等が欠伸を嚙み殺し、折しも春になりかけの麗な空のみ眺めてほんやりしてたのは理の當然ではないか。それを無理押付けに見物させる程、彼米人は歴史に貧しい國民なのだ。』

『獲物は無かつたのですね』

『ヂョン・ハンコックといふ米國獨立宣言書に署名した男の家が其時代の儘で保存されてる中に博物館式に英兵から分捕つた太鼓だのピストルだの飾つてあつた。それから何とかいふ濁つた池に橋のかゝつてる公園へ連れて行つた。小さいミニユートマンの銅像といふのがある。片手に農具片手に鐵砲

を持つてる銅像だがね。これはもつとも米國民の精神を現してるものだといつて評判そうなが、成程建國時代はこうだつたらう。今の米人なら持物を代へる必要がある。片手に金、片手に所謂人道主義を持たせねばならぬ。哲人エマーソンの家を見た。中產階級の平凡な洋館だがね。庭に切口の新しい薪が積んであつたのが一寸エマーソンの實實鮮新の感じを出してる。往復の春になりかけの田舍道がよかつた。日本の樣に處々に休茶屋があつてね。誂へ向きの婆さんが居る。僕は田舍の一膳めし屋でどんなものを賣つてるかと入つて買つてみた。野暮なパンの片われにカレーを塗つて腸詰の煮たのを挾んで呉れた。流石にうまくない。仲間にやらうといつても、物好きなことをするものだといつた顏で誰も受付けなかつた』

『日本なら稻荷ずしぐらゐに當るものでしようね』

『まづそんな處さ。翌日もボストン見物だ。相變らず英米戰爭で持切りだ。飽きた顏をしてると案內者「あなた方のお國は古いですね」と半分浦山敷そうに半分皮肉にした樣にいつたよ。ケンブリッヂ公園にワシントンがそこで米軍を指揮したといふにれの樹がある。ワシントンだけに書留めて來た。夫から大學を廻つて見た。男女學生混つてテニスをやつてる。見て居て奧床しい感じがする。日本で海老茶袴と大學帽と對立させたら、すぐ妙な連想を泛ばせられるのはどういふ譯だらう。大學寄宿舍の

こゝの所にルーズベルトが居たといふ窓に蔦が絡んでた。靜かなチャールスリバーの岸に柳が芽を出して學生達はボートを練習して居た。詩人のロングフエローが想を練つたウエスト・ボストン橋を渡つた。ロ氏の詩の實際的であるのに橋が米國にしては古雅のものであり、ロ氏の詩句の簡潔なのに比して橋は長かつた。イタリー人の住む町を見たが、イタリー町といへば貧乏人町とすぐ西洋では連想する相だが成程、汚くて子澤山だ。日本と同じような茄子と、青唐がらしと、それに魚を澤山賣つてたので少々心が僻んだ。

ボストンで一番感銘のあつたのはボストン博物館だ。故岡倉先生が力を入れられた跡は優秀な日本繪の蒐まつてるので知れる。中にも日本にも珍らしい浮世繪がある。それの英語の説明が面白い。清長の繪に「中洲デストリクトのヤングマンと二ゲイシヤ」と書いてあつた。日本繪室には障子が嵌めて光線を加減してる。障子國の日本の博物館は硝子戸だつたね」

『もういゝでしよう。さよなら』

『待ち給へ。約束の蒟蒻の白煮を喰べさせよう』

◎第三十信

『さあ始めよう』

『一言忠告して置きますが、世界一周以外の餘談は一切お廢しなさい。さらでだに永引いてる記事がいよ〳〵永くなりますから。前回みたいに蒟蒻の白煮まで引合ひに出すなんて、一體蒟蒻の白煮と『世界一周』と何の關係があるんです。』

『承知した。意見に從つて早速始めるよ。四月十八日朝バッフアロの市を出發してニューヨークへ向つた。汽車の食堂で今しゆんだといふ數の子を大粒にしたような shad roe を食はした。やつぱり大味だね。午後になり汽車は海沿ひを走つて行く。鄙びた小さい港、入江の柳の芽、游ぐ家鴨、白木蓮の花、海沿ひの春はよい。頓て家の込み方が唯ならぬ景色になつて來た。ニューヨークに近づいたのだ。一同何となくそわそわする。

世界旅行中、有名な都に入るのは寫眞結婚の花嫁を迎へる時の氣持ちだ。多分、だらう、僕は寫眞結婚をした事は無いからね。だらうだ。東京でいへば大森邊に當るらしい郊外住宅地に盛に新しい建築が立ちかゝつて居る。ニューヨークもまだどし〳〵發展すると見える。とうとうニューヨークの市

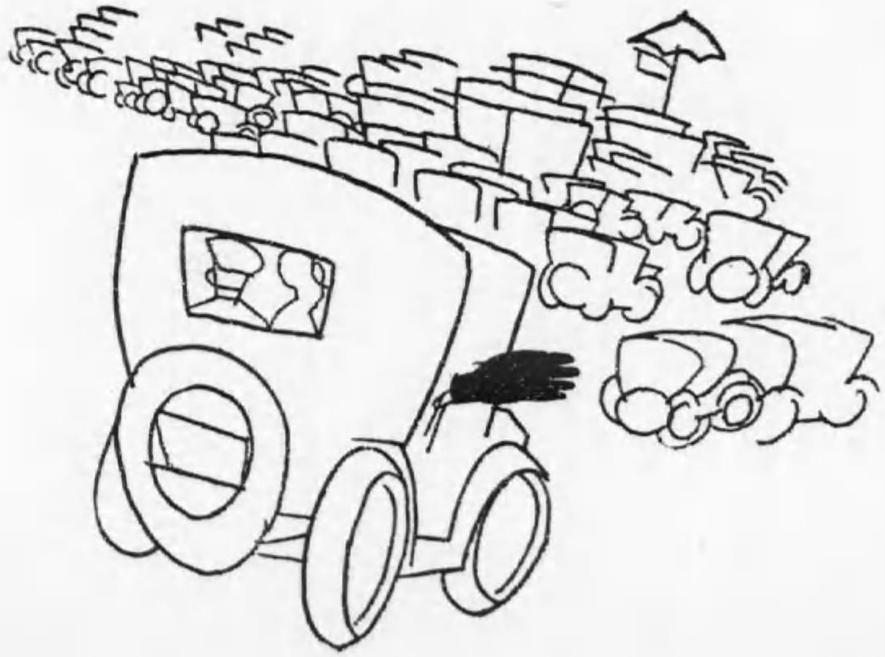
に汽車は片足踏み入れた。それがどんなに立派に見えたかと思ふね。高い建物と建物との、どの窓からも往來の空へ綱を引わたし一ぱい干ものが乾してある。干ものゝ萬國旗だ。驚いたね』

『驚く方が無理です。ニューヨークの市民だつて洗濯はしまさね。』

『いや、宏壯な市では世界一だと聞いてるニューヨークの初見參が干ものゝ萬國旗だつたので驚いたのさ。然しその爲めニューヨークに親しみは却つて覺えたよ。』

『ニューヨークの臺所か茶の間を見たのですね』

『午後三時とう〳〵ニューヨークについた。例によつて自動車に乘せられて街を行くシカゴに輪に輪をかけた雜沓だ。道は乘物が重なり合つて先が見えない。ニューヨークの道はいつも外務省の夜會の供待場だと思へば間違ひは無い。氣が付くと先へ行く自動車の運轉手臺から後の車へ合圖の手が右や左へぴよい〳〵出る。それが洋人の手にしても大き過ぎる。でよく見究めると木で拵へたものが機械仕掛けで彈ね出るのさ。笑つたよ。例によつて道々建物の説明をされ乍ら行く我等はたゞその飾窓の大きな硝子に驚く許りだ。日本の二階建の小店位はある。ペンシルヴェニアホテルといふのへ入つた。十何階とかある相な。室を分けて分宿する。心細い事。それにエレベーターの面倒なこと、十階以下專用のものと十階以上のものと何本もあつて二三遍上り下りを間違へなければやつとわが部屋の



階上へ出られぬ。丁度病氣揚句の鯉が瀧登りをするようなものだ。』

『京都の縮緬屋さんが困つたでしよう』

『それについて面白い事があつた。大將、相變らず僕と同宿して居たが、他の部屋へ用事がある時案外進んで引受ける。不思議に思ふ。そのうち通譯の處へ用が出來た。行つて貰ふ事を賴む。あすこは十階より上どすね。あきまへんといふ。

何故十階より上ならいけないのですと訊くと、わたしの手の指は十本よりおへんね。といつた。つまり、大將、エレベーターに乘つて運轉手に階を說明する時、指を出したものと見えるね。八階ならば八本と。ところが手の指は十本より無いから十階以上は、成程これは困るだらう。』

『は、は、は、萬能の神も縮緬屋さんの洋行を見越して、指をホテルの階數だけに附けて置く惠みは與へ無かつたのですね』

『晝飯に食堂へ行つた。見廻すと處々で、給仕(ウエーター)がアルコール洋燈(ランプ)で煮てる料理がある。煮ながら食べさせる料理とは西洋に珍らしい。うまそうだ。あれを取り度いものだと、辰夫と園藝家の息子に私語(ささや)くと何れも同感だ。あはや注文しかけて氣が付いた。それは客が喰べ終らぬ前に持出した皿の料理を冷さぬよう焙つて居るのだ。』

『聞いてゝも赤恥を掻きそうでひや〳〵する』

『午後又自動車で見物だ。大概例によつて金持や大商店の建物だ。シカゴより高大だ。日本人がつけた名でふんどし横町といふのが株屋町のウオール街にある。兩側の建物が高いから間の空がふんどしの形に見えるからだ。一體ニューヨークの廣さは三百二十平方哩、人口六百萬人とある。町は大體五つに區劃されて居て、中でマンハツタンといふのが東京の下町に當る商業地た。それだけは稍判るが、あとはどう挽き廻されたのだか說明を聽いても判る筈は無い。そのごちやごちやした印象を片端から片付けて行くと、先づこゝが高架鐵道で一番高い處だといふのを見せられた。高いから自殺者の身投げ場所として有名なそうだ。モーニング、サイド公園を見せられた。二十二年かゝつて出來たといふ聖ジョーヂ、デバインといふ寺を見せられた。コロンビヤ大學を見せられた。校庭で日本人がテニスをしてた。馬鹿に廣い河で軍艦がのし〳〵入つてる河の高い岸の道を疾驅する。リバー、サイド、ドライブと名付けて一寸風流な事になつてる。東京市が寄贈した櫻が丁度咲いてた。この河岸の住宅地は住み心持のよい處としてあり、地代が一立方呎年八千弗するそうだ。郵便配達が行くのを見ると、米國のは日本のように驅け出さないね。のそ〳〵歩いてる。二階のある乘合自動車が通る。十仙均一だそうな。二階も下も同價だ。同價なら君はどつちに乘るね。』

『そりや二階に乘りまさ。』

『ところが下の方が位がいゝのだとさ。客が多い時は女を尊敬して下へ入れ、男は二階に上るのださうな』

『へーえ』

『序に話すが、運轉せずに抛つてある電車が澤山あつた。それは女の袴（スカート）が狹くて長いのを競ふ時代がこの前にあつたそうだ。股が廣がらないから普通の昇降臺では乘り降り出來まい。その爲め昇降臺を特に低く附けた電車だ。そのうち今度の短い袴が流行り出して來て、この電車は不用になつた。女の流行が電車の構造を左右するのは米國だけだね』

『米國では女を腫（はれ）ものに觸るように思つてるのですね』

『全くそうだ。それから商業地のブロードウェーの方へ行つた。リンカーン、スクエーヤにダンテの銅像が立つてる。東京の室町か本石町に蘇東坡の銅像を建てる雅量は日本人に無いね。これ等のもつとも繁華な四つ角に青草の空地を規則正しく石で圍んで取つてある。氣持ちのよいものだ。二千五百室あるといふコンモン、ウエルスの建物を見せられる。有名なニューヨーク、タイムスの建物が二十二階、ヒツブドロンといふ大曲馬がほとんどある町の一半を占領して居た。十萬弗の家賃の藥屋を見

せられる。時計がついてるメトロポリタン塔が五十階。後に説明する五十八階のウオルウォース、ビルデングが出來ない迄はこの塔が世界一の名を占めてた。これ等何れも見上げる爲めに首を痛くするもの許りなのだが、道路はタクシーに追のけられる、木片を脊負つた老爺も歩るいてる。十四町目、安物通りといふ通りもある。タクシーといへばニューヨークには一萬六千臺あるそうだ。支那町が珍らしいか支那町見物といふ貼紙をして、赤い提灯をぶら下げた乘合自動車が容を引いてた。行く手が暗くなつて隧道へ入る。河の下を通つてるものだそうな、長さ一哩と四分の一ある。他のこの河には七本の隧道がある相な。戻つて、橋へ出た。素晴らしい橋へ。マンハッタン橋といつて水面から支柱の頂まで三百二十二呎ある。このイースト河には、このような長橋が、總てゞ五本架かつてる。隧道を潜つて一廻りして橋へ戻るまで、實はこつちの注文でニューヨークの貧民窟を見せて貰ふ積りだつたが、僕は居眠りをして仕舞ひ、何にも憶えて居ない。辰夫と園藝家の息子に訊いたら貧民窟だから住み振りは汚いけれども、家は煉瓦造りだから日本へ持つて來たら、さしづめ立派な洋館住ひだといつてた』

『居眠りをしちやつちやしようが無い』

『だが毎日、朝早く起されて終日見物勞働をやつて夜は寢臺車で搖られるのだもの。僕は自動車の柔かい腰かけに乘せられるとほつとし寢床へ入る氣がした。それを知つて案内者奴、僕が自動車へ乘り込むと笑ひ乍らグッド、ナイトといつて扉を締めた。』

『國辱問題だ』

『次に世界最高の建物ウールウオース、ビルデングへ登つて見た。五十八階、七百九十二呎ある。米國では何處のエレベーターも昇降の速度が早いが、こゝには、五十四階まで急行といふのがあつて、一氣に昇つて行く。五十五階から上は並行だけになつてゐる。頂上の室へ着いて、廊下へ出る。ざつとこの間壞れた淺草十二階の頂上の趣と大差は無いが、風當りの強い事、それに瞰下す家並の小さい事、家並は普通の店でも十階、十五階は珍らしくないが、それが下駄の爪先に落したマッチ箱程にしか見えぬ。下駄の鼻緒程の細い往來の上に、馬鹿に疾い虫が追ひかけることをして飛んで居るなと思ふのが自動車だ。人間なぞは紙の上に落した砂のようで、一つ紙をぴんと彈けば飛んで仕舞ひそうだ。見渡すと大河が右と左に建築の間を紐のように流れ海に入つて居る。海と陸との截り込みは激しい刻みになつて居て、それに一ぱい建物が盛られて居る。あふれて海へもこぼれ落ちてる樣だ。遙か河口の灣の中に一點の金の屑が光る。かの有名な自由の神像だ。展望中もあんまり高過ぎて足をちやんと立てゝ居るのは危い氣がする。自然と中腰になる』

『その建物は何に使つてるのです。』

『やつぱり、部屋貸しをしてるのだね。丸ビルと同じさ。頂上の部屋には十二階のように女が繪葉書、寫眞帳、塔の模型の鑄物の置物なぞ賣つてる。寫眞帳は一冊二弗半だつた。これはいゝ土產ものだといふので、神戸の會社の專務が五十冊買はうとしたが。賣店の女が今出しますといつて仲々出さない。やつと時間を置いて揃へて出した。それから塔を下りて近所の繪葉書屋へ入るとその寫眞帳を二弗で賣つてる。つまりわれ〳〵は下で二弗で賣つてる本をわざわざ五十八階昇る骨折をして、頂上へ二弗半に買ひに行つた譯だ。そして女が待たせたのは數が足らない爲めエレベーターで下界へ取りに行つたのだといふ事が判つた。』

『その位の赤毛布は無難の方でしよう。』

『ホテルへ歸り、晩食までの間にそこ等を青年連と歩いた。町の角で一人の男がお叩頭をして小さな箱を差出した。辰夫が新發明の貯金箱を賣るのかと思ひ手に取つて見ようとしたが、向ふは妙な顏をして仲々離さない。一寸二人で引つ張り合ひの形になつた。そのうちそれは慈善の施しを受けて居る人だと判り、辰夫は苦笑しながら箱の中へ銀貨を落し込んだ。』

『辰夫青年仲々秀逸をやりますね』

『それから晩食を食つて代表的だとかいふ喜劇の芝居を見に行つた。トーナスのおやぢが一番最初に笑ひ、その説明をトーナスから訊いて日本の通譯氏が笑ひ、それを椅子に並んでるわれ〳〵が順々に話し繼いで行くのだから一番端に居る仲間が序幕の可笑味を笑ふ時分には芝居のはねの幕が下りてる。これは少し誇張した形容だが、先づそんな趣で一向面白くない。で僕はポケットから家から着いた手紙を出しては讀み返した。』

『ニューヨークに着いたのでしたか』

『あゝ。今朝ホテルへ着いた時、クック社の人から受取つたのだ。故郷からの最初の手紙だ。僕許りでなく仲間一同受取つたのだ。みんな包み切れぬ悦びを押し隱して一日見物してるうちも見物に實が入らぬ。少し暇があるとポケットから出してにや〳〵してる。』

『そんなに嬉しいものですかね』

『ほつと一息吐くね。五十八階の塔なぞよりどの位魅力があるか判らぬ。家族の主の一日本人が世界見物に出て一ヶ月後異境でどんな通信を家族より受取るか、參考の爲め觸りのない處だけ話して聽かせよう。僕の處へは四通溜つて來て居た。先づ子供からはシルバーステート號に乘つたお父さんと題し、原稿用紙に即興畫が描いてある。僕が出帆の時、別れに洋服の上着を脱ぎ甲板で振り沖へ去る姿

を棧橋より認めた通り、始めは大きく目鼻がついた人物で描き、追々小さくなつて行き仕舞ひには豆の大きさになるまでの印象を正直に描いてある。子供の巧まぬ表現ほど強いものは無い。彼が受けた印象は主觀客觀共にその通りであつたらうと思ふ。そして棧橋には殘された子供の自分が腕組して考へて居る姿が描いてある。僕はこれを見て旅中極力土產を買ひ集め戻つてやらうと決心した』

『まあ、そうでしよなあ、こゝで冷かしや冗談を言つては惡い』

『それからもう一つの繪は、日本の地圖からわれ等が舟に乘つて海を渡り着いたアメリカで洋人と洋食を喰べてる圖が描いてある。僕らしい姿の男は左の手にナイフを持ち皿の食物を口へ運んで居る。その說明には、「ホークとナイフと間違へて西洋人に笑はれぬようにご用じん〳〵」だ。子の父に向つてのたはむれはモリエルの喜劇、ドーミエーの戲畫も力及ばぬ。それは愛を堀り起す愉快な餘だ。また生命を覺す可愛ゆい不逞だ。僕は——』

『もう、その邊で充分です。判りました』

『判つたら先へ進まう。それから、家人の手紙はこゝにあるが、それにはエート何々、とそれからエート何々、それからエート何々と——』

『エート何々許りですね』

『いや、こゝの處は他人に發表すべきものでない。そうだ、こういふ事が書いてある。この頃東京では風が激しく吹くので時々、人がご主人のお船は大丈夫かと案じて呉れる。けれどもあの大な船を見て知つて居るので自分は氣强いと』

『もう少し聽手の實になりそうな處はありませんか』

『こゝはどうだ。出帆後六日目ぐらゐまでは氣が張つてたが、それからずつとメランコリックになつたと』

『留守の家人の體驗として參考になりますね』

『こゝはどうだ。僕が出發後、子供はとう〳〵ねだつて白鼠のつがひを銀座の夜店で二疋、七十錢で買つて貰つたと、脫脂綿を一つまみにしたほどの小さい可愛ゆい生物だそうな。子供はそのつがひを夫婦にたとへ一疋の耳の赤い方を呼ぶのに「妻よ」といつてると』

『旅の主人を微笑させる消息ですね』

『それに歌が添へてある。』

外國に人をおくりて心よわし
子のいたづらも叱りかねつゝ

鳥も追へ犬も打てかししばらくは
　父あらぬ子を誰も叱るまじ
櫻の消息も歌で書いて來てた。
　らんまんと櫻咲きけり日の本の
　　やよひの空の雲は動かず

まだ僕等にはこの先歐洲といふ見物があるので遊志勃々として居たが、この歌で一寸氣が挫けた。成るなら一週間許り日本へ歸つてすぐ出直して來たらと思つた。此思ひ付きを早速都河さんに話したら、都河さんも同感だと言つたように覺えて居る。實の處僕はこれ等の手紙を見てホテルの絨氈の上へ涙を零した。家の者に寂しい思ひをさせて自分の仕事の培養も糞もあるものかと。この涙もこの考へも何の月並なと腹で承知しては居ながら眼に實際涙が出て、そこらに居る洋人の姿がぼうつと、ふやけて見え出すのだから仕方が無い。夏目漱石先生さへ、あまり芝居を見ない理由は子役に泣かされて、みつともないからだそうな。腹で馬鹿〳〵しいと承知しながら、なほ泣いて仕舞ふのでいつそ癪に觸るといつて居られる。解剖の鋭い人がそれだ、凡情の力は何處まで根强いか。いはんや――』

『自分の涙を肯定する爲めに文豪漱石の涙を助太刀に頼んで來ましたね。餘談、餘談』

『贊成しなければ話を進めよう。總じて今まで見物したアメリカ式の建物といふのは姿は非常に大きいが、形は實に簡單きはまるもので、豆腐か羊羹を無雜作に切つて置き並べたような方形のもの許り。それに無數の窓が明いてるといふ丈けだ。建物の樣式までがアメリカはイエス、ノーだ。扨此前晩は丁度、此市に居て出迎はれた都河氏の友人、心理學者の上野學士に案内して貰つて、三人で日本飯を喰に行つた。「都」といふ家で献立表が面白いから貰つて來た。日本料理を英語で說明してある。文案者は可成り首を捻つた事だろうと思ふ。

二つ三つわざと昔流の直譯にして見よう。

一、さしみ、――新鮮なる原料の魚を「ショウユウ」香味液を用ひて整理せり。
一、ふろふき大根――粘つたソースを用ひてある、茹でたミカド蕪。
一、口取り――多種の變つた、おいしいものが分け盛られた好もしい皿もの。
一、なべやきうどん――火爐で仕立てた麵類。
一、鮨――醋の好もしき日本式の米飯の球。ざつとこんな調子だ、そこの店で豆腐を喰へたのが嬉しかつた。

◎三十一信

『今日は』

『や、失敬、何か用かね』

『ゑへ、ゑへ、ゑへ、ゑへ』

『妙な笑ひ方をする男だ。そんな妙な笑ひは虎溪三笑にも時平公七笑ひにも日本支那の傳統には無い笑ひだ。』

『その筈です。ゑへ、ゑへ、これはドイツの表現派の笑ひです、主觀を節奏で直接に相手の魂へ向け訴へ出た笑ひです。』

『フーム、今僕は魂に向けて問ひ合せて見たところが矢つ張り判らんと言つてるぜ。』

『舊式で鈍感な魂だから判らないんですよ。ぢや、しかたが無い。日本語でもつて意味を廻りくどく表現しよう。實は今日は世界一周の話の續きを訊きに來たんです。それを言葉でいふと何だか頭を下げて賴むやうで面白くない。賴まずに聞き度いといふ意を表すのがこの笑ひなのです。もう原稿の締切間際でしよう。』

『珍らしいな。君の方から聞き手に成りに來たとは。多少は面白くなつて來たといふものだね。』

『まあ、そうです。大部分は面白くありませんがね。京都の縮緬屋さんの話だけは確に面白いんです。どうでしよう、縮緬屋さんの話だけして呉れませんか。』

『そうは行くものか。京都の縮緬屋さんの世界一周記ぢやあるまいし。だが折角の志に賞でゝ、早速その話を一つだけしよう。』

『賛成、賛成。』

『ボストンの博物館内を一行例の行列で見物して歩いて居ると、列の一番うしろでぎゆうぎゆうといふ不思議な物音がする。靜かな廣い館内に鳴り響いて一層異様だ。顧つて見るとそれが京都の縮緬屋さんの靴の鳴革だつた。同室の西洋人は見る。名畫を模寫して居る高い臺の上の畫家は覗いて見る。日本にも此の頃鳴革なぞを入れるものは無いが、西洋ではクツとでも靴の音をするを厭む。

鳴革も鳴革だが、その又靴の形が大きくて扁べつたいこと、縮緬屋さんの身體に比べると兩足に風呂桶を芽いてるようだ。縮緬屋さんが得意になつて足音高く踏む程、一同冷汗が滲み出ておちおち見物の沙汰では無かつた。それも一場の赤毛布として冷汗に搔き流して仕舞へるかと思ひの外、その翌日信濃の代議士が僕をホテルの應接間に呼んでの相談には、あの靴と鳴革では日頃から神經過敏にな

つてる東京の文房具屋さんがほとんど夜も寢付かれぬ程氣にして居る。あの儘で歐洲へ一緒に渡る事は考へものだとさへ言つてる。貴公のはからひでうまくあの靴を縮緬屋さんから脱がしては呉れまいか。勿論、縮緬屋さんにはこんな苦情のある事なぞ内證にして、そこは貴公の働きに任せるといふ事だ。僕も弱つたが是非に及ばぬ引受けた。ボストンでは其の機會が無く、とう〳〵この紐育まで來て仕舞つた。いよ〳〵歐洲行も間も無い日取りになつたので、決心して縮緬屋さんの詐欺に取かゝつた。縮緬屋さんにあなたも折角洋行したのですから米國で土產の一つも買つて行つてはどうです。それには米國は靴が廉くてよいそうです。買ひにはデパートメントストアまで僕が通辨について行つて上げましょう。すると縮緬屋さん、自分の今穿いてる靴は京都一の靴屋で誂へて足によく合ふ事、鳴革もいつちよく鳴るのを入れさせた事、永々と説明あつて、西洋の靴はいりまへんと來た。それを態よく胡摩化してとう〳〵デパートメントへ誘ひ出した。靴屋の部へ行き縮緬屋さんの足を出させて穿かせて見たが、どの靴もどの靴も縱はごそ〳〵で幅が合はない。靴の寶子は團扇のような足を見て吐息をつく。縮緬屋さんは痛がつて泣き顏になる。それを無理に探させて、合ひもせぬのをよく合ふ〳〵とだめすかしてとう〳〵買入れさせた。たとへ嘘はついても、これで文房具屋さんの一命取り留めたと思へば僕は義賊のような滿足を覺えた。出帆の朝になつた。勢揃へした時、一同、期せず縮緬屋さん

の足元を見た。あに圖らんや例の風呂靴を穿いてる。僕はなじるように縮緬屋さんに訊いた。「買つた靴はどうしたのです」すると縮緬屋さん好意を感謝するように「お世話さんでした。やはりわしの足にはよう合ひまへんよつて、悴の土産に持つてさんじます」それから思ひ出したように、前日拔け驅けして見て來たサーカス（大曲馬場）の話を始めた「ゑらう、ぎようさん動物が居よりましてな。象が二十四疋や、それに熊の自轉車乘り、入口の兩側に人間の片輪もの許り並べて、ようも人間中にあんな怪物が居たもンや、恐ろしゆうてねきへは寄れしめへん」これで縮緬屋さんの靴の話おしまひ。』

『東京の文房具屋さんはそれで濟まされましたか』

『文房具屋さん、歸朝するまで縮緬屋さんの風呂靴を親の仇のように睨み据ゑて歩いてた。』

『は、は、は、は、は』

『今度の笑ひは日本の笑ひだね。』

『お禮にその他の話も訊いてあげましよう。早くお話しなさい。』

『ある日の夕方から「婦女界」の愛讀者の歡迎會があるといふので、幹事の山野千枝子女史が都河氏と僕とをホテルへ迎ひに來て呉れられた。參考の爲め、當時流行のカフエーテリヤとオートマットで食事をさせるといふので歩いて出た。紐育へついてからホテルの近所のちよろ〳〵歩きは少しした

が、大それた大通りの横切りなぞは絶對に慎んで居た。それを今夕は渡らなくてはならない。小さい女史が肥つた大男の都河氏と僕とを子供のように左右に腕を抱へ、さて注意する事には「通りをお横切りになる時には自動車が來るか來ないか、先づようくこう左の方をご覽になりまして、それから右の方をご覽になりまして、さあ今でムいますよ」女史に引つ張られた儘轉げるように向ふ側に驅け通り、ほつと一息する。そこで又説明「この四つ角になつて居ります處をお通りになる時に若しお轢かれなさいましても規則で辨償は成立つでムいますが、四つ角で無い處をお横切りになつてお轢かれなさいましてはお轢かれ損なのでムいます」云々、願はくば辨償金は取れても取れなくてもお轢かれなさらぬ事に致し度い。』

頓て一軒の店へ入つた。これがカフエーテリヤである、樓上へ行く。そこで又説明がある。「女が男の方に伴れられて參りました場合には、男の方に外套を取つて頂くのでございますよ。わたくしは別でございますが」そこで都河男の方は恭しく女史の外套を脱がし奉る。取り付きの第一卓に一抱へする程の銀盤が山と積んである。「この盤を一つづゝお持ち下さいまし」そこで抱へる。第二卓へ行く「このフォークとナイフを銘々お取り下さいまし」女史の通り取り載せる。「このコップへ水を入れてお持ち下さいまし」はい、はい。それから店の右側を廻つて階段の欄干のようなのが取付けられてある、兩側の間へ身を挾む。丁度抱へた盤の左右邊を欄干の上へ載せ滑らし行くようになる。欄干の間には既に挾まつて行く同じ盤を抱へた男女の洋人が列をなしてる。列の進む順に押されて行く。頓て右側の長い臺を前にしてコックの形した人等が銘々小皿盛を並べて控へて居る。それに一々定價表がついてる。角鍋丸鍋を控へ、需めによつて温かい食物を皿へ盛り入れ添物を添へて呉れる處もある。われ等の番になつた。「先づパンをお取り下さいまし」パンと一しよに價の書いた札を呉れる。「肉とお野菜に致しましようか。これは一寸見には綺麗でございませんがお値段の割合においしゆうございます」女史がいかめしきコックの洋人の前をも憚らず、大膽に品定めして行く勇氣に驚嘆する。「デザートのお菓子を一つ取りましよう」遂に欄干を開放された。店の中央に散在する一卓を占領し「さあ、ゆつくり召上つて下さいまし」店の仕掛けの珍らしいのに赤毛布大名は、そうゆつくり召上れはしないのである。あたりをきよろ〳〵見廻し乍ら空で食物を只口へ運ぶ。それでも説明された價の割合にうまく喰へたように今覺えて居る。喰べ終り、盤を片付けようとすると「いえ、いえ。喰べた後はその儘でよろしいのでございます」そこで盤を又卓の上へ置き、大ような顔をして、誰か笑つて居はせぬかと周圍見廻す。出る段になり、かの値段札だけ勘定係りの處へ持つて行く。拂ふ前に一悶着あり。女史身體の蔭にてもじ〳〵紙幣を都河氏に渡さうとして「あの——女が男の方と一しよに參つた時は

必ず男の方が拂ふ事になつて居りますので、失禮なのですが先生どうぞこれでお拂ひ下さいまし。」都河男の方「あ、そうですか、いえ、なに、それでは僕が拂ひます。」女史「いえ、それでは、折角のわたくしの志が無になりますから、本當に後生ですが是非これでお願ひ致します。そう致しませんと――」女史は泣きそうな顏をする。押問答の後、男の方の金か女の方の金か今忘れたが、兎に角男の方が堂々と拂つて表へ出た。』

『米國の男の方(かた)は女の方に威張られたその上損も引受けるのですね。』

『そうと見える。それからオートマット(自働食堂)といふ方へ行つた。食盤を抱える事は同じだが、こつちには料理番が居ず町湯の着物棚のようなのを小さくして裝飾して硝子戸にしたのがずつと並んでる。硝子戸から中の皿の喰物が覗ける。匂ひだけは嗅げない。値段はどれも五仙單位(セント)だ。氣に入つたのを見立てると傍に落し口の小穴がついてるから、それだけの値段に應じて五仙の白銅一つでも、二つでも、三つでも、そこへ落し込み、ねぢを右に捻(ねぢ)ると硝子戸の蓋が開く、取出せるといふ段取だ。總じてカフエテリヤもオートマットも手早く片がつき、値が廉く、然も自由に選り好みが出來るといふのが特色だ。それが米國式でずつと流行そうな。客が自分で食盤を運んで行くところなぞ米國式ぢやないか。』

『上品振つた日本で、若し客にお膳を運ばして歩く料理屋が出來たら一人も入りませんね。』
『膳ぢや駄目だ。洋食式だとハイカラに見えるから地震前に京橋際のある製藥會社の階上でこの眞似をやり相應に繁昌してたそうだ。そこを出てから『婦女界』の愛讀者の會へ行つた。

二人は會から記念に電氣のつく自由の女神の模型を頂いて戻つたが、この間の地震で手が折れて不自由の女神になつた。けれども紐育と地震を兼ねての一層の好記念像にはなる。こゝで有難くお禮を申述べて置きます。』

『あなたの禮のいひようはいつも時間と空間を超越して居る、勝手な性分ですね』
『余談、余談。これは又ある自由行動の日の朝、美術學校の同窓生のHMが突然訪ねて來た。この男がこんな處に居ようとは思はなかつた。この男は器用な性質で、學校に居るうちも會合の時は琵琶を彈いたり、一寸芝居の眞似ぐらゐしたが、久し振りの歡待に彼は米國に於ける日本移民の聲色を使つて聽かせた。こうだ。「ユー（汝）とミー（我）とこうやつて働いては居るけれど、毛唐の奴等アが何といへばヂヤップ〳〵と排斥をする。もう一年二年リーズ權（土地貸借權）のある内はこう働いて早う日本へ歸らうや」これは耕地に耕しつゝある日本移民の夫が妻への嘆きだ。も一つは「ほいぢやあ、ミー等はこれで歸るけんのう、ユー等ア、身體を大切にしてのう、あの金は正金（銀行）で送るけい

のう」これは病妻を國元へ歸す、波止場の夫の離別である。日本の地方人の訛りと、かすかに出稼先で使ひ覺えた英語の單語とちやんぽんの處が如何にも彼等を現して居る。そしてその語るところ、僕は興味を覺えるより先に悲痛の感じが胸にせまつた。これは一つ蓄音機に取つて日本の有識者諸君にも聞かせ度いものだ。』

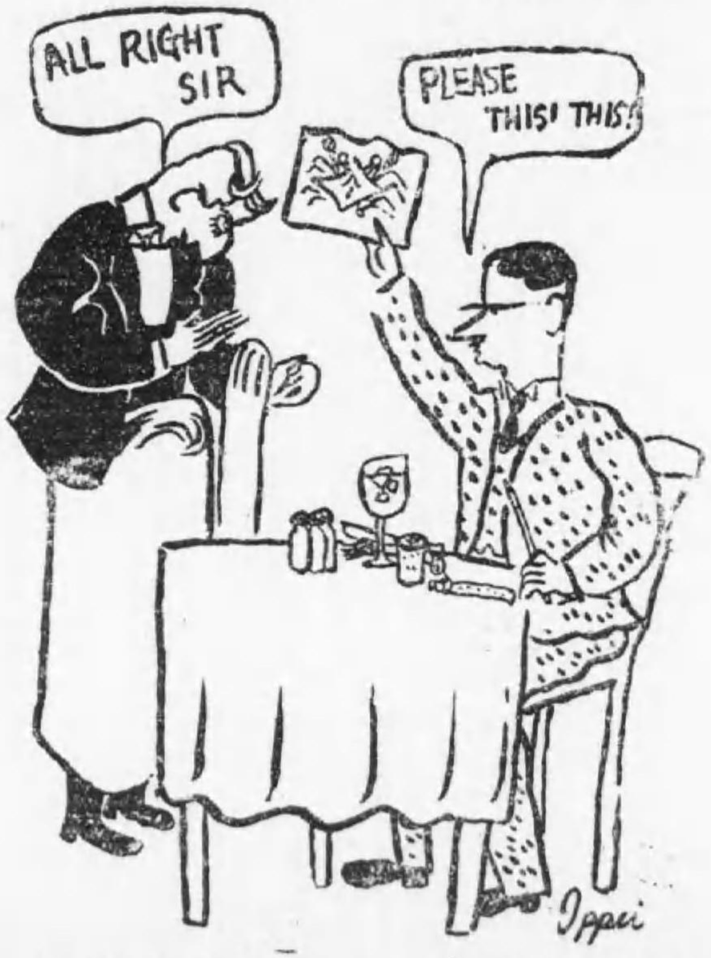
『また此の頃、米國は移民法を引締めましたね。』

『困つたものだ。――それは兎に角として、このHMはわれ等繪畫に携はるものに重要な事を一つ話して呉れた。それは近頃の繪畫の新興運動は多く佛國のバリーで育くまれるが、出來た作品は少し特色のあるものは、どし〳〵金に飽かして米國へ買つて行く。だから、それを觀るには寧ろ紐育の方が集まつてるといふ事だ。』

『へぇ。そして米人は判るのですか。』

『新奇と刺激といふ事だけは判るのだらうね。內容の深味はどうだか。しかし多少紐育の畫家にも新しい運動はあるそうだ。HMに連れられて、兼て案內を受けて居た郵船會社支店長の勝山氏の店へ行つた。店で小さい日本人が脊の高い米人の若い女タイピストを使つて居たのは愉快だつた。勝山氏は店員で然も立派な文學家の長沼氏に紹介して呉れられた。ついでフロレンス、テーヴンといふ料理店

A Japanese Cartoonist's Idea



Ippei Okamoto, chief cartoonist of the Asahi Shimbun of Tokio, Japan, stopped in The World office just befor sailing for England Saturday, on a world tour. "I cannot speak English.," he said, "so in your restaurants I make my wants known by drawing pictures. On one menu I thought I saw 'crab' and ordered it. The waiter brought me what you call a club sandwich. I then drew the picture abbve and he brought me crabs. The cartoon is a universal language. I hope through my cartoons to promote harmony between Japan and the United States."

His work is done with a brush

で貴餐な饗された。昔ワシントンが泊つたとかいふ由緒のある古風な造りの家。入口を入るとワシントン時代の鬘を冠り、紅い上衣を着た番人が帽子外套を受取つたには一寸驚いた。食事は現代の海老が現代料理で出た。階上にワシントンに因んだ、繪畫文書が蒐められて居た。午後朝日新聞紐育通信員藤田君に導きされて米國一の新聞ワールドの社に漫畫室を訪問した。世話監督の記者が一名、漫畫家は三人居た。一番大將のフルッチ君は脊の高い青年、藝術家肌の澁い拔作のような顏をして居る。上衣を脫いでるが下着もだらしが無い。他の二人は身奇麗な瀟洒たる若者だ。鐵の支柱に自由自在に傾斜する畫板の上で働いて居た。畫道具は日本の漫畫家同樣亂れて汚い。畫家と畫家の挨拶は別段拙い英語を數多く喋らずとも濟む。あは、あは、と口を開けて會釋すれば、

「うん、お前日本から來たのか」「こつちでも相變らずやつてるね」の意味は通ずる。そのうち編輯の人が來て僕に米國へ來た記念に一枚何か書いて行け、あすの新聞に載せるといふ。若い漫畫家達が描く支度をまめに世話をして呉れる。厚い光る洋紙を例の傾斜板に載せ、ペンを貸して呉れようとするから、こつちは例の竹の矢立を取出した。一同眼を瞠る中に、いづれは日本漫畫家の估券にも係る事だと、臍下丹田に力を籠め、懸腕直筆、顏眞卿の筆の持ち方で下圖も取らず紙へ打付けにする〳〵と描いて見せた。例の桑港で僕が蟹の料理を注文するのに蟹の繪を献立表の裏に描き示すところだ。そし

て說明文を藤田君に應援して貰つて「繪は萬國共通のエスペラントなり。予はこの共通語を用ゐて日米國交の融和に資せんと努むるものなり」と描いた。監督君は手を打つて悅んだ。フルッチ君がにやりと笑つた。僕も名譽の事だから翌朝、登載のワールド紙の拙畫をこゝに見せる。畫にはそのいはれの說明文がついてる。これだ。』

『あなたも仲々芝居氣がありますね』

『誰でも外國に出ると出來なくても日本を背負つて立つ氣になるものだよ。例へば日本で芝居一つ覗いた事のない敎育家の女留學生が、向ふの集席で日本人だから日本の民謠を聽かせろとせがまれて顏に火の出るような聞き覺えの俗謠を一世一代でうたつて仕舞ふのと同じだ。巧拙は無い。日本人の度胸だけを買つて吳れ。たゞこの女敎育家の俗謠と違つて、僕は描く事は身の職だから、多少腕に覺えがあつた。幼時狩野派で仕込んだつけたての打つつけ書きは一寸外人には放れ業に見えたらしい。あとは今考へてもおはもじ樣だ。僕が描いた禮に監督君はフルッチ大將を勸めて切紙細工をやらせた。フ君、一寸氣の向かぬ顏をしたが、それでも用箋を二つ折り三つ折り四つ折りにして鋏を取上げると暗んじてる樣にさつさと切放つた。切放つた紙片を開いて机の上に立てると、象、犬、きりん、なぞの形だ。やんや。やんや。それの外に、同君の原稿、自畫像なぞに署名して貰つて、僕は又

お禮に自著一二冊贈り、氣持ちよくそこを訣れた。訣れしなに彼の原稿の描きざまがどうもペンのようでないので訊くと、むづりと笑つて、ナイフでペン軸の尻を削り、手製のペンを作つて剛柔自由な線をひいて見せた。フルッチ君は佛國にも留學し、例の米國の通俗續き畫漫畫描きより一頭地を抽んでゝ居る。藝術的の漫畫家だそうな。成程、リテラリ、ダイゼスト誌に出て居る似顔畫なぞは高級なものだ。』

『その人が米國の人氣ものですかね。』

『いや人氣は例の續き畫漫畫の筆者にある。當時、マクナマス、フイッシャの兩氏が兩大關だつた。兩氏の作物はこの頃日本で流行り出した米國漫畫の中に輸入されて來て居る。米國の漫畫家はその一つが當れば二年三年五年と廢るまで押して行き、人氣が止まればその人は消えて無くなる。その代りその短期間に一生の生活が出來る程の收入があるそうだ。ず一つと前に述べたように、一枚描けばそれを通信社で米國のみで無く海外にまで販布させるから』

『米國の漫畫家は野球の職業選手と同じですね』

『あゝ。彼等もそういつてたよ。畫はアート(藝術)では無い。ビジネス(仕事)だと』

『それも悟つた考へですね。』

『そうとも。新聞社を出て長沼君の宴へ一寸寄つた。長沼君は紐育に十年以上居り、有名な紐育通だ。米國ゐ通る藝術家は大概、君に手數を煩はす。グリンウィッチビレーヂ俗に文士村といふ場所に住んでる。こゝは所謂藝術的の自由な生活を好む人許り寄つてるそうな。晩はペッパー、ポットといふ會員組織になつてる變つた料理店へ行つた。文明の紐育の中にあつてわざと蠟燭をつけて食事させる。その蠟燭臺も蠟の垂れ流しを自慢にしたものだ。壁は漫畫の樂書き。卓上も壁も骸骨を描いた骸骨の間なぞある。そこで喰つてはダンスを亂舞するのだ。一寸探偵小說の中に居るような氣をさせる。』

『それで紐育はおしまいですか』

『一つ地下鐵道に乘つた氣持ちを話そう。地中のステーションも軌道も明煌々として地下の氣はしないがね。走り出すとが一つといつて話も何にも聞えない。そして中の一つのステーションを出て上るとペンシルヴエニヤホテルの廣間へ通じて居た』

增補『世界一周』の繪手紙

◎第三十二信

『紐育はそれでおしまひですか』

『出帆の前の日、信濃の代議士とワシントン府へハーデング大統領に遇いに行つた。』

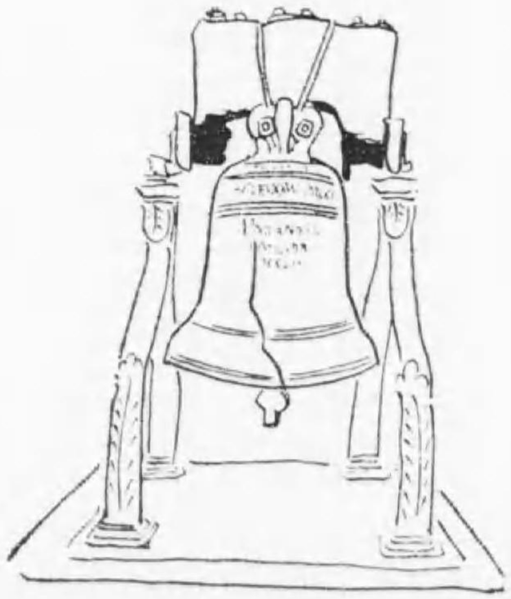
『そいつは偉い』

『まあそう早く感心せずに落付いて聽けよ。こうだ。先づ大統領に面會の都合を賴む爲に信濃の代議士と僕とでワシントンの日本大使館へ向け手紙を出して置いた。申込んだ日附の日が丁度出帆前一日の四月二十一日だ。その日早起きして、紐育の米國通、安井さんといふ人に連れられ出かけたものだ。汽車の途中で一寸車を降りてフキラデルヒヤを見物した、多少落ち付きの出來た舊い市だ。一つの粗末な建物の中に入ると法廷のような構へに見える廣間の奥に有名な「自由の鐘」が置いてある。米國の獨立が決まつた時この鐘を鑄造して叩いたのだそうだ。大きさは小さな米俵ぐらゐはあるかな。それが鯨われがして鎹で止めてある。あまり嬉しがつて叩き過ぎて叩き破つたのだ相な。さもあらう

と思はれる。例によつて矢立と筆とを取出して寫生してると守衛が來て停めた。そして寫生した頁を手帳から破つて捨てた。その時は不服だつたがあとで考へて見ると成程こうちが至らなかつた。この鐘はアメリカ建國創業の寶ものだから、日本の三種の神器にも比すべき神聖なものに違ひない。』

『米國でもそういふ勿體ないものがあるのですかね』

『誰でも一寸そう思ふね。そうかと思ふと、今度は他へ行つて平凡な建物の中へ案内する。こゝはワシントンの知合ひのエリザベス、ローズ夫人が始めて米國國旗をウイリアムバレットといふ講家の圖案から工夫して縫ひ上げた所だそうな。其部屋は暗いつまらぬ部屋だ、がこゝだとて意味からいへば神聖な場所ではないか、それだのに土足で見物を入れて、出口の廣間では始めてその夫人の工夫した時の旗の雛型や自由の鐘の模型やエハガキを賣つてる。神聖なのだから七五三飾りでも結つて御簾でも垂らして置きそうなものだ』

『寫生を停められた八當りに大部喰つてかゝりますね。ですが。へー。アメリカの國旗はその何とかいふ奥さんが工夫したのですか。僕は又ワシントンが考へたのかと思つた』

『ワシントンといふおやぢはお人好しの人に擔がれる德望だけがあるおやぢで、智慧は無かつたのだとさ。旗なぞ小器用に考へられるものか。ワシントン許りで無く、一體米國で歴代大統領になるもの